
魔法少女まどか マギカ INDIVIDUAL ORIGIN

銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ INDIVIDUAL ORIGIN

【Nコード】

N9493V

【作者名】

銀河

【あらすじ】

この作品は、『魔法少女まどか マギカ』原テレビアニメのストーリーに沿ったノベライズを試みるものです。

書く動機はただ一つ、ほとんど物語不成立、と断言しても構わないほどの、致命的な矛盾を抱える原ストーリーの補完です。最大のポイントは、暁美ほむらと（現時空間の）キュウベエの関係、という点になります。

他に連載中の作品があるので、作者としても心苦しいですが、しばらく、こっちを優先して発表していきます。

作者注は、<http://ncode.syosetu.com/n9064/> の第8部以後を御覧ください。

0 改稿終了。サブタイトルに がついてます。(第十話まで9/1
1 2 : 0 0 現在)

鹿目家の朝

色が消えていた。

灰色の空に黒々と突き上げるビルは、どれもこれも壊れていた。崩れていた。

地表は水に覆われ、車が流され、ひっくり返し、電柱が折れている。

街が、完全に破壊されていた。

まだ小さかった頃、何の映画だったか、ドラマだったか、テレビで見た核戦争後の地球にそっくりだった。

空に巨大な何かが浮いている。

それは回転する巨大な歯車。よくよく目を凝らせば、歯車の下には、逆さになった人形。

水しぶきを上げて、水面ぎりぎりを飛んでくる物体、それは、驚いたことに女の子だった。長い黒髪をたなびかせ、セーラー服に似たコスチューム。

水面からはねあがったビルの破片が、次々と空飛ぶ女の子めがけて襲いかかる。彼女は、腕に取り付けた盾を体の前に構えた。彼女を取り巻くように、たくさんの細長い物体が現れる。それはミサイルだった。襲いかかるコンクリートの塊をことごとく打ち砕く。そして、空で回っている歯車にも何発かが向かった。

爆発の火焰と煙。遅れてくる、耳をつんざく轟音。

思わずつむってしまった目を開くと、薄らぐ煙の向こう側で、歯車は全然無事に回っていた。

宙を舞う女の子に、再び襲いかかるビル。今度は破片ではなかった。地面から抜き上がったビルそのものだった。

第一撃はひらりとかわしたが、第二撃が女の子を直撃した。ビルはそのまま地表に落ちて、高く水しぶきがあがる。ややあって猛烈な破壊音、揺れる足元。まどかは、悲鳴を上げ、その場にうずくま

った。

(大丈夫、まだ生きてるよ、彼女は)

どこからともなく聞こえてきた声は、気持ち悪いほどに落ち着き
払っていた。

「何？ 何なの？」

顔を上げたまどかの目の前に、白い猫がいた。いや、猫ではなかつた。両方の耳の中からもう一本づつ長い耳が生えている。赤く丸い目。見たこともない不思議な生き物。

「ほら、彼女は、また攻撃を始めた」

猫のような生き物は口も動かさず、しかし、確かに言葉をしゃべっている。

爆発音が聞こえる。顔をそちらへ向けると、また歯車の浮いていた場所が煙に包まれていた。飛んで向かっていくあの女の子。

忽然と視界を遮り現れる巨大ビル。女の子は避ける間もなく跳ね飛ばれて、崩れた高速道路の高架に叩きつけられた。

「…ひどい！」

「何を酷いと言うのかな？ 鹿目まどか？」

猫もどきにとっては、陰惨な光景も、巨大歯車と空飛ぶ女の子の戦闘も、ただの風景に過ぎないというのか。

「だって！」

まどかの叫びは、猫もどき個人(?)に対する抗議というよりも、嫌悪感すら催す無関心の響き、に対する拒否の声だった。ところが猫もどきは、

「最初からわかっていたことさ。彼女一人では荷が重すぎたんだ」と、戦争映画の残酷な場面を見ながら、歴史年表を朗読しているが
ごとき姿勢を変えない。

アスファルトに叩きつけられた女の子が、苦しそうに身を起こすのが見えた。遠く、点でしかなかった女の子の表情まで、はっきりと見えた。

女の子と目が合った。女の子は確かにこちらを見て、自分に向か

って何か叫んだ。しかしその声は聞こえない。代わりに耳に飛び込んだのは、コンクリート同士が衝突する衝撃音だった。空気の振動が肌をも震わす。空を覆い尽くす巨大なビル残骸が、女の子のいた場所を押しつぶした。

まどかは両手で顔を覆った。声にならない声。とても見ていられなかった。

「鹿目まどか、君は、彼女を、助けたいと思うかい？」

その言葉に思わず顔を上げると、猫もどきは憎たらしいほどに落ち着いた様子でこちらを見ていた。

「鹿目まどか、君は、この状況を、何とかしたいと思うかい？」

「…何とかって、何とかなるの？」

「もちろんさ。鹿目まどか、君にならできる」

突如、身体が後ろに引つ張られる。重力の方向が真横に変わった。目に見えていたものが怒涛の勢いで流れて消えた。

そして、まどかは見た。

首のない、黄色いフレアスカートの少女。

血の海、前のめりに倒れた青いミニスカートの少女。

ズタズタの赤いノースリーブ、槍が身体に突き立ったままの少女。舌を刺す酸っぱさ、胃液が食道を焼いて逆流し、口から飛び出しそうだった。

（鹿目まどか、君は、あの子たちの最後を、悲劇だと思うかい？）
猫もどきが、同じ姿勢のまま、まどかを見下ろしている。

「鹿目まどか、君は、あの子たちを、助けたいと思うかい？」

「助けてあげて！ お願い！」
ほとんど反射的に出た言葉。

「鹿目まどか、君が助けるんだよ。君にならできる」

「何で私が？ できるわけないよ！」

「いや、鹿目まどか、君の願いは間違いなく実現する。我々はその手助けをすることができる。だから……」

光が消えた。闇だけが残っていた。

(我々と契約して、魔法少女になってよ)

ガバツと身を起こすと、ベッドの上だった。

「…夢？」

目覚まし時計のブザーがけたたましく鳴っている。

ブザーを止め、もぞもぞと立ち上がる。カーテンの隙間から漏れる光は明るく、今日も天気は良さそうだ。

シャッとカーテンを開け放つ。澄み切った青空が広がっていた。

二階、南に面した窓を開けると、朝の冷えた空気が飛び込んでくる。真下に見える小さな菜園では、エプロン姿の父知久が、しゃがんで今朝使うパセリを収穫していた。

「おはよう、パパ」

父は振り返って、ほっとする笑顔をこちらに向けた。

「ああ、おはよう。キッチンに入る前に、ママを起こしてきてくれるかい？」

「…また？」

まだかは、やれやれと思ったが、首を引っ込めると、急いで両親の寝室に駆けつけた。母詢子は、ダブルベッドの上、一人毛布を抱えて丸まっていた。

「マーマツ、あさー、あさー」

まだ三歳にならない弟達也が、ベッドの脇から全身の力を込めてゆすっていた。微笑ましい光景ではあるが、残念ながら母は、一切無視を決め込んでいる。

まだかは素早くカーテンを開け放つと、母の耳元に口を寄せた。

「遅刻するぞー！」

かっと目を見開く母の隙について、がばつと毛布を奪い取る。

「うわあつ！」

おかしな声を上げ、おかしな格好をして、母は起き上がらざるを得なくなった。

「うー」

完璧に眠そうで機嫌の悪い母を尻目に、まどかは、ポカンとして
いる達也にむかって自慢した。

「ママはね、こうやって起こすのよ」

「こら、変なこと教えるんじゃない!」

ようやく、しゃきつとする母。

「変なこと教えられなくなったら、私より先に起きてよね」

母は乱れた髪を気にしながら、つぶやくように言った。

「まどか、あんた最近、言うことがきつくない?」

まどかは素早く制服に着替えると、階段を駆け降りてキッチンに
向かった。父がフライパンの上に玉子を落とすところだった。

「パンが焼きあがったらバターを」

「はい」

エプロンをして、焼きあがったパンにバターを塗る。父と二人で
朝食の用意をする、これがまどかの朝の日課だった。一方母は、居
間のテーブルに座り、パソコンに向かってネットにアクセスしてい
る。メールや予定表のチェック、海外市況の確認など、仕事の準備
に余念がない。ようするに鹿目家は、母詢子が外で働き、父知久は
専業主夫なのであった。ところが両親は、まどかに小学生の頃から
ずっと家事仕事をさせていた。毎朝毎夕の食事の準備と後片付け、
日曜日の掃除洗濯はほぼ全て、それ以外でも家にいるときは、すぐ
に何か仕事を言いつけた。さすがに中学に上がってからは夕食の準
備ができなくなったし、後片付けより宿題や予習を優先しなければ
ならなくなった。それでも、まどかに常に家庭のことを意識するよ
うに仕向けていた。

まどか自身も、いやいややらされている、ということではなかつ
たので、習慣として当たり前のようになしていた。

「ママ、準備できたよ!」

「はいはい」

母は達也をチャイルドシートに座らせ、自分も椅子に座った。テ

ーブルにはコーヒーにトースト、目玉焼き、レタスのサラダ、ヨーグルト、という何気ないメニュー。しかしながら、パンとヨーグルトは自家製であるし、コーヒーも生豆を手間暇かけて煎ったもの。いずれも父がほぼ半日を費やして準備したものだ。

母は一口コーヒーを飲んで、キツと父を見た。

「この豆はいつもと違う？」

「…口に合わなかったかい？」

「とんでもない。美味しい…これ、初めての豆よね？」

「ああ、エチオピアの最近売りだされた農場の豆なんだ。煎り具合がまだつかめなくてね。少し浅かったかな？」

「うーん、もう少し深くても…でもこれはかなりいけるわよ。」

「そうか。案外安かったんで、どうかな、と思ったけど、定番に入れても良さそうだね。」

父は嬉しそうに微笑んでいた。

朝食を終えると、まどかと母が並んで洗面所を占拠する。まどかが歯を磨いているうちに、母は最終的にメイクを整える。そのきびきびした手際の良さは、同じ女として惚れ惚れするほどだった。ただ、化粧品知識とか、具体的なメイクの方法は一切教えてくれないのだった。

まだ小さかった頃、一度「私もやらせて」とせがんだことがあるが、

（今からそんなことに興味を持つとロクなことはない）

と、怒られたので、まどかは素直にその言葉を信じて、本当に興味を持たなかった。だから、毎日横で見ているも、自分もやってみたい、という気すら起きない。興味がないから、道具の名前すらよくわからない。

「ところでまどか、和子はどう？」

和子とは母と学生時代の親友で、どういう因果か、今、まどかの中学校でクラス担任をしている早乙女和子教諭のことだ。

「どつて？」

「ほら、例の見合い、その後交際が続いてるらしいって」

「…うん、そうなんだけどね、一昨日あたりから雲行きが怪しいの」
母はふつと息を漏らした。

「急に不機嫌になったか？」

「うん、何となく」

「…和子もな、夫婦たつて所詮別の人間なんだから、意見や趣味が一〇〇%合うわけないのに、九〇%合っても残り一〇%がどうしても我慢できないタイプなんだよな。それで、どこかに一〇〇%合う人がいるはずだ、って幻想に取り憑かれてるのさ」

カップの水で口をすすぐまどか。

「…ママとパパは、どのくらい合ってるの？」

「そうだな…六〇%くらい？」

まどかが言葉に詰まっていると、母は最後に口紅を差して、鏡に向かつてキリツとポーズを取った。それからまどかに、反応を楽しむ視線を向けた。

「少ないと思う？」

「うん。ちよつと」

「あたしは、そのくらい違うからお互いに面白い、と思ってるんだけど」

「そうなの？」

「そんなもんさ。和子にも再三言ってるんだけどね、そこはあたしと意見が合わない。だけど、友人としては面白い」

母はにまつと笑った。

残念ながら母の話をやつくり聴いている余裕はなく、まどかは赤色のリボンを手を取った。昨日まで髪を結んでいた黄色のリボンが切れてしまったのだ。あいにく代わりになりそうなりボンはそれしかなかった。

「これ、ちよつと派手だよ…」

「そんなことないさ。恋人募集中の女子なんだから、その程度、地

味すぎるくらいだ」

「募集なんかしてない！」

母はさっさとリボンを奪うと、手際よくまどかの髪を二箇所結んだ。

腰をかがめてまどかと一緒に鏡を覗き込む。

「おー、いいんじゃない？ さっそく一人くらい男が告白してくるかもよ」

「そんな人いないってば」

「男の熱い視線、感じてないのかい？」

「そんなの感じるわけないじゃん」

「それはな、鈍いんじゃないかって、自分の女の器量に気づいてないだけだ」

「またそれ？」

もう何度も同じことを言われていた。

母は腕時計をちらっと見た。

「そうさ。まどかは、自分にもっと自信を持っていいんだよ。少女よ大志を抱け！」

にこやかな笑いを残して、母は先に家を出た。

夢の中で見た少女

大手鉄道会社が社運をかけて開発したという見滝原。なだらかな丘陵には色や形もとりどりの家が立ち並び、駅の周囲以外にはマンションなどの高層建築はない。何よりも空が広がった。

鹿目家は高台にあり、遠くに駅ビル群と巨大な風車が並ぶ見滝原風力発電所を見下ろす。

家から学校までは徒歩十分の距離。まどかは、今朝見た夢のことなどすっかり忘れて、いつもの朝と同じように掃除の行き届いた石畳の上を歩いた。

学校へ近づくにしたがって登校する生徒たちの姿が増え、公園脇の小道から合流してきたクラスメイトの美樹さやかの姿を見つけた。

「さやかちゃん、おはよう！」

後ろから追いついたまどかに、さやかは一瞬遅れて反応した。

「あ、ああ、おはよう」

いつもの明るい笑顔に、どこか陰りが見える。

「…どうかしたの？」

「え？」

「何か元気なさそうだけど」

さやかは、ぱっといつもの明るさを取り戻した。

「あ、ああ、別に。ちょっとさ、変な夢見たみたいで」

「変な夢？」

「うん、何か、すごくいやな夢だったのは覚えてるんだけど、内容が思い出せないんだよね」

しきりに首を捻るさやか。

「内容覚えてないのに、いやな夢ってわかるの？」

「そう。怖いとかじゃない、見たくないものを見た、って感じ？」

「この間言ってた、怖い夢とは違うの？」

「ああ、あれはさ、槍が飛んできたりしてホントに怖かっただけ。」

そういうのとは違うんだけど…ああ、もどかしい!」

「何がもどかしいんですの?」

二人の夢談義に割り込んできたのは、やはりクラスメイトの志筑仁美だった。

「おはよう、仁美ちゃん」

仁美は、どちらかと言うとボーイッシュなさやかに比べて、完璧にお嬢様、だった。清楚、という言葉そのままに、軽く頭を下げる。

「おはようございます、まどかさん」

この丁寧さにもいいかげん慣れてきた。

「お、おはよう、仁美」

挨拶のタイミングを外したさやかにも、仁美は丁寧に挨拶を返す。

「おはようございます、さやかさん」

一呼吸おいて、仁美は続けた。

「それで、何がもどかしいんですの?」

「あ、ああ、今朝見た夢がどうしても思い出せなくて」

「それ、よくあることですわ。私も、何度残念に思ったことが…」

仁美は、よよよと言わんばかりの、本当に残念そうな表情。その極端とも思える仕草にくすつと笑うさやか。

「残念つてことは、いい夢だったんでしょ? あたしの場合は、い

やな夢だったから」

「いやな夢でも、思い出せないのは残念ですわ」

きっぱりと言い切る仁美。

「いやな夢だったら、思い出さないほうが良くない?」

まどかががそう言うと、さやかと仁美、二人とも全然不同意だった。

「たといいやな夢でも、覚えてないのはくやしじやない」

「そうですね。いやな夢こそ大切。だって、何か重要な警告かもしれないませんもの」

おお、とさやかは感心した。

「なるほど、そういう考え方もあるね」

まどかは、あれつとひつかかるものがあつた。しかし、校門をくぐって教室へ向かう間に忘れてしまった。

見滝原中学校は、公立ながら文部科学省の先進中等教育モデル事業対象校の指定を受け、まどかたちが入学する前の年、従来の常識とは一線を画す新校舎が完成した。何よりも、初めて見る者の目を惹くのが壁のない教室だ。いや、正確には、全面ガラスの壁が教室と廊下を区切っていた。教室の配置そのものも、廊下に並行して前後連続して並ぶというのではなく、十六の教室が四×四、碁盤目のように置かれている。

教室正面には黒板やホワイトボードの代わりに、巨大なディスプレイが鎮座していた。パソコン上で作った資料や図書をスキャンしたデータ、ネットからダウンロードしてきた画像などを直接表示できるのももちろん、電子ペンを使って手書きの文字を表示することもできる。

ホームルーム、チャイムが鳴るのとほぼ同時に、早乙女先生が教室に入ってきた。母と同じ35歳、独身。

「遅れてごめんなさい」

「起立、礼」

日直の掛け声もどこか間延びしていた。生徒たちの目は教壇の方向ではなく、たった今早乙女先生の後ろを歩いてきて、教室の入り口で立ち止まっている一人の女子生徒に向いているのだ。背中まで伸びた長い黒髪、キリツとした鋭さを感じさせる目、人形のような整った顔立ち、間違いなく男子の視線を集めるであろう美人。

「はい、今日は、まず転校生の紹介をしたいと思います。晧美さん」
ガラスの扉を迷うことなく開け、すつすつと歩く姿、その風格さえ感じさせる落ち着き払った態度に、教室にいる全員の目が釘付けとなった。

早乙女先生も含め、教室にいる誰もが言葉を失う中、彼女は教壇の前に立ち、静かに一礼した。

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

教室内の中に、一人だけ彼女の顔に見覚えのある生徒がいた。まどかだった。

「うそ…」

そう、今朝、夢に出てきた、空を飛び、不思議な力を使って巨大歯車と闘っていた女の子、その人だったからだ。

絶対に忘れないで

暁美ほむらと名乗る転校生は、教室の廊下側の後方の席についた。まどかは窓側前方だったため、大きく振り返らなければ彼女の様子をすることはできない。

まどかは彼女の姿が見えなくなってからも動悸が収まらなかった。忘れていたはずの今朝の夢が、今この目で見ているかのように鮮やかに、頭の中でリピートしている。

「最後に、はいっ、中沢くん！」

早乙女先生の甲高い声に、はっと顔を上げた。それまで先生の話をも何も聞いていなかった。

突然指名された男子生徒が緊張の面持ちで立ち上がる。

「目玉焼きとは、固焼きですか？ それとも半熟？」

まどかには質問の意味がわからない。ところが、中沢もわからない様子だった。

「え……」

「どちらかであれば目玉焼きではない、なんてことはありませんね」

「……そ、そうだと、思います。人それぞれ、好き好きじゃないでしょうか」

「いい答えです。まったくそのとおり！」

先生はうんうんとうなづいて、自分一人納得すると、はたつとつむいてしまった。急にテンションが下がった。あっけに取られたのは、まどかだけではない。

皆が何事かと思っていると、これまた突然、きつと顔を上げた。

「はい、ホームルームは終了！」

そう言い残すと、先生はどことなく重い足取りで教室を出ていった。

「また、ふられたな」

「目玉焼きの焼き具合で揉めた、とか？」

男子生徒たちが小声で言い合い、あちこちで小さな笑い声も漏れる。

英語の女性教師がやってきて、教室のざわめきもピタリと止んだ。まどかは、視線の端に、転校生の姿をちらつと捉えるのがやっとだった。

英語の授業は淡々と進む。

「それでは、この問題を…今日からクラスの仲間になった、暁美さん」

教師の指名に、教室中の関心が転校生に集中した。最前列の生徒の中には、大胆に後ろを振り返る者さえいる。

彼女は黙ったまま立ち上がると、

「I have been studying English for over 10 years, but I am disappointed」

と言った。意味はわからないとしても、明らかに教師よりも流暢で、しかも上品な響きがする。

教師はじろりと彼女を見据えた。

「英語の授業だからと言って、全て英語でしゃべる必要はありません」

「私は、先生の名誉を考えて英語で申し上げました」

「…何か、間違っていましたか？」

「発音がデタラメです」

教室中の空気が凍りついた。

「暁美さんは英語に堪能なようなので、気になるのかもしれませんが、この授業はあくまでも日本人初学者のためのものです。英語としての正確さよりも、初学者の聞き取りやすさを優先しています」

「なるほど。納得しました」

転校生は何事もなかったように座った。

「まだ問題に答えていませんよ」

「その問題を私に答えさせることが有益かどうか、先生にはわかりだと思いますが」

早乙女先生よりも若いにもかかわらず、英語教師はできた人だった。

「そうですね。では、中沢くん」

「は、はいっ！」

中沢少年にとって、今日はずくづくついていない日だったのかもしれない。

一時限終了のチャイムが鳴った。英語教師は転校生に目もくれず、普段と同じ様子で教室を後にした。

もちろん、転校生は教室の中で完全に浮いていた。何やら人を寄せ付けないオーラが漂っている。そう感じているのはまだかだけではなかった。男子も女子も皆、ちらつとは見るものの、誰一人話しかけようとはしない。

その空気を眺めていた仁美は、一人敢然と転校生に近寄った。

「暁美さん、初めまして。私、志筑仁美と申します」

転校生は視線だけ仁美に投げたものの、すぐに正面に戻す。

「英語、とてもお上手ですね。イギリスにいらっしやっただのかしら」

「いえ」

目すら動かさず、ぶっきらぼうに答える。

「…いずれにせよ、先生にあんなことを言っではいけませんわ」

「そう、あなたには意味がわかったのね」

「ええ。私も幼稚園の時から英語を習っていますの」

転校生は、口の端に薄い笑いを浮かべた。

「ごめんなさい。ちょっと気分がすぐれないの」

仁美も一瞬言葉を失ったが、すぐに切り替えた。

「そうですね？ それなら、保健室に…」

「ええ」

すくつと立ち上がると、仁美を一瞥。

「ありがとう」

それはまるつきり独り言のようで、さすがの仁美も顔色が変わった。しかし、そんな仁美のことなどまるつきり無視するかのよう、転校生の視線はある一点に集中していた。

なぜか、まどかに。

夢の中でみた彼女の表情が脳裏に蘇る。転校生の瞳、奥で揺らめく冷たい炎。まどかは確かに知っているのだ。知っていることに戸惑う自分がある。

つかつかと歩み寄る転校生。その様子を見たさやかは、思わずまどかに駆け寄った。

「鹿目まどかさん、あなたがクラスの保健委員よね」

「え？ ……そ、そうだけど」

「申し訳ないけれど、保健室まで案内してくれないかしら？」

まどかが答える前に、転校生はくるりと体の向きを変えて、さつさと教室の外へ。慌てて追うまどか。

転校生は振り返りもせず、どんどん先に歩く。

「あ、あの…どうして私の名前を？ どうして私が保健委員だって知ってたの？」

「一応、早乙女先生から伺ったのよ」

「…そう、なんだ」

廊下の突き当たり、迷うことなく渡り廊下のほうへ。

「暁美さん！」

思わず出る大声。転校生は立ち止まった。

「なに？」

顔をこちらに向けようとしめない。

「保健室の場所、知ってるの？」

「ええ。それも先生に」

「…じゃあ、なぜ私に」

それには答えることもなく、再び歩き出す転校生。

「あ、あの、曉美さん？」

とりあえず呼びかけたものの、話しかける言葉が思いつかない。渡り廊下を半分ほど進んだところで、また立ち止まった。

「私のことは、ほむらでいいわ。私も、まどかと呼ばせてもらおうか」

「え……」

くるりと振り向く。

「まどか、あなたには大切な家族がいるでしょう？」

唐突な質問だったが、まどかはうなづいた。

「大切な家族のことを、一瞬たりとも忘れてはいけない。たとえ何が起ころうとも」

「…どうして？ そんなことを？」

「常に、自分の行動が家族を悲しませることにならないか、それだけを考えて」

別に否定するような内容ではないが、なぜ初対面の自分にそんなことを言うのか、まるで理解できない。

「もしも、家族のことを忘れてうかつな選択をすれば、あなたは全てを失うことになる。それだけは、絶対に忘れないで」

そう言い残すと、転校生はまどかの反応を確かめることもなく、背を向けた。

まどかは、足が動かなかった。後を追うのも忘れていた。今朝の夢が、たった今の言葉が、頭の中をぐるぐると回っていた。

すぐそこにある恐怖

「何、それー」

というのが、さやか第一声だった。

放課後、まどかとさやかと仁美の三人は、駅前ショッピングセンター内エントランスの噴水広場のベンチに腰を下ろした。もちろん話題は、今日来た転校生。

まどかは、渡り廊下で一方的に告げられた内容を事細かに話した。隠すような内容ではないから、二人に話しても問題はないと思った。何より、彼女の言動は常識では理解しがたいものだから、一人で抱えるのは無理だった。一応、転校生のことはクラス全員が知っておくべきだ、という大義名分もある。

「…もう、変わっている、ではすまない何かがありますわね」

仁美はアイスクリームをスプーンで掬いながら、しみじみと言う。「だけどさ、あの転校生、なんか、まどかこと知ってるみたいだね。今の話もそうだけど」

さやかの言葉は、まさにまどかの疑問、その核心をついていた。

「ええ。私も気になりましたの。私が話しかけたとき、まどかさんに向けた視線、ただならぬものがありましたわ」

「そうだよな。まっすぐまどかに向かって歩いて来たし」

そう言っつて、ペットボトルのお茶を飲むさやか。

まどかは、まだ開けていないペットボトルを手に持ったまま、思い切っつて言うことにした。

「あのね、実はね、今朝、夢の中でも会ってたの」

夢の中で、コスプレした彼女が空を飛んでいたこと、街を破壊し、たらしい巨大歯車に攻撃を仕掛け、破れ去ったこと。

「それ、ホントに彼女だったの？」

興味津々のさやか。

「うん、たぶん」

「SFチックな内容はともかく、彼女がまどかさんを助けに来た、という展開でしょうか？」

「…うーん、ちょっと違う…というか、その後をよく覚えてない、っていうか」

まどかの曖昧な言葉に、さやかも仁美も、軽いため息。

「私、どうしたらいいんだろう?」

さやかは両手を小さく広げた。

「そんなの、どうしようもないじゃん。とりあえず向こうの出方を
見る、しかないんじゃない?」

仁美もふむむとうなづいた。

「そうですね。質問攻めにしたところで、まともな答えしてくれる
方とは思えませんし」

「そうそう。まどか、こっちが気に病んでもしょうがないよ」

「うん、そうなんだろうけどね」

食べ終わったアイスクリームのカップを閉じた仁美は、壁の時計
を見た。

「私、そろそろ、お暇させていただきますわ」

「今日は何? お茶だっけ?」

さやかの質問に、仁美の顔が曇った。

「ええ…」

「例の先生、来るの?」

「まあ、私の気のせいかもしれませんが」

「気をつけなよ。仁美は美人だから」

「私より適齢の方が何人かいらっしやいますから」

「わかんないよ、男は。熟女より少女:よくいるじゃん」

「確かに私が一番下なんですけど、特に私だけ、ということではなく
て、ある意味生徒全員同じというか、そういう感じですから」

「ふうん…でも、用心に越したことはないわね」

「ええ」

仁美は、まどかやさやかには、いや、普通の中学生には、まず縁

がないであろう稽古事のために立ち上がった。

どんなに高尚な稽古事でも、それが人間のやることである限り、男と女の本能が顔を出すことがある。芸能界でもよくあることではないか。これはさやかか、さも当然のごとくに言ったことだ。まどかにはおよそ想像もつかぬ世界の話であって、それだけでも、さやかは偉い、と思うのだった。今の仁美の話でも、仮にまどかが相談されたところで、答えるすべもない。

「まどか、私もCDショップ行くから」

「うん」

仁美と別れたまどかとさやかの二人は、三階のCDショップに行こうとした。ところがあいにく、一番近道のエスカレーターは工事で停止中、エレベーターは二基とも上層階に行っただけ。しかも、お年寄りや小さい子供連れ家族の行列ができています。

「こつちのほうが近道だよ」

さやかは、店内改装中ということで白パネルで覆われている細い通路を指さした。その先は照明も外されて薄暗いが、すぐ先に階段があるはずだ。まどかが異を唱えるよりも先に、さやかは歩き出していた。しかたなく、まどかも後を追う。

通路は人がやっとすれ違えるくらいの狭さで、ところどころで直角に曲がっている。先はまったく見えないが、そんなに長くないはずだ。そのはずだった。

ところが、いくら歩いても階段が現れない。

先に進めば進むほど少しづつ暗くなっているのではないか、まどかが疑問を認識した時にはすでに、足元さえよく見えなかった。しかも、鳥肌が立つほどに寒い。

「ちょっと、これどういうこと？」

さやかか声が上げた時にはもはや、普通でない、ことは疑う余地すらなかった。

「戻ろうよ、さやかちゃん」

もとより、さやかにも異論があるはずはない。慌てて戻ろうと

した二人が振り向くと、完全なる暗闇だった。周囲に立っていたはずの仮設白パネルも無くなっていた。四方いくら手を伸ばしても、虚しく宙を彷徨うばかり。さっきまで聞こえていたはずのシヨッピングセンターのざわめきも完全に途絶え、二人の息の音、靴音、服のこすれる音以外、何も聞こえない。しかしながら二人は、お互いにお互いの姿がはつきりと見えているのだった。真性の闇であれば絶対にあり得ない状況だが、そんなことに気がつく余裕など、今の二人にあるはずもない。

「こ、ここ、どこー！」

まどかの叫びも、漆黒の闇としんしんたる静寂に虚しく吸い込まれるばかり。

「しっ！」

さやかが耳を凝らしている。

どこからともなく、幼い女の子の歌が聞こえてきた。日本語ではない。どこかで聞いたことのある外国語のようだが英語ではなかった。仮に英語だったとしても、まどかにもさやかにも、聞き取れるわけがない。

何かが飛んでいる。赤黒い蛾だった。それが何匹も何匹も、たくさん舞っているのだ。闇の奥から今度は、顔のない全身白くのとっぺりとした人型が現れた。一人、二人、続々と現れる。さやかは両手を広げて、まどかを隠すように手前に立ちはだかった。しかし、その高潔な義侠心をあざ笑うかのように人型は数を増やし、やがて二人を中心に円を描いて、遠巻きに取り囲んでしまった。隙間なく、びっしりと。

「や、やだ……」

まどかはもう立っていられなかった。体中、骨の芯から震えて、声も出なくて、目も開けられず、ただただ、さやかにしがみつくなかった。一方さやかは、なおも目を見開き、踏ん張って立っていた。

女の子の歌声がしだいに大きく、大きく響きわたる。漆黒から実

体化したように真っ黒く巨大な鋏が、二人の周囲をゆっくりと回りだす。開いたり閉じたり、そのたびに走る耳障りな金属音。

やがてさやかも意識が飛んでしまった。視界に鋏の動きが入っていても、もはや何も見えてはいなかった。

鋏がゆっくりと向きを変える。歌声に歓喜の調べが乗った瞬間、鋏は大きく開いて、一気に二人に襲いかかった。

固まって、なすすべもないまどか。さやかも、口を半分開けたまま、迫り来る鋏から逃げようとしなかった。

コスプレ少女と消えた転校生

鍔が、まさに二人の体をぶった切ろうとした瞬間だった。疾風が空間を駆け抜け、けたたましい金属音をたてて鍔は吹っ飛んだ。

やかましかった女の子の合唱がピタリと止まった。闇を切り裂いて光が現れ、瞬く間に二人を覆う。

ようやく我にかえったさやかは見た。眩い光の中、こちらに歩み寄る人影を。その人はなんと、見滝原中学校の制服を着た女子。長い髪をカールでまとめている。

「二人とも、怪我はない？」

さやかはただ、うん、と首を縦に振るだけだった。目は自然と彼女の胸に吸い寄せられてしまう。逆光の中、微妙な影で余計に目立つ、中学生とは思えぬ豊満な胸。ついでに襟のバッジが目に入ったので、その女子が三年生だとわかった。

「あなたたち、見滝原の一年生ね」

「は、はいっ！」

さやかが大声で答えたので、三年生女子はニコツと微笑んだ。

「いろいろ聞きたいことはあるでしょうけど、それは、魔女を倒してから」

さやかは、信じられないものを目にした。アニメでよく見かける魔法少女の変身、そのまま実写で撮ったかのように、本当に変身したのだ。自分たちと同じ制服を着た女子が。全身光に包まれ、制服は消し飛び、ヨーロッパの人形、あるいはおもちゃの兵隊を思わせる黄色系のコスチューム。とっさに思った。アニメのコスプレだ、と。

コスプレ少女は余裕の笑みをたたえて、どこから取り出したのか、白く長い銃を高く掲げた。

「じっとしていてね。すぐに片付くから」

シユバつと視界を圧していた光が消えると、さつきまで二人を取り囲んでいた顔のない人型は、うねうねと気色悪かった動きが止まり、まるで何かに怯えて後退りしているように見えた。あれほどたくさん宙を舞っていた蛾は、どこへ行つたのか一匹も見えない。やがてさやかも理解した。コスプレ少女が放つ神々しいまでの光、気高さ、かつこ良さ、とにかく圧倒的な何か、人型をビビらせ、蛾を追い払つたのだ、と。

そしてさやかは見た。コスプレ少女が銃を構えるの同時に、宙に数えきれないほどたくさん銃が現れるのを。

一斉に火を噴く銃口、遅れて猛烈な発射音。さやかは耳を塞ぎ、その場にうずくまった。

ピンポンパンポーン

「お客様のお呼び出しをいたします。先ほど、ワインをお買い上げいただきました、見滝原本町からお越しの加藤さま、いらっしやいましたら、お近くの店員までお声をおかけください」

恐る恐る目を開け、顔を上げるさやか。目の前に二階へ上がる階段が見えた。背後は白い仮壁に覆われた工事区画。

まどかはすぐ隣で、頭を抱え込んでうずくまっていた。

「もう大丈夫よ。魔女は退治したから」

コスプレ少女に変身したはずの三年生女子は、元通りの制服姿で、逆光の中悠然と立っていた。

「あ、あの…」

頭が混乱して言葉が続かない。

三年生女子は腰を落として、さやかとまどかの肩にそつと手を置いた。

「怖かったでしょうね。二人とも、信じられないものを見たのだから。でも、説明はちよつと待ってね」

それまで優しそうな微笑みを絶やさなかった三年生女子が、急に

険しい顔をしてキツと立ち上がった。

「そんなところに隠れて、何を見ているのかしら」

三年生女子の突き刺すような視線が階段の踊り場のほうを向いている。さやかはまたしても想像もしていなかった光景を見た。階段の影から姿を現したのは、なんと、あの転校生！

「あなた、あなたも魔法少女ね」

三年生女子など無視するかのようになり、彼女、暁美ほむらの顔はさやかを向いていなかった。しかし瞳は自分に向いていない。視線の先をたどると、そこにはまどかがいた。まどかも顔を上げて、彼女のほうをぼんやりと見ている。

「驚いたわね。見滝原中学に、私の他に魔法少女がいたなんて」

三年生女子の言葉を聞いて、さやかは反射的に指差し、叫んだ。

「転校生です！　うちのクラスに今日来た！」

「そう。なるほど。転校生ってわけね」

三年生女子も、彼女の視線がまどかに向いていることに気がついたのか、こちらをちらりと見た。

「あなたも、彼女たちを助けに来たのかしら？」

転校生は、ぐいつと視線を三年生女子に向けた。全身から放たれる沈黙の気配は怒り、しかし単純な怒りとも思えなかった。眼が、がっかりした、落胆した、と語っている。そしていきなり、ぐつと両手を握り、首を振りあげ宙を仰ぐ。

まどかがようやく立ち上がった。

「あ、あの、暁美、さん…」

彼女は、再びまどかを見た。まるで、今にも泣きだしそうな顔で、まどかが思わず身を引いた瞬間、消えた。彼女は何の動きもなく、その場でパツと消えたのだった。

ただ、階段だけがそこにあった。

嘘のように、あの転校生は消えていた。

キユウベえ現る (前書き)

出ました!

キユウベえ現る

「魔女の結界？」

思わず大声が出てしまっさやか。

三年生女子は苦笑いして、口到人差し指を当てた。

「す、すみません」

ショッピングセンターのカフェテラス、一番奥の席。並んで座るまどかとさやかの向かい側に座った三年生女子は、バママと名乗った。お互いの自己紹介もそこそこに、さやかは思いつくままに次々と質問した。ところがママは、いやな顔ひとつせず丁寧に聞き、大人の余裕すら漂わせる口調で答えるのだった。

「普通、人には見ることはもちろん、その存在を知る手がかりすらないの。だから、入ろうとしたって入れるものではないわ。でも、ごくまれに自分の意思とは関係なく迷い込んでしまう人がいるのよ。もちろん、生きて出ることにはできない。結界の外の人から見たら、忽然と姿を消した行方不明者、ということになるだけ。あなたたちも、危うくそうなるところだったの」

さすがのさやかも、自分の顔がひきつるのがわかる。

「魔女の結界に入らなければ何も問題がないか、というと、そうではないのよ。魔女は、自分が抱え込んだ呪いの分だけ、人々に災厄をもたらす。世の中で起きる事故や事件、病気だって、もちろんその全てが魔女の仕業というわけではないけれど、かなりの部分は魔女が関わっている。会社の倒産、夫婦の離婚、小さなところでは友達同士のたわいない喧嘩さえ、魔女が撒き散らした災厄ということもある」

常識ではとても信じられないような話も、ママが口にするると、疑う余地もない事実に見えるのが巴さん、不思議だ。

「その、魔女を倒しているのが巴さん、ですか？」

「ええ。でも、勘違いしないで。魔法少女は、正義感から魔女と戦

っているわけではないのよ。私たちは、ある一つの願い事を叶えるのと引換えに、魔女を退治する義務を負っているだけ。願い事の大きさによって義務の期間が決まってくる。大きな願い事を叶えれば、それだけ長い間、魔女と戦わなくてはならないの。もちろん戦いだから、必ず魔女に勝てるという保証なんてどこにもないから…」

「マミの瞳に妖しく鋭い光が揺らめく。」

「負ければ死ぬことになる」

「さやかは、マミの底しれぬ覚悟を見た、と思った。「願い事叶えるのと引換えに」とはどういう意味なのか？ 命がけであんな得体の知れない化物相手に戦うと言うのだから、さやかが自分のこととして想像しうる覚悟とは、おおよそ次元が違うだろう。同じ言葉で呼ぶのもためられる。」

「あの、願い事を叶えるのと引換えに、って、どういうことですか？」

「そうね、多くの場合、奇跡を起こす代償、ということになるわね」

「奇跡？」

「ええ。普通に受験したら受かりそうもない高校に合格する、とか、片思いの男の子と付き合いたい、なんてものも奇跡と言えば奇跡かもしれないけれど、真正銘、本当の奇跡を起こすことができるのよ。たとえば、現代医療では手の施しようない怪我や難病を治す、とかね。死者を蘇らせるとか、顔を変えるとか、身長を伸ばす、というようなことすら可能だけど、やったら後始末が大変。だから、可能だけとできないこともある。ふふ…体重を十キロ減らす、なら可能かな。でも、命がけで願うことではないわね」

「怪我や難病を治すとは、他人のものであっても可能なのだろうか？ だとしたら…」

「自分じゃなくて、他の人の病気とか怪我也治せるんですか？」

「それまで微笑みを絶やさず答えてきたマミだったが、突然、雰囲気が変わった。」

「もちろん可能だけれど、それは難しい話ね」

その言葉には明らかに、否定あるいは阻止といった、ネガティブ

な響きに乗っている。何か触れてはいけない話題だったのだろうか。
「…繰り返しただけれど、奇跡の代償は命がけの戦いなよ。自分が命をかけてまで他人の病気を治す、というのはどうということなのか、よくよく考えておかないと。その他人というのが親兄弟、ならまだしも、友達…好きな人、となると、ね」

肌がチリチリするようなママの視線は、あなたの淡い期待などお見通しだ、と語っている。

「その人の幸せを願っても、何の見返りもない。にもかかわらず自分分は命がけなのだ、ということを決して忘れてはいけない。ましてや…いえ、それだけよ」

何を言おうとしてやめたのか、質問する気にもならなかった。自分の淡い期待を完全に打ち砕く内容に違いないのだから。

勢いが削がれたさやかは、ようやく、ずっと黙ったままでいるまどかに気がついた。

「…どうしたの？ まどか」

まどかはぼーっとしていて、目の焦点すら怪しかった。

「ごめん…さやかちゃん、わたし、まだ、怖くて…体が震えてるの」

まどかの消え入るような言葉に、さやかははっとした。

「そ、そうだね。ごめん」

(女の子を怖がらせるのはよくないよ、バママ)

いきなり耳元で囁かれた、と思ったさやかは、キョロキョロあたりを見回した。しかし、それらしい人影などあるはずもない。

ママは軽く目をつむって、やれやれ、という顔をしている。

「キュウベえ、あなたこそ、女の子を驚かせてはいけないわ」

テーブルの上に白い動物。毛はなく、つるつとした皮膚。両耳の中から手のようなものが伸びている。猫に似てはいるが、どう見たって猫ではない。赤く丸い眼がこちらを向いている。

さやかが言葉を失っていると、猫もどきがしゃべった。口を動かさずに。

「はじめまして。我々は、たった今、バママから紹介があった、キ

コウブえだよ
「よ」

かかわらないほうがいい

(我々と契約して、魔法少女になってよ)

あの言葉と同じ声！ まどかの頭の中に、今朝見た夢が全て、色鮮やかに蘇る。

「ね、猫？　じゃ、ないよね」

ゴキブリやムカデを見ても全然平気、あの、さやかの声が震えていた。さやかとは幼稚園年長組の時から友達だが、こんな声は聞いた覚えがない。

「我々は、猫ではないよ。君たち人類の言葉で言うなら、我々は、別の惑星からやってきた者だ」

宇宙人の声はまるでシナリオの棒読み、いや、それ以上にひどかった。

「別の惑星って、つまり宇宙人ってこと？」

さやかの声は上ずっていた。それでも、質問すること自体すごいとまどかと思う。宇宙人なんて、アニメやマンガでは当然のように登場する。猫型の宇宙人だって、すぐにタイトルは出てこないが珍しくもない。しかし、現実にいるとなると話は全然違う。

「難しい説明を省けばそうなるね」

宇宙人の声、まどかは気持ち悪かった。聞いているだけで、体の芯がじわじわ内側から冷えていくような違和感に襲われる。

さやかは突然首を大きく動かして、あたりを見回した。幸いというべきか、前後左右のテーブルには誰もいなかったが、一つ向こうのテーブルに携帯電話機を弄んでいる大学生風の男が一人いる。

さやかは恐る恐る宇宙人に顔を近づけ、声をひそめた。

「他のお客に見られたらまずくない？」

「大丈夫。我々の姿は、選ばれた者にしか見えない」

「選ばれた者？」

「そうさ。魔法少女になる資格がある女の子、ってことだね」
それまで黙っていたマミが割って入った。

「キュウベえ、まだよく知らない相手を、変におだててはだめよ」
我々は、常に事実を言っているんだよ」

宇宙人は前足を伸ばし、首を持ち上げた。尻尾をくりっくりつと
二・三回大きく振る。

「ところで、君たちの名前は？」

「私は美樹さやか。で、この子が鹿目まどか」

勝手に紹介されたまどかは、慌ててさやかの横顔を見たが、とっ
さに抗議できなかった。

「なるほど」

宇宙人は、一度マミのほうに首を傾け、すぐに戻す。

「我々としては、鹿目まどか、美樹さやか、君たち二人にも、我々
と契約として魔法少女になってほしい」

宇宙人が言い終わらないうちに、またマミの鋭い声が飛んできた。
「キュウベえ、二人は、魔女の結界でショックを受けているんだか
ら」

宇宙人は人形のほうがよほどマシとさえ思える、表情のまったく
ない顔顔を、マミに向けた。

「なるほど。わかった。今日のところは遠慮しておくことにしよう」
マミはふつと軽く息を吐く。

「ところでキュウベえ、暁美ほむら、という魔法少女、知ってる？」
それは、まどかもさやかも知りたいことだった。

「バマミ、前にも説明したけれど、個別の魔法少女について、我々
は答えられないんだ」

「それはわかっているけど、そういう名前の魔法少女がいるか、い
ないかよ」

「なるほど。その名前については答えられる。なぜなら、あけみほ
むら、という名前を我々は知らない」

「知らない？」

とたんにマミの顔が険しくなる。

「バマミ、念のため確認するが、あけみほむら、と名乗る者は、本当に魔法少女だったのかい？」

「間違いないわ」

「なるほど。バマミ、君がそのことを間違えるとは思えないから、一番簡単な答えは、偽名を使っている、だろうね」

「偽名？」

さやかが驚きの声を上げた。

「で、でも、今日、学校で紹介されたんだよ。偽名で学校なんて入れるものかな」

さやかの言うことは正論だ。

「この国の戸籍制度が正確なのは知っている。だけど、魔法少女にとっては不可能なことじゃない」

さらりと言う宇宙人。まどかはもう、気分が悪くなってとても宇宙人を直視できなくなり、目を逸らした。

「彼女、転校生だったのよね、美樹さん」

「そうです」

「あけみほむら、と名乗る者を、我々が見れば、誰だかはすぐにわかる。我々と契約した者ならね」

「あなたが契約していない魔法少女、なんているの？」

「我々と契約した者だけを魔法少女と呼ぶのなら、我々と契約していない者は魔法少女ではない。当たり前だよ。しかし、この国で魔法少女という言葉は、アニメーションやマンガでありふれてるじゃないか。我々の知らないプロセスによって、我々と契約した魔法少女と同等の力を持つに至った少女がいたとしても、不思議ではないよ」

マミは、完全に納得した、という顔ではなかったが、腕を机の上に置いた。

「いずれにせよ、もし偽名を使っているとしたら穏やかではないわね。はつきりさせておく必要があるわ。キュウベえ、彼女が何者か、

確認してくれないかしら」

「我々に言えることは、あけみほむら、と名乗る者が、我々と契約した者か、そうでないか、ただだ」

「それで充分よ」

「なるほど。わかった。ただし、日数がかかるかもしれない。申し訳ないけれど、僕は、もう行かなくてはならない」

軽く首を傾げるマミ。

「最近ご無沙汰の上に、ちょっと帰るのが早くない？」

マミは言葉のトゲを隠そうともしない。

「前にも説明したけれど、我々にとって手のかかる魔法少女がいるんだよ。その点、巴マミ、君は、本当に我々の予想をはるかに越える存在だ。だから、我々の直接のサポートは必要ないだろう。我々の、君に対する信頼、と理解してほしい。そのような魔法少女は本当に数が少ないんだよ」

言い終わるや、宇宙人はするするっと音もなくテーブルから降りた。さやかがテーブルの下を覗き込んだ時には、すでにその姿はどこにもなかった。

マミは両手を広げて見せた。

「ごめんなさい。宇宙人だから、人間の常識は通じないってわかってるんだけど、ね」

「今の、キュウベエでしたっけ？ 巴さんは、えっと…彼、でいいのかな、と、契約して、魔法少女になったんですか？」

あんな体験の後で、しかもそれに加えて宇宙人に出会ったという、結構ショッキングな出来事の後でも、まるっきり平気なさやか。まどかは、本当にうらやましい、と思う。

「ええ、そうよ」

「どんな願い事をしたんですか？」

すつとつむくマミ。

「あ、ご、ごめんなさい。そうですね。聞いちゃいけないことですよね」

慌てて謝るさやかに対する、マミの眼差し、真剣さ、マミはただ優しいだけではないのだ。

「美樹さん、このことにはかわからないほうがいいわよ」

「え？」

「さっきも言ったとおり、魔法少女は、命がけの戦いを強いられるのよ。私も、いつ行方不明になるかわからない。それに実際、一人死んだ魔法少女を知っているの。他にも行方不明になってる子がいるわ」

言葉を失うさやか。

「キユウベえに目を付けられてしまったから、もしかすると直接あなたたちの前に現れるかもしれないけれど、はっきりと、魔法少女になる気はないって断って。はっきり断れば、彼は二度と現れないから」

マミはすくつと立ち上がった。

「今日のことを忘れろ、と言っても忘れられないかもしれない。でも、忘れたほうがいい。この先、長い人生を考えたら、ね」

マミは、二人の前にそれぞれ小さな四角いプレートを置いた。

「それを持っていると、魔法少女とテレパシーで話することができるの」

先に手に取るさやか。金属でもなく、プラスチックでもなく、固いが不思議な手触りだった。

まどかも手に取ったのを見て、マミは目をつぶった。

(こんな感じだね)

頭の中に直接響くマミの声。

ギョツとする二人に、マミは優しく頼もしい先輩に戻っていた。

「しばらくの間持っていて。もしキユウベえがしつこくつきまとうようだったら、遠慮なく私を呼んでね」

マミは通学鞆を持った。

「今日はまっすぐ家に帰ったほうがいいわ。いつもと同じように、できるかぎり、さっきの出来事を考えないように」

マミは、本当に優しい微笑みを残して、先に立ち去った。
後に残された二人はしゃべるのも忘れて、しばらく座ったままだ
った。

いちいち消える人

自宅マンションに戻ってくるマミ。エントランス入口に、こちらを向いて立っている人影に気がついて、階段の手前で立ち止まった。見知らぬ人物でもなく、友好のうちに挨拶を交わすような人物でもない。

見滝原中学の制服を着ている彼女、見間違えるはずもなかった。

「暁美ほむらさん、だったかしら、なぜここに？」

「話があるの、バママ」

「…なぜ私の名前を？」

「あなた、結構有名人よ。魔法少女の世界では」

「そう、それは光栄だわ。でも、あなたは本当に魔法少女なの？」

「ええ」

「ということは、暁美ほむら、というのは偽名というわけね」

ところが彼女には、その問いも予想の範囲内だったようだ。

「キュウベえが、私の名前を知らない、と言ったんでしょうね」

「…あなたはキュウベえを知っている、でもキュウベえはその名前を知らない。偽名を使ってまで見滝原中学に転校してきたのはなぜ？」

「キュウベえが嘘をついている、という可能性を忘れてはいないかしら」

「キュウベえに、そんな嘘をつく理由はないわ」

「相手は宇宙人なのよ。人間の理屈は通用しない」

「それはそのとおりだけど、いずれにせよ、私にとって、あなたが不審な人物だ、ということに変わりはないわね」

「私を信用しろ、とは言わない。ただ警告しに来ただけ」

「警告？」

「鹿目まどかと美樹さやか、あの二人を魔法少女に誘ってはいけな
い」

その時、マンションから出てきた老婦人が、二人に訝しげな視線を向けて、そのまま駐車場のほうへ歩き去った。

「場所を変えましょう」

マミが提案すると、ほむらも黙ってうなづいた。

公園の長手ベンチに離れて座る二人。

「警告とは、いったいどういうことかしら？」

「バマミ、あなたは、魔法少女が命の危険に晒されている、という事実を軽く考えすぎている」

「初対面の相手にずいぶんと勝手な想像を言うのね。あなたが私の何を知って、そんなことを言うのか知らないけれど」

ほむらは答えなかった。マミもほむらの返答など期待していない。

「魔法少女の戦いは常に死と隣り合わせ…軽く考えたことなんて一度もないわ。一人、魔女に殺されるのをこの目で見たもの」

彼女は目を見開いた。

「…そう」

驚いている。リアクションは小さいがかなり驚いている。動揺している、と表現したほうが適切だろう。マミは彼女の言葉を待たずに続けた。

「それに私は、あの二人を魔法少女に誘おうなんて、これっぽっちも思っていない。特に、美樹さんは契約したくなる事情を抱えているようだったから、うかつにキュウベえと契約しないよう、それこそ警告しておいたわ」

ほむらはまじまじとマミを見た。そしていきなり立ち上がった。

思わず、身を引くマミ。友好的でないことは確かだが、あからさまな敵意も感じられない。

「…な、何？」

「いえ、私、あなたのこと誤解していたようだわ。ごめんなさい」
深々と頭を下げる。

マミは、彼女が頭を上げるのを待ってから言った。

「失礼だけど、曉美ほむら、というのは本名かしら」

「ええ」

「魔法少女、なのよね」

彼女はゆっくりと左手を差し出した。その手に乗っていたのは紫色の光を放つ、小石大の寶石状物体。

ママも左手を差し出す。その手には黄色い光を放つ、まったく同じ形の物体が乗っていた。

どちらも、キュウベえと契約した魔法少女であることの証、ソウルジェムだ。

「…なぜ、キュウベえはあなたの名前を知らないの？」

ほむらは手を引つ込めた。ソウルジェムは指輪に形を変えて彼女の指に収まった。それも、ママのソウルジェムとまったく同じだ。

「正直に言っわ。キュウベえが私のことを知らないのは当然。嘘は言っていない」

「…どういうこと？」

長い黒髪をさつと左手で流す彼女。

そして、背を向けて言った。

「ごめんなさい。さっきも言ったとおり、私はあなたのことを誤解していた。それについては謝らなくてはならない」

そのまま彼女は歩き出した。

「長く引き止めてごめんなさい。今夜のところはこれで引き上げるわ。いずれ、ゆっくりと話し合いますよ」

言い終わるか終わらないかのうちに、彼女は消えた。人気のない夜の公園。この場にもう一人いたことが幻であるかのように。

「…いちいち消える人なのね」

まどかは運がいい

まどかは、気がついたら家の前に立っていた。

どこをどう歩いて帰ってきたかさえ、とっさに思い出せない。

「ただいま」

いつもの習慣でそういう声が出ただけ。心は乗っていない。自分でもわかる。

キッチンでは父が夕食の準備をしていた。

「おかえり」

「うん」

父の顔色が変わったことには気がついたが、そのまま洗面所に向かう。

いつものように、Tシャツに着替えて、エプロンをして、キッチンに戻る。

「今日のメニューは？」

「ロールキャベツだよ」

「そう」

父は横目にまどかを見た。

「学校で何かあったのかい？」

「え？」

「落ち込んでいるように見えるから」

「うっん、別に……」

うっむいたまま、無理に笑顔を作ろうとする。

「あまり無理することはないよ。学校でいやなことがあるのは当たり前なんだから」

顔を上げ、父を見るまどか。

「僕自身の経験から言っても、中学時代はいろいろあるものさ。僕も中学生の時には、いやなこと、腹の立つこと、本当にいろいろあった。あんなことしなきゃよかったって、何度後悔したことか。も

ちろん、楽しいこと、うれしいこともあったけどね」

黙って父の言葉に耳を傾ける。

「人は笑ってばかりじゃられない。落ち込むこと、泣きたくなくなるようなことだつて必ずあるんだ。もちろん、親に言えないようなこともね」

「パパ……」

「僕だつて、父さんや母さんに言えないことがたくさんあった。だから、まどかが僕やママに言えないことを抱えているとしても、それは不思議なことじゃない」

少し心が楽になるまどか。

「ママは外で食べてくるそうだ。まどかは運がいいな。ママがそんな顔を見たら、それこそしつこく聞いてくるぞ」

その通りだろうな、と思う。

「さ、達也もお腹すかして待ってるから」

「うん。ありがとう、パパ」

「じゃ、味噌汁の出汁取ってくれるかな」

「はい」

同じ頃、さやかも家に帰りついていた。

家の明かりは全て消えており、挨拶の言葉もいらなかった。

キッチンのテーブルの上に、千円札が一枚、マグカップに下に置いてあった。いつものように。

さやかは、ヤカンを火にかけ、帰り道コンビニで買ってきたお弁当を電子レンジに入れる。

テレビをつけると、警察に連行される若い男女のアップが映しだされた。ここ数日マスコミを騒がせていた、子供を虐待の末に死なせた夫婦だ。アナウンサーの言葉は聞こえていても、さやかの頭には入ってこなかった。

「……虐待されるよりはマシかな、あたしって」

パジャマに着替え、ばたつとベッドに倒れこむまどか。いつもと同じ自分の部屋、昨日と何も変わっていない。変わるはずもない。なのに、何かが違っていた。天井の木目、まるで初めて見るようだ。

もそもそと掛け布団を引いて、頭までかぶると、そのまま寝てしまった。

(鹿目まどか)

まどかはゆっくりと目を開けた。開けたはずだが真っ暗で何も見えない。

(鹿目まどか)

あの宇宙人の声だと気がつくのに五秒かかった。

「えっと…キユーバーさん？」

「我々の名前は、キユーベえだよ」

闇の中に、ポツとその白い姿が浮かび上がる。

「キユ、ウ、ベえ？」

「君たち人類に正確な発音は無理だ。鹿目まどか、君は、それほど神経質になる必要はないよ」

相変わらず無表情、口も動かない。

「鹿目まどか、君は、とてつもない才能を秘めている」

「才能？」

「そうさ。我々はたくさん少女と契約してきた。けれど、鹿目まどか、君ほど、魔法少女としての才能に恵まれた少女は、我々は、未だかつて遭遇したことがない」

まどかは、言葉の意味はわかってても、あまりに現実感がないので、ぼかんとしていた。

「鹿目まどか、君は、驚いているのかい？」

「うん…冗談、だよ」

「冗談なんかじゃないさ。我々は常に事実を言っているんだよ」

「本当？」

弱々しい声しか出ない。

「本当だよ。鹿目まどか、君は、我々と契約すれば、バマミよりもはるかに次元の高い魔法少女になるだろう」

まどかは、マミの変身と銃を構える姿を思い起こした。

「もつとも、鹿目まどか、君は、まだ魔法少女の戦いを見たことがないよね。バマミの戦いを見せてあげるよう。ほんの一例だけどね」
宇宙人の赤い目が大きく迫ってきた。逃げようとか、そんなことを考えるよりも先に、まどかの視界は別の場面に飛んだ。

そこは、シヨップینگセンターで見たような、薄暗く、じめじめした空間だった。コウモリが飛びかい、学校にある人体模型のような骨格が何十とひしめいている。カチャカチャと骨の当たる音が響き合い、たくさんのうめき声が地の底を這う。それが重なって、まるで重低音の歌を聴いているかのよう。怖いという感じはなかった。むしろ、そのことを不思議に思っている自分がいる。

(ほら、バマミが来た)

はるか上方から光の筋が急降下、雷が落ちたような衝撃。いきなり光が全てを覆い、まどかは両手で目を庇った。

やがて目が慣れてくると、闇の真ん中に光を放つコスプレ少女がいた。人体模型もコウモリも円を描いてコスプレ少女を取り囲むが、皆少女の光、気高さ、かつこ良さ、言葉にできない何かに怯えている。コスプレ少女の顔は、間違いない、バマミだ。

マミは余裕の微笑みをたたえたまま、ゆっくりと右手を上げた。

その手には、長く白い銃。

ゆっくりと、スローモーションのように銃を構える。

頭上に現れる、数え切れないほどたくさんの銃。

わっと蜘蛛の子を散らすように逃げる人体模型、上空から銃弾が雨のように降り注ぐ。遅れて、耳をつんざく発射音の重なり。まどかは、鼓膜の限界を超えた轟音、空気の振動が肌を震わす中で、ただ目を見開いて、呆然と立ち尽くしていた。

ばたばたと倒れる人体模型の中から、灰色の煙が飛び出して集まり、巨大な人型となって一気にマミに迫った。

しかし、マミは余裕を失わなかった。逆にニコツと微笑むと、腕を大きく広げた。ドラム缶ほどの大きな大砲が頭上に現れる。

「ティロ・ファイナーレ！」

大砲が火を吹き、火傷しそうな熱風が、鼓膜の破れそうな爆音がまどかを襲う。それでもまどかは微動だにせず、ただただ、マミの輝かしい姿だけを見ていた。

煙の人型は跡形もなく消し飛び、マミは神々しい笑みを浮かべた。

「…すごい」

テレビの電源を切ったようにマミの姿が消え、宇宙人がこちらを向いて佇んでいた。

「これが、典型的な魔法少女の戦いだ。ほんの一例だけだね」

「すごい！ かつこいいい！」

「鹿目まどか、君は、我々と契約すれば、同じように魔女と戦うことが可能になる」

「本当なの？」

その声は飛んでいた。

「本当だよ。鹿目まどか、君は、我々と契約すれば、巴マミよりもはるかに次元の高い魔法少女になるだろう」

いなくなつた転校生

「おっはよう！ さやかちゃん！」

駆けてきたまどかの舞い上がった声に、さやかは驚いた。思わず道の前後を見回してしまふほどに。

「…おはよう」

さやかは苦笑いを隠さない。

「何変な顔してるの？」

「ほら、昨日の今日、だから」

うん、とまどかはうなづいた。

「私、決めたの。魔法少女になる」

「声大きい」

「あ、ごめん」

まどかは首をすくめた。

「でも私、決めたの。魔法少女になって、巴先輩と一緒に魔女と戦うんだって」

さやかは、ふう、と息を吐いた。

「それで、願ひ事は決めたの？」

思いつきり、はっとなるまどか。

「あ…」

「決めてない、つうか、何も考えてなかったわけね」

「その、願ひ事は無くてもいんじゃないかな？ キュウベえに頼めば」

はあ、と大きく息を吐くさやか。

「あのね、昨日巴さんにも言われたでしょ。魔法少女は命がけなんだって」

ようやく、テンションの落ちるまどか。

「…命をかけるに相応しい願ひ事と引換えでなくちゃ、やってられないじゃん」

「そう、だよね」

「それに、まどかにだって家族がいるじゃない……」

さやかという言葉が終わらないうちに、まどかの頭の中を強烈な言葉が駆け抜けた。

『大切な家族のことを、一瞬たりとも忘れてはいけない。たとえ何が起ころうとも』

「……って、聞いているの？ まどか？」

まどかの頬を、一粒の涙が流れる。

「うん、そうだよね」

視線も定まらず、独り言のように言うまどか。

「ご、ごめん、そんなキツイこと言ったかな、私」

まどかはハンカチを取り出して涙を拭いた。

「ううん、違うの。暁美さんの言ったこと、思い出しちゃって」

「あけみって、あの転校生？ だけどあの子、偽名かもしれないって……」

「転校生って誰のことですか？」

仁美が二人のすぐ後ろに立っていた。

「それに、偽名って……」

慌てるさやか。

「あ、ああ、ほら、昨日来た転校生、ほむら、なんて、ずいぶん変わった名前じゃん」

仁美はきよとんとしてた。

「転校生の来たクラスなんてあったかしら」

まどかとさやかは、一瞬、仁美が何を言っているか理解できなかつた。

「な、何言ってるの？ 昨日、うちのクラスに転校してきた……」

そう言いつつも、さやかの脳裏には、あるアニメのキャラクターの顔が浮かんだ。これはひょっとしてあの、埋葬機関から派遣され

てきたシスターと同じパターンなのでは？

「さやかさんこそ何をおっしゃいますの？ 転校生なんて来てませんわ」

まどかが声を上げようとしたところ、さやかはその口を手で塞いだ。そうなのだ。仁美は、とっさにこの手の冗談を言うような性格ではない。そもそもストーリーを思いつきさえしないだろう。そのような仁美が言うからには、それは、仁美にとっては紛れも無い事実なのだ。つまり、事実、転校生は来ていない。

「あ、ああ、そうだよ。うん、来てない来てない。冗談よ、冗談」
抗議の視線を向けるまどかに、さやかは片目をつむった。

首を傾げる仁美。さやかはまどかの口に手を当てたまま、小さく息を吸って、吐いた。

「まどかがさ、魔法少女になった、って夢の話をしたもんだから」

「魔法少女？」

「そう！ 変身して、悪い魔女と戦うのよ」
片手で手振りを入れ、力説するさやかに、ますます首を傾げる仁美。

「で、魔法少女は偽名を使って学校に転校してくるの。悪い魔女が潜む学校に。ほら、正義の魔法少女は正体隠さなきゃならないでしょ」

「まどかはようやく、さやかの意図に気がついたようだった。完全ではないにしても。」

それを確認して、さやかは手を離れた。

「だよ、まどか」

「う、うん」

「そんなことより、この間話してたお茶の先生の話、聞かせてよ。昨日、会ったんでしょ？」

釈然としない仁美だったが、よほど話したいネタだったのか、顔色も全身の気配も一変した。

「会ってませんわ」

「なんだ…お休みだった、とか？」

「いいえ、警察に捕まってしまったんですもの、会えるわけありませんわ」

いきなり飛び込んできたまるつきり別の話題に、まどかもさやかも呆気に取られる。

「つ、捕まったって、何やったの？」

仁美は目を伏せ、小声で言った。

「痴漢」

「痴漢！」

「この前お話ししたように、女性の前で下品な冗談を平気でおつしやるのは、やつぱり、というか…」

思わず顔を見合わせるまどかとさやか。

さやかは額に手をやって、一呼吸してから言った。

「…災難、だったね」

「私は、別に被害なんか受けてませんし、災難でも何でもないんですけど、お師匠さんは大変でしょうね」

「はあ、お師匠さんに同情するわ」

小さくため息をつく仁美を見て、さやかは助かったと思った。しかし、とりあえず仁美の追及はごましたところで、あの暁美ほむらという転校生が、いなくなってしまうたらしい、という事実が消えてなくなるわけではない。

まどかもさやかも、気が重かった。仁美も、全然別の理由で、気が重かった。それでも、三人とも学校には行かねばならない。

「仁美ちゃん、大丈夫？」

幾分余裕を取り戻したまどかが声をかけると、仁美はいつもの笑みを浮かべた。

「ええ。私は大丈夫ですから、ご心配なさらないで」

さやかもまどかも、仁美の笑みに苦笑いせざるを得なかった。自分たちが今、もっと大きな心配事を抱えている、とは言えなかったから。

教室に入つて、さやかとまどかは見た。昨日、転校生が座つたはずの席に別の生徒が座っているのを。

さやかは、仁美が別の生徒と話しているのを確認してから、まどかに耳打ちした。

「やっぱりいないんだよ」

まどかは首を横に振った。

「先生に確認しようよ」

「無駄だし、やめといたほうがいいよ。先生に変に目付けられたら、後々損だから」

「早乙女先生はそんな人じゃないよ」

「わかんないよ。先生は先生なわけだし」

さやかはまどかの肩に手を置いた。

「巴さんに相談するのが先、でしょ」

さやかは昨日受け取った小さなプレートを取り出した。

そうだった、と、まどかが手を打ったとき、早乙女先生が教室に入ってきた。いつもチャイムが鳴ると同時か直後に現れるのに、珍しく二分は早いではないか。二人のみならず、多くの生徒が慌てて自分の席に戻った。

「起立！ 礼！」

日直の掛け声はいつもと同じように。それになんとなくほっとする、まどかだった。

何を言っても無駄

昼休み、さやかとまどかは体育館裏でマミと待ち合わせた。

「おまたせ」

約束の時間ギリギリにマミはやってきた。

「ごめんなさい、ちょっと別の用事があった」

「いえ、こちらこそ呼び出してすみません」

さやかが頭を下げたので、まどかも頭を下げた。

「それで、暁美ほむらさんがいなくなったというのは、本当なのね」

「はい。信じられないことですけど、クラスの誰も知らないんです」

「そう…やるのが大胆だけど、魔法少女が魔法を使ったとすれば不可能ではないわ」

マミは腕を組んで考えこんだ。さやかもまどかもマミの言葉を待つよりない。

「…実はね、その後彼女、私の家の前に現れたのよ」

驚く二人。

「警告をしにきた、あなたたち二人を魔法少女に勧誘してはならない、って」

「警告？」

まどかが声を上げた。

「そうだ、あの子、まどかにも警告してたんだよね」

「…鹿目さん、その話、詳しく聞かせてくれない？」

「は、はい…」

まどかは、渡り廊下で転校生から一方的に言い渡された内容を、おずおずと話した。

マミは目を閉じて聞いていた。

「…それで、最後に、もし家族のことを忘れて変なことをすれば、あなたは全てを失うことになる。それだけは、絶対に忘れないで…」

マミは目を開き、言った。

「間違いないわね。鹿目さん、あなたに、魔法少女になるなど言ってるのよ」

「さやかも首を縦に動かした。」

「確かに、マミさんへの警告も合わせると、そう言ってるとしたかと思えませんか」

「鹿目さん、あなた、以前にも彼女と会ったことない？」

「首を横に二回振るまどか。」

「そう…」

「でも、その、夢の中では見たんです」

あの朝見た夢を、思いつく限りの言葉で説明した。そして、キュウベえを見たことも。

「それ、言っただけじゃありません！」

「さやかが声を上げると、まどかは申し訳なさそうに小さくなった。」

「ごめん、あの時覚えてなかったのは本当なの。宇宙人を見てやっと思い出した、から…」

「マミは顎に手を当てた。」

「夢に出てきたキュウベえは、実物と同じだったのね」

「たぶん…その、声がそっくり、ホントに同じでした」

「そう…予知夢、というには出来過ぎてるわね」

「マミはそのままの格好でしばし考え、すっと手を降ろした。」

「鹿目さん、たとえば、幼稚園の時に仲の良かった子が引越していった、なんてことない？」

「…いえ、ないです」

「小学校一年生とか二年生の時には？」

「いえ」

「さやかもつなづいた。」

「私、幼稚園年長組の時からまどかを知ってますけど、あの転校生に似た子を見たことないです」

「マミはふむ、と一息ついた。」

「手がかりなしね」

腕時計を見るマミ。

「そろそろ時間切れ。いずれにせよ、肝心の彼女がいなくなってしまうたのでは、どうしようもないわね。ただ私には、今度ゆっくり話し合おう、と言っていたから、このまま姿を消してしまうつもりではないだろうけど」

「あの、巴さん、一応クラスの写真とか見なおしてみます。もしかしたら、まどかと私は知らない子でも、向こうは遠くから見ただ、なんてことがあるかもしれません」

さやかは思いつきに、マミは感心した。

「そうね。何かわかったら教えてね。じゃ、そろそろ戻りましょうか」

マミは振り向きかけて、はた、と動きを止めた。

「あ、そうそう、美樹さん」

「はい？」

思わず緊張するさやか。

「鹿目さんも、私のことは、マミ、でいいわ。マミって呼んでね。どうも姓で呼ばれるのは慣れなくて」

マミはにっこり微笑んで、先にその場を離れた。

さやかとまどかが教室に戻ると、仁美が探し物を見つけたような顔をして駆け寄ってきた。

「二人でどちらへ行っていましたの？」

「ああ、ごめんごめん、ちょっと、先輩と話があって」

素早く反応するさやか。

「先輩？」

仁美の訝る様子に、まどかはどうして良いかわからなかった。

「うん、ちょっとね、その先輩から口止めされてるんだ。だから、たとえ仁美でも詳しいことは話せないの。ごめんね」

「そう…ですか？」

まどかを見る仁美。

「う、うん、ごめんね、仁美ちゃん」

そう言うのが精一杯のまどか。納得いかない仁美。

「ごめん。これは他の人との約束だし、ちよっと重い話だから…いわゆるプライベート、ってやつ？」

さやかは繰り返す言葉にまどかは感心した。さやかが友達でいてくれて、本当に良かったと思う。とてもではないが、自分にはこの場を取り繕うことなど無理だから。

「いえ、こちらのほうこそ、ごめんなさい」

そうは言いつつ、寂しさを隠そうともしない仁美。

放課後、さやかはまっすぐ家に帰った。相変わらず出迎える家族はいなかったが、もう期待することさえ諦めていた。自分の部屋、本棚からアルバムを取ると、パラパラめくった。

さしあたり目的とする写真、以外の写真が目に入る。にこやかにポーズを取る父と母、間で無邪気に笑う幼き日の自分。何枚も何枚も、笑顔の父がいる、母がいる、そんな写真が続く。

手が止まってしまう。時が停止したままのアルバムは、あまりにも無慈悲に、冷酷に、失われた物の存在を思い出させる。

電話が鳴らなければ、涙が出るところだった。

階段を駆け降りて、受話器をひったくるように取る。

「はいっ、美樹です」

「あれっ、さやかちゃんかい？」

「おじさま！」

さやかはほっとした。相手は父の親友。気難しい父よりも、さやかにとってはずっと話しやすい相手だった。

「どうしたんだい？ いや、そうか、そうだね、学校は終わってる時間だよな」

「はい。今日はまっすぐ帰ってきたんです」

「あやかさん、いるかな」

母の名を呼ばれて、さやかの気分はしぼんだ。

「いえ」

『…そうか。携帯にかけても繋がらなくてね。ひよっとして家にいるか、と思っただんだが』

「呼び出しても出ないんですか？」

『いや、電源を切ってるか圏外にいるか、だね』

「そうですか。母は自分が必要な時以外電源切ってますから」

『以前は留守番設定してたみたいなんだが、それも止まってるね』

「そうなんですか」

『…知らないのかい？』

「電話かけたこと、ないから」

しばしの沈黙。

『変なことを聞いてごめんよ。あやかさん、家に帰ってるのかな？』

「時々帰ってるみたいです。でも、私が学校に行ってる間だから」

『…それじゃ、洗濯とか炊事は、さやかちゃんが自分で？』

「そうですね。自分の分は」

むふー、と息を吐く音が受話器から聞こえる。おじさんの気分まで伝わってくる。

『何日も会ってないんだね』

「いつものことですから」

『…まったく困ったものだ、あの夫婦は。悟にも再三言ってるんだがな』

逆に笑いが漏れるさやか。

「父に何を言っても無駄ですよ」

我々は神ではない

さやかは、三秒の沈黙の後、聞かねばならないことを切り出した。「ところでおじさま、恭介くんは…」

そういう曖昧な聞き方しかできない。

『うむ』

受話器から漏れた声は短いにもかかわらず重かった。

『実は、いずれ知らせねばならないこととは思っていたんだが、あの子は…もう…』

脳裏をかすめる最悪の予感。

「…怪我、そんなに重いんですか？」

『命に関わるとか、そういうことはないんだ。ただ、あの子の左手は…』

事故直後に見舞った時、左腕全体に包帯が巻かれていたのを見ている。

「それじゃ、バイオリンは…」

『…もう、弾くことはできないだろう』

父親同士が友人だった。だから、同じ歳の恭介少年とは、幼稚園に入る前からよく一緒に遊んでいた。恭介少年は、父親の背を見て自らもバイオリニストを志し、不運な交通事故に遭うその日まで、厳しい修練の日々を送ってきた。さやかはそれを間近で見てきた。小学生による全国コンクールで、惜しくもグランプリを獲得できなかった日の、彼の涙を知っている。だから、バイオリンが弾けなくなったということ、おそらく一生、それがどれほどのショックであろうか、想像に余りある。

『…もしもし、さやかちゃん？』

黙りこんでしまったさやかに、おじさんのほうが心配した。

「うう、ごめんなさい」

涙声が聞こえてしまった。

『前にも話したことがあるけれど、僕のおじいさんは戦争で右手を失った。けれど、左手一本でピアニストとして再起したんだ。ひいおじいさんにできて、恭介にできないことはないはずだ。音楽家としての魂がある限り、ね。あの子が音楽を捨てなければ、だが。ピアノに限らず、片手で扱える楽器はいろいろある。あの子もひいおじいさんのことは知っているから、落ち着いたら、勧めてみようと思うんだ』

「そうですね」

『そんな言葉しかないのがもどかしい。』

『一度、お見舞いに来てやってくれないかな。あの子も、さやかちゃんの前ではみつともない姿は見せられないだろうから、そういう現実と向き合うことが、これからのあの子の人生にとって重要なんだ』
電話の向こうで、鼻をかむ音が聞こえる。

『いや、申し訳ない、我々親子の勝手な都合を言ってしまったね』
『いいえ、今度の土曜日にも、お見舞いに伺います。前回、まだ意識がなかったから、一度いなくなっちゃって思ってたんです』

『そうか…うん、ありがとう。今度の土曜日なら、僕は空いてるから、都合がいたら事前に電話をくれないかな』

「わかりました」

『さやかちゃん、僕は、いつでもさやかちゃんの味方だよ。もし、悟とあやかさんが今のままでどうにもならないようだったら、どうだろう、思い切って僕の家に来ないか？』

いきなりの、まったく予想だにしなかった提案であったが、素直にうれしかった。

「…ありがとう、おじさま」

とりあえず、それだけ言った。いろいろ胸が一杯で、それ以上何も言えなかった。

翌日の放課後、さやかとまどかはママのマンションに招かれた。幸いと言うべきか、仁美は用事があると言って急いで帰宅してしま

つたため、気兼ねなく直行することができた。

チャイムのボタンを押す際、さやかは、表札に「巴マミ」とあるのに気がついた。

『はい』

「美樹です」

『ちよつと待っててね』

現れたマミはとても嬉しそうであった。

玄関に靴が見当たらない。傘立てには女性物が二本のみ。造り付けの下駄箱、戸は閉じているが、中にある靴は多くないだろう。

通されたのは、広さ十二畳と思われる居間。フローリングの床の上に、何やら高価そうに見える色彩鮮やかなカーペットが敷かれ、珍しい三角形のガラス製テーブルが目を引く。しかしながら、それ以外に家具らしい家具はない。壁にかかるカレンダーは数字しかない実用本位のもの。掛け時計も文字盤が算用数字のシンプルなデザイン。二十六インチのテレビが、同時購入したと思われる、いわゆる専用台の上に鎮座している。

妙に生活感が薄い。少なくとも、複数の人間が暮らしている空間ではなからう。

腰を降ろしたまどかはテーブルの上に手を置き、物珍しそうに部屋を見回している。

数分待たされた後、マミはお盆を持って戻ってきた。載っていたティーポットもカップも、銘柄こそわからないものの、高級品には違いあるまい。

ポットから紅茶をカップに注ぐ手際の良さは、誰かに躰けられたもの。立ち昇るこの香りは、アールグレイだ。

「さ、どうぞ」

「ありがとうございます」

まどかは、すっかりマミの演出にはまっている。もちろん、下心あつてのものではないだろう。さやかとしては、気がついてしまった以上、尋ねるべきことを口にした。

「マミさんは、一人でお住まいなんですか？」

マミの表情にさほどの変化は見られなかった。

「ええ。表札で気がついたのね」

「そうです」

まどかは全然気がついていなかったようだ。

「表札？」

「巴马ミってあったから」

「私、小学六年生の時、両親を事故で失ってしまったの」

マミは微笑みをたたえて言った。

ぎよつとするまどか。さやかとしては、驚く顔を作るわけにもいかない。

「すみません。余計なことを聞いてしまって」

とは言ったものの、まどかの驚きと対比されては、答えを予想していた、ということがばれるのもいたしかたない。

「いえ、いいのよ。本当のことだし、変に気をつかわれるよりは、私も気が楽だから」

それは、どうやら本心のようなだ。

「ところで、今日来てもらったのは、キュウベえが五時頃こちらに来るといつから、一緒に話を聞いてもらおうと思ってるね」

話題を素早く切り替えたのは、午後五時まであと七分しかない、という物理的事情もあるのだろうが、根掘り葉掘り聞かれたくない、ということも大きいのだろう。それは当然のことだ。

「約束の時間はまだだけど、部屋に入ってもいいかな？」

まったく、何とこういういいタイミングなのか、またしても耳元でさやくような声。二度目の体験でも実に気色悪い。

「ええ、まだお茶を飲み始めたところなんだけど」

マミがそう言うと、本当にいつの間にか、テーブルの上に猫もどきがいた。この現れ方も何とかならないものだろうか。

「僕にはかまわず、君たちは、お茶を飲んでよ」

まどかは、宇宙人が突然現れたことに、素直に驚いている。可愛

いと言えば可愛いが、これでは、魔法少女になるなど無理、というものだ。

「美樹さやか、君は驚かないんだね」

赤く丸い目がこちらを見ているが、本物の猫よりも感情が乗っていない。つくづく不気味だ。

「私、一度驚いたことには二度驚かない主義なの」

「それは、主義というより性格、という言葉が適切じゃないのかな
宇宙人にしては日本語に精通してるな、と思うと笑いが漏れた。

「美樹さやか、君は、何がおかしいんだい？」

人間なら、怒っている、という読みもありだが、この場合は本当に理解できないのだろう。

「宇宙人なのに日本語に詳しいな、と思って」

「我々は、地球の時間でおおよそ二千年間、日本語を聞いてきたからね」

「二千年？」

「そうさ。我々が地球にやってきたのは、今からおおよそ三千八百年前だからね。この列島を発見したのはおおよそ二千年前だけれど」

「そんな昔から…」

「そうさ。我々はその間、この列島だけでも何十万人という少女たち契約して、魔法少女になってもらってきた」

「…それは、魔女を退治するため？」

「魔女は放置すると、一つの国くらい簡単に滅ぼす可能性がある。
この星ではもちろん前例はないが、一つの惑星を破壊することだつてあるんだよ」

「さすがのさやかも息を呑んだ。

「キユウベえ、無関係の女の子をいきなり驚かせてはだめよ」

飛んでくるマミの鋭い声。宇宙人はぐいっとマミのほうへ首を向けた。

「無関係ではないさ」

「そんなことより、曉美ほむらさんのことがわかったんじゃないかっ

たの？」

マミの強い口調に、宇宙人はあっさり話題を変えた。

「なるほど。暁美ほむらは、我々が契約した者ではない。それは間違いない」

「でも彼女、ソウルジェムを持っていたわよ。そしてキュウベえ、あなたたちのことを知っていた」

「なるほど。しかし、我々は、常に事実を言っているんだよ。バマミ、君が疑問を抱くのは当然だ。しかし、暁美ほむらは、我々が契約した者ではない。それは間違いない」

「あなたたちと契約していないのに、ソウルジェムを持っている、なんてことがあるの？」

「バマミ、君が疑問を抱くのは当然だ。しかし、我々は神ではない。我々が知らないこともある。当然だよ」

「あの、ソウルジェムって何ですか？」

さしあたりの疑問を尋ねると、マミはすつと左手を差し出した。手のひらの上に、小石ほどの黄色に光輝く物体が乗っている。装飾を施した金具に嵌めこまれ、大きめのペンダントのようにも見える。

「これがソウルジェム。魔法少女とキュウベえたちとの契約の証。これを持っていることで、魔法少女は魔法を使うことができる」
「きれい……」

まどかは、その美しさに素直に感動していた。

この命をかけても良いことではないのか

パジャマに着替え、ばたっとベッドに倒れこむまどか。

いつもと同じ自分の部屋、昨日と何も変わっていない。変わるはずもない。

マミの両親が亡くなっていたこと。自分より二つ年上ではあるものの、中学生が一人暮らしをしているということ。一つの国、一つの惑星、それを破壊するような魔女と戦っているということ。

自分には想像もできないことばかり。本当にすごいことだと思う。さやかはさやかで、マミのこと、宇宙人のこと、仁美には知られないよう、傷つけないよう、言葉巧みにその場を取り繕い、マミはもちろん、宇宙人とも対等に渡り合う。それも本当にすごいことだ。思い起こせば、幼稚園年長組の時、泣き虫まどかとからかわれ、いじめられていたところを、颯爽と助けてくれたのがさやかだった。まどかのために小さな体をはって、男の子と殴り合いの喧嘩をしたことさえある。先日の魔女の結界の中でも、まどかはさやかにしがみつくとしかできなかった。

まどかはずっと、さやかの背中を見てここまで成長してきたような気がする。

（鹿目まどか、君は、我々と契約すれば、バマミよりも、はるかに次元の高い魔法少女になるだろう）

あの宇宙人の言葉が、ずっと胸の奥に引っかかっていた。とても本当とは思えないが、もしもそれが本当なら、マミと共に悪い魔女を倒して世界の平和を守り、さやかにだって恩返しができるかもしれない。

それは、この命をかけても良いことではないのか。

「いい顔をしているね、鹿目まどか」

突然の声にびっくりしてはね起きた。しかし、いくらか免疫ができたのか、ベッドの上にちょこんと座り込んでいる宇宙人を見ても、驚きはなかった。

「キューバーさん……」

そこで、はた、と気がついた。

「あ、あの、ここじゃパパやママに見つかっちゃうよ」

つい小声になった。さすがに、顔を近づけることはできない。

「前にも話したよね、鹿目まどか。大丈夫。我々の姿は、選ばれた者には見えない」

「…パパやママにも見えない？」

「もちろんさ」

ほっとして背中を丸める。

「鹿目まどか、君は、我々と契約して、魔法少女になる決心がついたのかい？」

「…うん、私は、なってもいい、ううん、魔法少女になりたいのでも、まだ心の整理がつかないというか…」

「なるほど。我々としては契約を無理強いする立場ではない。契約は、あくまでも鹿目まどか、君の自由意志によるものだ。君に、心の整理をする時間が必要なのは、当然だよ」

「それともう一つ、暁美さんのことだけど…本当に知らないの？」

「暁美ほむらは、我々が契約した者ではない。それは間違いない」

「…暁美さんは私に、なぜあんなことを言ったんだらう？」

「暁美ほむらに、鹿目まどか、君は何を言われたんだい？」

「ようするに、魔法少女になるな、って」

「なるほど。我々にも暁美ほむらの意図がいかなるものか、把握できない。しかし、推定することはできる」

「推定？」

「敵を減らす、ということさ」

「敵を減らす？」

「鹿目まどか、君は、我々と契約すれば、バママよりも、はるかに次元の高い魔法少女になるだろう。そうなれば、暁美ほむらは、やっかいな敵が一人増えた、と思うんじゃないかな」

「私は暁美さんの敵じゃないよ」

「鹿目まどか、君がそう思っていて、暁美ほむらは理解しないかもしれない」

「でも、もう一度よく話しあえば…」

「なるほど。しかし、暁美ほむらは普通の人間ではないんだ。何を考えているかわからない。鹿目まどか、君が近づくのは危険だ」

「普通の人間じゃないって、そんな言い方はひどいよ」
声のトーンが上がってしまうまどか。

「しかし、鹿目まどか、君も見たじゃないか。暁美ほむらが突然消えるのを。普通の人間にできることじゃない」

「…それは、そうだけど」

「もし、鹿目まどか、君が暁美ほむらと対等に話しあうことを望むのなら、魔法少女になってから、のほうが安全だろう」

「そうなのかな…」

「そうさ。暁美ほむらは普通の人間ではないんだ」

「…やっぱり、そういう言い方はよくないよ。ママさんも普通の人間じゃない、ってことになるんだよ」

「我々は、常に事実を言っているんだよ。しかし、我々は、鹿目まどか、君の感覚を理解した。たとえ事実でも、君は、我々に言っている欲しくないことがあるんだね？」

黙って首を縦に振るまどか。

「なるほど。鹿目まどか、君がそう望むのであれば、今後、言うべきでないことは言わないことにしよう。それでいいかな？」

「うん」

「わかった。鹿目まどか、君も、我々が言わないことがある、という覚えているかい」

宇宙人はパタパタと尻尾を振った。

「鹿目まどか、君は、とてつもない才能を秘めている。君は、我々と契約すれば、バマミよりも、はるかに次元の高い魔法少女になるだろう」

すでに聞いたことのある言葉だが、何度言われても照れてしまう、まどか。

「…私、小さいときから、得意なことってなかったし、これをやりたい！ とか、看護師になる、とか、オリンピックで金メダルを取る、とか、そういうことって何もなかったの。だから、とてつもない才能、って言われても、全然実感ないの」

「鹿目まどか、君は、わかっていると思うけど、魔法少女は普通の人たちには秘密の存在なんだ。だから、今、君がわからないのも無理もない。しかし、君が、魔法少女になれば、すぐにわかるよ。君が、とてつもない才能を秘めている、ということを」

「なればわかるの？」

「そうさ」

「本当に？」

「そうさ」

それは、この命をかけても良いことではないのか。

「申し訳ないけれど、僕は、もう行かなくてはならない」

「え？ もう行っちゃうの？」

「我々にとつて手のかかる魔法少女がいるんだよ。彼女のサポートをしなくてはならない」

宇宙人はひょいっと窓の棧に飛び移った。

「鹿目まどか、君が、魔法少女になる決心がいたら、我々を呼んで欲しい」

「呼ぶって、どうするの？」

「大丈夫、鹿目まどか、君は選ばれた人間なんだ。君が我々を必要

とするときには、我々にもそれがわかる。すぐに参上するよ」

「うん。わかった」

宇宙人はひゅつと消えた。転校生のように一瞬にしてパツと消えるのではなく、一秒よりは短いけれど、時間をかけて消えて行く、そんな感じだった。

お前は失敗して出来た子

土曜日の午後、さやかとまどかは電車に二駅乗って、大学の総合病院に向かった。

まどかも上條恭介とは何度か会ったことがある。さやかも一人で出かけるのは、何となく気が引けるところだったので、まどかを誘ったというわけだ。

上條恭介は、個室のベッドに横たわって、窓の外に顔を向けていた。

「恭介くん」

さやかは、意識して明るく呼びかけたが、反応はない。

「こ、こんにちわ」

まどかが、もじもじしながら声をかけると、恭介はゆっくりと顔をこちらに向けた。

「…誰？」

覇気のない声。物憂げな表情。しかし、視線はしっかりとまどかを捉えている。

「やだな、まどかだよ。ほら、私の親友で、何度か会ったことあるじゃない」

さやかのほうには目を向けようとしなない。

「…ああ、思い出した。カナメさん、だっけ」

そうつぶやくと、また窓の外に顔を向けてしまった。

さやかはつかつかとベッドに近寄り、枕元の椅子に座った。取り残されたまどかも、やむなく手近にあった椅子に腰を降ろした。

「父さんに言われたの？」

さやかが口を開くよりも先に、独り言のように囁く恭介。

「え？ 何を」

「見舞いに来てくれ、とか」

「うっん、私、ずっと、お見舞いに来られなかったから、私のほう

からおじさまに無理を言って…」

「そう」

もはや、元気がないとか、落ち込んでいる、というような、生易しいレベルでないのだ。

さやかはすつと立ち上がった。

「ごめんね、時間を取らせてしまって。また来るから」

えつと驚くまどかに目配せして、病室を出ていくさやか。まどかは、恭介にぺこんと頭を下げると、慌てて後を追った。

「さやかちゃん！」

エレベーターホールで追いつくまどか。

さやかはエレベーターの階表示を見上げたまま。

「声が大きいよ」

「あ、ごめん」

さやかは首を上に向けたまま。

「…さやかちゃん、どうして？」

「早く引き上げすぎ、って？」

「うん…」

到着したエレベーターは無人だった。並んで乗り込む二人。

「今、何か言っても全て空々しいだけだし、今日のところは、顔を見に来ただけ、ってことで」

「それでいいの？」

「うかつに、元気そうで良かった、なんて言ったら、それこそ、ぶち切れたかもよ」

「…そう、なのかな？」

さやかは薄く笑った。

「ごめん、まどか」

「え？」

「たったこれだけのために、まどかを誘っちゃって」

「ううん、気にしないで」

一階に到着すると、さやかは出口とは反対の方向へ歩き出した。

「出口、こつちだよ」

「時間あるから、休んでいこうよ。私がおごるから」二人は喫茶室で向き合って座った。しばらくの間、黙ったままフルーツパフェを食べる。

ふいに、さやかの手が止まった。

「…わかつちやうんだよね」

「え？」

「父さんと同じだから」

「お父さんと同じ？」

「そう。父さんの場合は病気でパリに行けなくなっただけで、演奏には影響はなかったんだけど、それでもね、まる一年、それこそ命がけて準備してたヨーロッパ公演が駄目になって、その時の落ち込みようって言うか、本当に大変だった。あれから人が変わってしまったんだけどね」

さやかの父、美樹悟は、若くして世界の著名なコンクールを総なめにし、天才の名をほしのままにした、日本音楽界の至宝とまで言われるピアニストだ。さやかが小学校五年生の時、無理な練習がたたって倒れ、ヨーロッパ公演を中止せざるを得なくなったことがある。

「父さん、ピアノに人生の全てを捧げちゃってるんだよ」

さやかがかの有名な美樹悟の娘であることは、仁美でさえ知らない。クラスでも、まどかだけが知っている。

「…お父さん、全然会ってないの？」

「うん。もう半年以上、かな」

「会いたくないの？」

「私は、父さんにとって予定外の子供だから、いてもいなくても一緒なんだよ」

さやかは父四十歳の時の子であり、フランス在住の兄とは十五も歳が離れている。ある時、ワインに酔っていた父がふと漏らした言葉、

『お前は失敗して出来た子なんだ』

その意味がわかったのはごく最近のことだ。

「…父さんにとってはピアノが全てで、家族なんか、二の次だから」「いてもいなくても一緒なんてことないよ、きっと。さやかちゃんが会いたって言えば…」

さやかはくすつと笑った。

「ねえ、まどか、父さんの演奏、すごいと思うでしょ。娘の私が言うのも何だけど」

まどかは、美樹悟の演奏を間近で見たこと、聴いたことがある。

その時の衝撃は一生忘れられないだろう。体も心も魂も、全てを打ち、叩き、揺さぶり、真芯に響く。髪を振り乱し、歯を食いしばり、指よ砕けよ、腕よちぎれよ、鬼気迫る形相は、思い出すだけでも恐ろしい。

「うん、ものすごい迫力というか、心をギュツと掴まれるというか…」

「あの演奏はね、普通の人間には無理なんだよ」

「そんな言い方って…」

「家族はもちろん、何もかも、全てを捨てて、ただただピアノにだけ打ち込んだ人間にしかできない演奏なのよ。でも、あれでも父さんは全然満足してない。だから、私のことなんて二の次三の次。コンサート直前なんて、もう食えることさえ忘れてしまっただからね」

さやかはスプーンでクリームを掬って口に入れた。

「恭介くんも同じ。父さんと一緒…」

君には魔法少女になる素質があるようだ

まどかは、それまでも薄々気がついてはいた。さやかに家族の匂いがしない、ということに。

小学校の授業参観に、さやかの両親が来たことは一度もなかった。お父さんが世界的に有名な美樹悟だと知った時、それを秘密にするために来ないのだろう、と思った。

しかし、お父さんが外国から帰ってくる、と言いながら、ちっとも嬉しそうではないさやかを見るたびに、おかしいな、とは感じていた。

でも、お父さんが普通の人間ではないなんて、あんまりだ。喫茶室を出る二人。

まどかは黙ったまま、さやかにかける言葉もなくて、後ろをついていくばかりだった。

病院を出て自転車置場沿いに、駅に向かって歩く。

日差しを浴びるさやかの背中が、こんなに小さく見えるのは初めてだ。

「あっ！」

さやかが声を上げ急に立ち止まったので、まどかはぶつかりそうになった。

「どうしたの？」

「あれ……」

さやかが指さした先、病院の壁にドス黒いシミが広がっている。見ているだけで吸い込まれそうだ。

まるで、心まで持って行かれそうな。

「まどかつ！」

さやかの叫びで、我にかえるまどか。

「魔女の結界だよ、あれ」

「ど、どうしようっ？」

周囲に人影はない。誰か、玄関にいた警備員を呼びに行くか？

「マミさんと呼ぶしかないよ」

さやかは、マミからもらったプレートを握りしめた。

（マミさん！ マミさん！）

さやかの心の叫びがまどかにも聞こえる。

（魔女の結界ね。すぐに行くわ。ちょっと待ってて）

マミの言葉が間近に聞こえたかと思うと、もう目の前にマミが立っていた。白のブラウスに紺のスカート。私服姿は初めて見るが、清潔そうな感じが輝いて見える。

「マミさん！」

マミはにっこり微笑んだ。

「驚いた？」

「あの…」

さやかでさえ言葉がない。

「いわゆるテレポルト、ってやつね。魔女退治に関係あるときしか使えないのが残念だけど」

「なるほど。確かに魔女の結界だね」

いきなり、あの無味乾燥な声が出て、マミの足元に宇宙人が現れた。

宇宙人を上から見下ろすマミ。

「キユウベえ、現れ方にもうちよつと工夫はないの？」

「バマミ、そんなことを言ってる場合ではないだろう」

ふつと息を吐くマミ。

「確かにそうだけど」

マミは黒いシミに目を向けた。顔から笑みが消える。しかし恐れる様子もなく堂々と近寄ると、真正面に立って腰に手を当てた。

「二人のおかげで発見が早かったわね」

マミの様子を見て、まどかもさやかも恐る恐る近づいた。

「これも、この間のシヨッピングセンターの時みたいになっているんですか？」

さやかが一步前に出ると、マミは手を大きく差し出した。

「近寄ってはだめ。吸い込まれるわよ」

マミが言い終わるよりも先に、シミが煙のように飛び出して、さやかより後ろにいたまどかを襲った。

「しまっ…」

マミの反応よりも早く、まどかは黒く禍々しいシミに取り込まれてしまった。瞬きする間の一瞬の出来事だった。

「まどかっ!」

さやかは反射的に自ら結界に飛び込んでしまう。

「くっ!」

マミも二人を追って結界に。

キュウベえは、三人が結界に取り込まれたのを見届けてから、ひよいつと結界に入った。

そして結界のシミは、蒸発するかのようになくなっていった。

自転車でやってきた老人、つい今しがた起きた異変に気がつくはずもなく、よっこらしよと下車して、駐輪場に愛車のスタンドを立てた。

「…鹿目さん、大丈夫?」

マミの声でまどかは目を開けた。

間近にマミの優しい顔が見えた。

「…マミ、さん?」

しかし、背景は真っ黒な闇。

「ここはっ!」

「魔女の結界に取り込まれてしまったのよ。でも大丈夫。まだ魔女は活動を始めていないから」

そして、キツと顔を上げるマミ。

「美樹さんを探さない」と

さやかは暗闇の中で深呼吸した。

本当の暗闇なら、自分の手も何も見えるはずがない。ところが自分の体はちゃんと見えている。それに、足はしっかり地に付いているのではないか。手をついてみると、夜の冷えたアスファルトの道路、そんな感触だ。

「美樹さやか、君は冷静なんだね」

宇宙人が二・三メートル先に寝転がっている。

「焦ったってしかたないじゃない」

「美樹さやか、君の言うとおりだ」

宇宙人はひょいっと起き上がった。しかし宇宙人の足元も何も見えないから、空中で体をねじっただけのようにも見える。

「それにしても美樹さやか、君の行動は無謀だった。あの場にはバ Miami もいたんだ。彼女に任せる、という選択肢もあったはずだよ」

「落ち着いて考えればね。だけど、まどかをほっておくことなんてできないし、それに、後悔したくないのよ、私」

「美樹さやか、君の言う、後悔したくない、とは、どういう意味なんだい？ 仮に鹿目まどかに万一のことがあったても、君には何の関係もないことだ。君が後悔する理由など何もない、と思うけど？」

「そうやって割り切ってしまうなら、楽だけだね。わかってもできないのが人間なのよ。ふふ…宇宙人にはわからないかもね」

宇宙人の尻尾がくりくりつと円を描くように揺れた。

「なるほど。美樹さやか、君には魔法少女になる素質があるようだ」

人間の魂が産み出した化物

宇宙人の話題が、いきなり飛んだことに、首をかしげるさやか。「どうしてそうなるの？」

「他人を冷酷に見捨てられない人、すなわち優しい人と定義するなら、優しい人こそ魔法少女としての価値は高い。美樹さやか、君は鹿目まどかを冷酷に見捨てなかった。しかも、魔女の結界に飛び込めば命の危険があるということを、君は知っていたはずだ」

「命の危険か… そうなんだよね。言われてみればそうだけど…」

さやか言い終わらないうちに、地響きのような低い音がうねりを伴ってやってきた。暗闇の中でもはっきりとわかる、一方向から「何？」

「どうやら、魔女が活動を始めたようだ」

「名前、キューベール、だったよね」

「美樹さやか、君の発音は正確ではないが、認識には充分だ」
さやかはくすつと笑った。

「… マミさんが怒るわけだ」

「美樹さやか、君の言う、バマミが怒るわけだ、とは、どういう意味なんだい？」

「さっき自分も言ってたじゃない。そんなことを言ってる場合ではないだろう、って」

「なるほど。では、美樹さやか、君も我々も、優先すべき課題に対処することにしよう」

「キューベール、とりあえずマミさんと合流しようよ」

「美樹さやか、君の意見に賛成だ」

「マミさんの位置とかわからないの？」

「現時点では我々にもわからない。しかし、もう少し待っていれば光が得られるはずだ」

「… 明るくなる、ってこと？」

「美樹さやか、君の発言と同じ意味だ」

さやかは、ふう、とため息をついて、頭を振った。

そうしているうちに、宇宙人の言つとおり、少しずつ、周りの状況が見えてきた。

何とも奇妙な光景だが、敢えて言葉にするなら、コンビニやスーパーで売っている普通に売っている様々なお菓子、その写真をパネルにして適当に天井から釣り下げているような。

「あっちへ行行ってこと？」

さやかのいる位置からまっすぐ、パネルのない場所が通路のように。その先は暗闇へと消えている。

さやかは歩き出した。先日のショッピングセンターの結界のような禍々しい雰囲気はなく、見慣れたお菓子のパネルが列をなして続いているばかり。

宇宙人は、音もなく、さやかの後ろをついてくる。何か話さないと間が持たない。

「私に、魔法少女になる素質があるようだ、ってどういうこと？」

「美樹さやか、我々は以前、君に、魔法少女になる資格がある女の子だと言ったよね。我々の見通しが誤っていたことを、率直に認めなければならぬ。君は、我々と契約すれば、バマミにも匹敵する、魔法少女になるだろう」

「…一つの願い事を叶えるのと引換えに、魔女を退治する義務を負っている、ってマミさんが言ってたけど、願い事は何でもいいの？」

「美樹さやか、君の言う、何でもいい、という表現は正しいが、我々の経験の中からいくつか例をあげると、顔を変えて、という願い事は危険だ」

さやかは思わず笑いが漏れた。いかにも女の子にありがちな願い事だが、宇宙人に言われるまでもなく、それは無理だ、とわかる。

「最近では、高等学校の入学試験で合格点を取りたい、という願い事も多いが、我々としてはお勧めしない」

「どうして？」

「入学試験で合格したことに見合う学力がなければ、高等学校に入学してからが大変だ」

宇宙人にしては、実能的を得たことを言う。

「なら、学力を上げて、つて願えば？」

「学力が上がっても、それだけで、高等学校の入学試験で合格点を取れるかどうかわからない。曖昧な願い事は危険だ」

つくづく正論だ。

「片想いの男子に、私の想いに気がついて欲しい、なんてのも多くない？」

「美樹さやか、君の推測は当たっている。その願い事も多いが、我々としてはお勧めしない」

「それはどうして？」

「魔法少女にならずとも、直接、片想いの男子に告白すれば済むことだからね」

「…命をかけるほどのことでもない、か」

「我々の経験の中から例をあげると、魔法少女になって、片想いの男子に、自分の想いを気がつかせた者は、チャンスを無駄にしまつ事が多い」

「いざという時、恥ずかしくなって逃げちゃう、とか？」

「美樹さやか、君の推測は当たっている」

さやかは思わず声を漏らして笑ってしまった。

「人類があまりに多くの同じ失敗を繰り返すので、我々としても、本来ならば願い事の内容に介入すべきではないのだが、やむを得ず、最低限の助言をすることがある」

「なるほどね」

マミとまどかは、上下左右壁四面に延々と続くお菓子の絵の中を歩いていた。床の絵は踏んで歩くことになるが、表面はつるつるとした感じで、進むのに支障はない。ケーキあり、ドーナツあり、アイスクリームあり、写真のように写実的な絵もあれば、抽象画もあ

って、見ていて退屈はしない。

先を歩くマミ。まどかは何か話さなければならぬ、と思って、話題を探した。

「あの、マミさん」

「なあに？」

「この絵、やっぱり魔女が描いたものなんですか？」

「さあ、どうかしら？　ただ、この絵が魔女の性質というか、性格を表していることは間違いないわね」

「性質：性格：」

「そうよ。ただし、可愛い絵、きれいな絵だからと言って油断してはだめ。さしあたり襲ってくる気配はないけれど、明らかに私たちを誘っている。一本道で、先に進むより他に選択肢はないのだから後ろを振り向くまどか。

ほんの数メートル先が深遠の闇に消えている。さつきまで歩いてきたはずの道が見えない。

「マミさん！　後ろ！」

「振り返ってはだめ。最初から戻るという選択肢はないのだから。だけど、焦って走ってもだめよ。気持ちの余裕を失えば、かえって危険だから」

マミは前を向いたまま、ずっとペースを乱さずに歩いている。まどかは必死に、何も考えないようにして、マミに歩調を合わせてついでいく。

「鹿目さん、不思議だと思わない？」

「…何がですか？」

「さつきから歩きつばなしなのに、疲れてないでしょう？」

「そういえば…」

「私たちが逆らっていないからよ」

「逆らっていない？」

「ええ。魔女との戦いの中でだんだんわかってきたことなんだけど、結界の中では、置かれた状況に逆らうと、状況はかえって悪化する

のよ。状況に逆らわず、流れに身を任せていると、やがて状況のほうが私たちに近寄ってくる」

「状況が近寄ってくる……」

「わかりやすく言えば、じたばた焦って逃げようとしたりせずに、落ち着いた行動をしていけば、結界のほうがつまり魔女のほうで、私たちに心を開いてくるのよ」

「心を開く？」

「魔女は、人間の魂が産み出した化物だから。それも女性のね」
「ママはちらっと振り向いた。」

「だから、魔女なのよ」

よく見ておくといい。巴マミの戦いを

「魔女って、人間なんですか？」

まどかが驚きの声を上げる。

「いいえ、人間そのものではないわ。魔女は人間の闇の部分が実体化したものだ」

「闇の部分？」

「そうよ。どんな人にも闇の部分がある。もちろん、人によって多い少ないはあるでしょうけど。多い人は犯罪を犯したり、自殺してしまったり…戦争は、本来人それぞれ違う闇の部分の中にある共通部分が、何かの拍子にたくさんの人たちを同じ方向に押し流した結果…」

まどかは、マミの言葉を完全に理解したわけではなかったが、直感で、正しいことを言っている、と思った。

「私たち魔法少女はね、その闇に部分を、完全にゼロにすることはできないまでも、少しでも減らすことが使命なの。そう考えれば、願い事の代償として課せられた義務であっても、たとえ命がけであっても、耐えられる。私はそう思う」

まどかは素直に感動していた。この偉大な先輩、マミと一緒に戦おうと思った。

マミと共に悪い魔女を倒して世界の平和を守り、さやかに恩返しをする。

それは、この命をかけても良いことではないのか。

「マミさん、私、魔法少女になります」

マミの足の動きが微妙に乱れた。

「…命をかけても構わないほどの、願い事があるの？」

「今は、まだないけど、でも、いいんです。私は魔法少女になって、

「マミさんと一緒に世界の平和を…」

「鹿目さん！」

あくまでも立ち止まりはせず、しかし、突然の大声だったので、まどかの足は一瞬止まってしまい、マミと距離が開いた。慌てて追いつく。

「そんなに軽々しく、魔法少女になるなんて言うてはいけない。命がけの願い事があってこそその魔法少女。魔法少女になること自体が目的であってはいけないのよ」

「…そうかもしれませんが。でも、私はこのまま、他の人に迷惑をかけただけで、他の人のため役に立つこともできなくて、ただ何となく生きていく、そんな人生をこの先も送りそうで、すでにそうやって…だから、そんな私でも、魔法少女になれば、誰か他の人たちの役に立って、助けることもできて、恩返ししなきゃならない人たちにも恩返しができる、そう思うんです。だから、それは、私にとって、この命をかけてもいいくらい大きな願いなんです」

マミは黙ったまま歩き続けた。まどかも黙ったまま歩き続ける。

そして、沈黙を破ったのはマミだった。

「…鹿目さん」

「はい」

「あなたの気持ちはよくわかったわ。でもね、焦って契約してはダメ。その気持ちは気持ちとして、もう少しじっくり考えなさい。魔法少女になるということは、一定の間、普通の人間ではなくなる、ということなのだから」

普通の人間ではなくなる、という言葉に、胸がズキツときた。

「…それに私は、来年高校へ進学したって、遠くに行ってしまうわけではないから。いつだって相談に乗ってあげられるから」

うん、と、まどかはうなづいた。

「マミさん…わかりました。もう少し考えてみます。願い事だって、たった一つなんだから、大事に使わないといけないなって」

「そうよ。大事にしなさい。本当にこの願い事をして後悔

しないんだって、確信が得られてからでも全然遅くないんだから
「はいっ！」

まどかの元気の良い返事に、後ろ姿のママがくすつと笑ったように見えた。

「鹿目さん、ありがとう」

予想外の言葉に驚くまどか。

「世界平和に貢献してるかどうかはともかく、私と一緒に、って言うてくれたこと、本当に嬉しかったの。ありがとう、鹿目さん」

「そんな…私のほうこそ、ママさんには感謝しなきゃ…」

突然ママが立ち止まったが、まどかはママの背中だけを見ていたので、余裕で止まることができた。

「どうしたんですか？」

「目的地に着いたみたいね」

はるか先に林立する柱。上に向かって伸びている。頭を上げて追うと、全ての柱が一点に集まっていた。

そこは、巨大な鳥かごの中だったのだ。ただし、今立っている円形の床は、学校の校庭よりも明らかに広い。圧迫感や閉塞感はなかった。

「閉じ込められたわね」

ママの言葉に後ろを振り向くと、さっきまで歩いてきたはずの、お菓子の絵に囲まれた廊下はどこにもない。四方と同じ柱が見えるばかりだ。

「ママさん！ まどかっ！」

どこからどうやって現れたのか、さやかが駆け寄ってきた。

「さやかちゃん！」

手を取り合うまどかとさやか。

「美樹さん、大丈夫だった？」

ママの言葉に笑顔を見せるさやか。

「はい、元気と丈夫なのが私の取り柄ですから」

しかし、ママに笑顔はなかった。

「感動の再会、と言いたいところだけど、魔女が現れるわよ」

いつの間にか、さっきまで何もなかったはずの床の上に、木製の椅子が一つあった。

「…椅子？」

思わず一歩踏み出すさやかの手をマミが握った。

「二人とも、私の後ろへ」

まだかもさやかも言葉に従って、マミの後ろに回った。

「そのまま、姿勢を低くして、そこから動かないでね」

マミは数歩前へ出ると、左手を前へ差し出した。手のひらの上に、光輝くソウルジェム。

「バマミ、この魔女はかなり強力だ」

これまたいつの間にか、宇宙人がさやかの肩の上に乗っていた。

「ええ。わかつているわ」

ソウルジェムがひときわ明るく輝いて、一瞬のうちにマミは変身した。

一方、椅子からはもくもくと黒い煙が上がった。やがてそれが固まるようにして、いかにもアニメのキャラクター調、芋虫に似た形の化物が現れた。先日ショッピングセンターで見た化物とは違い、見ようによつては可愛い感じすらする。体全体は黒く、顔の部分だけ白い。目や口は本当にアニメの絵のようで、不気味さはまったくない。

おもむろに口をあんどぐり開ける。

マミは二人をその場に残して駆け出した。

「さあ、あなたの相手はこの私よ！」

芋虫はゆっくりと向きを変え、マミに向かって一気に突っ込んだ。しかし、マミは余裕でかわす。

「マミさん！」

思わず叫ぶさやか。

「静かに」

宇宙人がつぶやく。

「美樹さやか、バマミに任せるんだ」

「う、うん」

さやかとしても、そうする以外にどうしようもないのだ。

「鹿目まどか、美樹さやか、二人とも、よく見ておくといい。バマミの戦いを」

本当は優しい人だよ

芋虫が上からマミを襲い、マミがそれをひらりとかわす、そんな戦いが続く。

マミは余裕でかわしているのだった。華麗に。反撃しようとはしない。芋虫は単調な攻撃を繰り返すばかり。大口を開けてマミを食べてしまおう、という意図なのだろうが、全然無理そうだ。

ようやく業を煮やしたのか、芋虫は空中でいったん静止した。その瞬間をマミは見逃さなかった。銃を構え素早く撃つ。顔の真ん中に命中してボンと爆発したが、その煙の中からまた芋虫が現れて、今度は口から糸を放つ。たちまちマミの体に絡みつく。

やばいっと思うまどかとさやかだったが、マミには余裕があった。一気に芋虫の口に引き寄せられるマミ。がばつと開く大口。

しかし、芋虫がかぶりついたのは、土管のような大砲だった。ドン、という発射音と猛烈な爆風、毛虫は消し飛んでいた。

「やった！」

さやか喜びの声を上げた瞬間、マミの背後から芋虫が。

マミが芋虫の口の中に。さやかもまどかも凍りついた。

(ティロ・ファイナーレ！)

芋虫の上空を埋め尽くす銃の隊列、一斉に火を噴く。

視界を遮る煙が薄れると、椅子の上に座っているマミが見えた。すでに変身を解いて、元の服に戻っていた。

ゆっくりと立ち上がって、勝ち誇るでもない、普通の笑顔で二人と一宇宙人の元へ。

ほっとするさやかとまどかだった。まどかはもう、うるうるだった。

「バマミ、ずいぶんと簡単に片付けたものだね。我々にも予想がつかなかったよ」

相変わらず宇宙人の声は淡々として抑揚がない。しかし、さやか

は、おやつと思った。

「あら、珍しいことを言うわね、キユウベえ」

そうか、マミもそう思ったか。

「我々は、常に事実を言っているんだよ」

「苦戦するとも思ってた？」

「バマミ、君が、今倒した魔女は、かなり強力だった」

「最初はそう思ったけど、何て言うのかしらね、読めてしまったのよ。魔女の意図が」

「なるほど。それは興味深い」

境界が消え、三人と一宇宙人は病院の自転車置き場にいた。

マミはくすつと笑った。

「あなたも意外そうね、暁美ほむらさん」

えつと驚くさやかとまどか。宇宙人も首を伸ばした。

宇宙人の現れ方も面白いものではない。しかし、あの転校生もまた、どうやって現れたのかわからない。三人と一宇宙人の真正面にいつの間にか立っていたのだ。しかも、見滝原中学校の制服を着て

「見滝原中学の生徒でもない人が、なぜ制服を着ているのかしら？」

「私は、見滝原中学の生徒だったから」

「一時的にはね。魔法を使ってまで、転校生を装ったのはなぜ？」

転校生はそれには答えず、ただ、まどかを見ていた。まどかにしてみれば、なぜ視線を向けられるのかわからない。

そしてマミに顔を向け、怒りとも、迷惑そうとも、困惑ともつかぬ、なんとも奇妙な表情を浮かべた。

「バマミ、私は、同じ警告を繰り返しはしない。警告を無視すれば、私は、あなたを殺さなくてはならなくなる」

さすがのマミも顔色が一変した。

「そんな一方的な警告、いえ、脅迫に、私がおとなしく従うと思う？」

転校生は冷たく、軽く笑った。

「本当なら、あなたは今日、死んでいたのよ」

「…あの魔女に殺されたとても？」

「ええ。そこにいるキュウベえに聞いてごらんさい」

宇宙人は、無表情に、暁美ほむらを視界に捉えているだけだった。

「…今さらだけど、あなたは何者？ 何を知っているの？」

その問いをまるつきり無視する転校生。

「せつかく生き延びたのだから、その命、大切に」

一歩転校生に近寄るさやか。

「あんた何？ マミさんのこと、心配してくれてるわけ？」

「あなたもよ、美樹さやか」

脈絡のない言葉に、さやかは憤りを隠さなかった。

「ちゃんと話さないよ！ 自分の正体とか、私たちに変に絡んでくる理由を！」

転校生の目に不思議な光が宿った。優しい光だ。

「そうね。私もできればそうしたい。でも、慎重にならざるを得ないわけがある」

くるりと背を向けた。

「今の、あなたたち二人に恨みはないけれど」

「二人？」

首を傾げるさやか。

転校生は歩き出した。

「暁美さん！」

まどかがその名を呼ぶと、転校生はびくつと立ち止まった。

「暁美さん、本当は優しい人だね。私、わかるもん！」

転校生は後ろ向きのまま宙を仰いだ。

「…まどかっ」

小さくつぶやいたその言葉を、まどかは敏感に聞きとった。

そして、顔を見せないまま転校生は言った。

「まどか、絶対に忘れないで。あなたに万一のことがあったら、両親がどれほど悲しむか、ということ」

言葉尻がまどかの耳に達した時には、すでに転校生の姿はなかつ

た。

さやかは、ふん、と息を吐いた。

「まどか、今の言葉、前にも言われたことですよ？」

まどかは黙って首を縦に振った。

「同じ警告を繰り返しはしないって、全然嘘じゃない」

もう子供じゃないんだね

ママの部屋。

三角テーブルの上には紅茶とドーナツ。

三人の表情は明るくなかった。

「あいつ、何であんな事言っただらろう?」

さやかがポツリと言った。

「あんな事って?」

ママが顔を向ける。

「ママさんは今日、死んでいたのよ、とか」

「そうね…一つ考えられることはあるんだけど」

「何ですか?」

「予知能力よ」

「予知能力!」

「そう。予知能力で、私が死んだところや、鹿目さんが魔法少女になって死んでしまう未来を見た、とか」

ふむとうなづくさやか。

「でも、そうだとしたら、あいつの予知は外れたってことじゃ…」

「まあ、そういうことになるわね。もともとの中率一〇〇%は無理なんでしょう…こう、はっきりとしたビジョンではなくて、象徴的というか、いくつか解釈のできる予知だったりすると、考えられる最悪を想定しなきゃならない、とか」

「それじゃ、あいつは、見てしまった未来を変えるために、私たちにお節介やいてると…」

ママはまじまじとさやかを見た。

「…何ですか?」

「いえ、ひょっとして、彼女、美樹さんに似てるんじゃないかって」

「え?」

「いえね、映画であっただでしょう。タイトル、何だったかしら…子

孫がご先祖様の悲劇を回避するために、とか」

「…あの、まさか、あいつが私の子孫？」

マミはくすつと笑った。

「だって、私が死んでしまったのなら、私の子孫じゃないだろうし、鹿目さんに同じ警告を繰り返してるってことは、鹿目さんにも万一のことがあった、ってことだから、そうなると残りは美樹さんしかないじゃない」

さやかはげんなりした。

「筋は通ってますけど、あいつ、二人に恨みはないって言ったんですよ。どう考えたって、マミさんと私のことじゃないですか」

「そうね。鹿目さんに名前を呼ばれたときの態度から考えても、そうよね」

「素直に考えたら、まどかの悲劇を避けるため、ですよ」

どきつとするまどか。

「そう、そのとおりなのよ…」

まどかに目を向けるマミ。

「鹿目さん、確かに、彼女には心当たりがないのよね」

「…その、あれからアルバム見たり、転校していった子を思い出したりしてるんですけど、全然…」

「そう…鹿目さんと彼女に接点がない以上、謎は深まるばかりね」

さやかは腕を組んで、重々しく語りだした。

「彼女、ある男の子供なんです。その男はズバリ、まどかのことが好きだった」

きよとんとするまどか。

「その男は、まどかを失ったことをずっと心に病んで生きてきた。それを見た娘のあいつが、お父さんの幸せのため、まどかの悲劇を阻止しようとしている。成功したら、自分が消えてしまうのも覚悟の上で…」

マミはにっこり微笑んだ。

「それなら、鹿目さんと接点がないのも当然ね」

「まどか、あんた、誰かに熱く想われてない？」

「さやかは眼差しは真剣だ。」

「そ、そんな人、いないよ。」

「うーん、どうかな、まどかは自分の女としての魅力に全然自覚ないから。」

母と同じことを言う。

夕方、家に帰ってくるまどか。

「ただいま。」

キッチンではすでに父が夕食の準備を始めていた。

「ママは？」

「ああ、達也を連れて買物に行ってるよ。」

「買物？」

「靴が小さくなってしまっただけ。ついでにいろいろ。」

まどかは顔を洗って、着替えて、エプロンをして、キッチンに戻った。

「疲れてないかい？」

「ううん、お見舞いだから、全然。」

「よし、キャベツの千切りを頼もうか。」

「はい。」

まどかは慣れた手つきで包丁を動かした。

「ねえ、パパ……」

「何だい？」

「今、この地球に悪い宇宙人が来ていて、地球を破壊しようとしてるの。」

「ほう、それで？」

「それでね、信じられないことなんだけど、私に、その宇宙人を退治する力があるの。」

「ほう、それは素晴らしいことじゃないか。」

「でもね、宇宙人との戦いは命がけなの。負けて死んじゃうかもし

れないの」

「なるほど。そうだろうね」

「それでも、私が宇宙人と戦うって言ったら、パパはどう思う？」

「僕が、戦うのはやめてくれって言って、まどかは素直に、戦うのをやめてくれるかい？」

手を止め、父の顔を見るまどか。父もまどかを見ていた。

「戦いをやめてくれ、というのは僕の、親のわがままなんだ。確かに、まどかが死んだら僕は悲しいよ。だけど、それは僕の感情だ。

僕がまどかに戦うのを断念させて、それでまどかが一生後悔するよ
うなことになったら、僕は、まどかという一人の人間の、人生を台
無しにしてしまうかもしれない。だから、そんなことはできない」

「パパ……」

「だけど、同じことをママに言ったらダメだぞ。まどかが、何か危
ないことをしているって、真剣に心配しはじめるからね」

「パパは心配じゃないの？」

「法律に違反するようなことじゃないだろ？」

父の目に、初めて見る光。それは、カミソリのように。

まどかは目を見開いたまま、小さく首を縦に動かした。

ふつと小さな笑いを漏らして、父は鍋に目を戻した。

「……まどかも、もう子供じゃないんだね」

「え？」

キツと再びまどかに顔を向ける父。

「念のため聞いておくけど、男は関係ないかい？ たとえば援助交
際、とか」

「ぼかんとするまどか。」

「神様とか、教祖様とかは関係ないかい？ 地球を救うため、生贄
になれ、とか」

表情の変わらないまどかを見て、いつもの微笑みが戻る父。

「さ、そろそろママたちが帰ってくるよ」

どうやら、その時間はないようだ

ママが風呂からあがって居間に戻ると、三角テーブルの前に、まったく予期せぬ来客が座っていた。

「私、鍵、掛け忘れていたかしら」

「いいえ」

見滝原中学の制服を着た珍客の答えは、あっけらかんとしたものであった。

「じゃあ、どうやって入ったの？ 暁美ほむらさん」

「魔法少女に、施錠なんて無意味だわ」

「…確かにそうだけど」

「ママさん、あなたに、大事な話があつて来ました」
言葉遣いが変わったことに軽く首を傾げるママ。

「そう…でも、着替えるまで待つてくれる？」

「こんな時間に、突然押しかけてごめんなさい」
頭を下げるほむら。

「いいえ、私もあなたには聞きたいことが山ほどあるし」

ママはパジャマを着て、ガウンを羽織った。

「お茶、淹れるわね。あいにく、クッキーしかないんだけど」

ほむらは、とんでもなく意外なことを口走った。

「…懐かしいです」

「懐かしい？」

ほむらは姿勢を正した。

「キュウベえがママさんを殺そうとしている。こんなに急いでるのは初めて」

さすがのママも眉間に皺が寄る。

「どういうこと？ 急いでる？ 初めてって、いったい？」

「私の知っていること、全てお話しします」

「…わかったわ。聞きましょう。その前にお茶を淹れるから、ちょ

っただけ待って」

ポットからカップに注がれる紅茶。

「どうぞ。ケーキでもあればよかったです」

「ありがとうございます」

マミはほむらの正面に座った。

「…確かに、今日のキュウベエの言葉はおかしかった。私があんな女を倒したことに、驚いていた、という感じだったわね」

「キュウベエが、驚くなんてことはありません。あいつには、人間の感情なんかありませんから」

「…まあ、そうでしょうけどね」

「知っていたんですね」

マミは一口紅茶を飲んだ。

「冷めないうちに、あなたも」

「いただきます」

ほむらもカップに口をつけた。

「…本当に殺そうとしたの？ キュウベエが？ 私を？」

「はい。あの魔女は、キュウベエが魔法少女抹殺のために温存していたものです」

「それじゃ、美樹さんや鹿目さんが発見したのも…」

「もちろん、偶然じゃありません」

「仮にそれが事実として、あなたがどうして知っているの？ そんなことを」

「そのことをお話しする前に、一つ確認させてください。マミさん、あなたは、魔女の正体、何だと思えますか？」

「なぜそんな質問を？」

「私は魔女の正体を知っています」

「私も知っているわ。全ての人間が抱える心の闇、女性の心の闇が実体化したもの」

「…キュウベエがそう言ったのですか？」

「いいえ、先輩の魔法少女から聞いたわ。昔から言い伝えられていることだ、と」

一寸思案顔のほむら。

「その方を私に紹介していただけじゃないでしょうか」

マミの表情が曇った。

「亡くなったわ。魔女との戦いで」

「…そう、ですか」

「もしかして、あなたが知っていることと違うの？」

ほむらは姿勢を正した。

「マミさん、あなたが先輩から聞いたことは間違いではありません。ただ、重要なことが抜けているだけです」

「重要なこと？」

鹿目家の寝室、ベッドの上の知久と詢子。

「ねえ、あなた…」

「何だい？」

「最近、まどかの様子、おかしくない？」

「そうかな？ 特別なことはないと思うけど」

「何かね、ひっかかるのよ」

「どういうふうに？」

「何か、隠してるって言うか…」

「好きな男の子でもできたかな」

「…そうなのかな」

「中学生だからね。好きな男の子がいたって当然だよ」

「それは特別なことじゃない、って？」

「ははは…少なくとも、君が中学生だった時に比べれば、全然普通なんじゃないかな」

「それは…」

顔に血が上る詢子。

「後で義父さん義母さんに聞いたら…」

「言わないで！」

手で顔を覆う詢子。

「いずれにせよまどかは、本当に君の子供か、と思うくらいにおとなしい子だよ。今のところはね」

「今のところって…」

「あの子だって、もう子供じゃないんだ。変わって当然だよ」

「うん…それはわかる、わかるんだけどね」

「自分が中学生だった時のことを思い出せば、親があれこれ干渉すべきでない、ってのはわかるだろ。特に君は」

「うつつ、痛いことを…」

「少なくとも僕は、お前そんなこと言える立場か、と言ってもいいくらいの気分なだけだね」

知久は笑い、詢子はひたすら恥ずかしかった。

深夜、ママのマンションを後にするほむら。

ふと立ち止まって、ふう、と息を吐いた。

「これで良かったのか…いえ、もう後戻りはできない！」

一歩踏み出そうとして、足が止まった。

はっと振り返る。

新月の夜空に黒くそびえるマンション。

「まさかっ!」

ママはガウンを羽織ったまま、ベッドの上に倒れていた。

疲れ果てて倒れこんだまま、という表現が一番近いかもしれない。

「君がそんな姿を見せるなんて、珍しいじゃないか、バママ」

明かりの消された部屋に、ぽつと現れるキュウベえ。

ママはゆっくりと顔を上げ、それから体を起こした。

「あなたが、私を殺そうとした、というのは本当？」

「一体、何の話だい？ バママ」

「イエスカノーか、どちら？」

「我々に君を殺す必要なんて、あると思うかい？　巴マミ」

「イエスかノーか、どちらっ！」

しばしの沈黙。

「君のその言葉は、曉美ほむらの入れ知恵かい？　巴マミ」

「答えて…キユウベえ！」

「なるほど。どつちら、その時間はないようだ。　巴マミ」

魔法少女になるといふこと

まどかは、ノートにマミの絵を描いた。

自分が魔法少女になるならどういふコスチュームがいいか、といふ案もいくつか描いた。

父の言葉でいくぶん心が軽くなった。

マミの言葉を胸に、命がけの願い事、それも真剣に考えているつもりだ。

さやかのお母さんが家に戻ってきますように、それだってあり得ると思う。

マミは反対するかもしれない。それでも、

相談するお父さん、お母さんもない

のは辛いだろう、と思うから。

マミの姿はかっこ良く、自分も魔法少女になったら、やっぱりかっこ良くありたい。

まどかは、ノートに夢を描いていた。

日曜日、曇り空だったが雨の降る様子はなく。

まどかは、いつもの日曜日と同じように起きて、食事の支度をして、家族四人一緒に食べて、後片付けして、二階の部屋に上がった。宿題と予習を今のうちに片付けて、と時計を見た。

「まどか、お友達が来たわよ」

階段の下から母の呼ぶ声。

「はい」

誰だろう、と思って降りていくと、玄関に立っていたのは、なんと、制服姿の暁美ほむらだった。

「暁美さん……」

「まどか、話があるの。これから美樹さやかの家に行くんだけど、付き合ってくれないかしら？」

廊下で一方的に警告めいたことを突きつけた、あの冷たい感じではない。生々しい人の温もり、熱さ、切羽詰まった、そんな気配が混じっている。

まどかは、ただごとではないと直感した。

うん、とうなづく。

「わかった」

様子を見ていた母に振り向く。

「ママ、ちよつとさやかちゃんの家に行ってくる」

詢子は、まどかの見せた表情に驚いた。しかし、この場で引き止める理由がない。

「あ、ああ、お昼はどうする？」

「わからない。後で電話するから」

まどかは、家族のことなど眼中にもない様子で、初めて見る女の子と一緒に家を出ていった。

曇天の下、歩道を歩く二人。

「暁美さん、話して何？」

「美樹さやかの家に着いてから話すわ」

突き放すような感じではない。本当に話したいことがあるのだ。

やっぱり、この人は悪い人ではない、と思う。とっつきにくいだけなのだ。

「うん」

さやかは、門の外に出て待っていた。

「私の家の電話番号、どうして知っていたの？」

それが第一声だった。

「魔法少女に、その質問は意味がないわ」

「…なるほどね。ま、いいわ。とりあえずあがって」

「ありがとう」

転校生が礼儀正しく頭を下げたので、さやかも転校生の異変に気がついた。

ダイニングテーブルを囲んで座る三人。まどかとさやかが並んで座り、正面に転校生。彼女の話の聞こえというのだからそういうことになった。

ティーカップに注がれる紅茶。

「どうぞ」

「ありがとう」

そう言うものの、転校生の顔が悲しみに包まれる。

「…どうかしたの？」

うつむいたまま、転校生は話を切り出した。

「二人とも、ママさんの家に行ったこと、あるでしょ」

「うん。二回くらい」

まどかに同意を求める視線を送ると、まどかも、軽く、うなづいた。

「死んだわ」

二人とも一瞬、転校生が何を言ったか理解できなかった。

転校生はどこから取り出したのか、細長い紙の包みをテーブルの上に置いた。

紙を開くと、赤いシミができた純白の布。

折りたたんだ布を開くと、折れた棒のような白い物体。ところどころに赤くこびりついたような汚れが見える。

「な、何？」

言葉にならない、非常にいやな予感。

「…ママさんの、骨」

シーンとした。その場が固まった。

「ほ、骨って…嘘でしょ」

喉の奥から必死に声を出す。

転校生はゆっくりと首を横に振った。

「事実よ」

まどかは反射的に立ち上がった。椅子が音を立てて後ろに倒れた。

「…う、うそ」

転校生は元どろりに、その物体を包んだ。

「魔女と戦って、敗れて死んだ」

「そんな…そんなことって！」

涙溢れ、震えるまどか。さやかは反射的にまどかの後ろに回って、体を支えた。

「ちよつとあんた、手の込んだ冗談じゃないでしょうね」

「ゆづべ、私はマミさんの家に行って、いろいろ話したの。その後、マミさんの部屋を魔女が襲った。気がついて戻った時には、もう、手遅れだった」

もう一つ、テーブルの上に置く。それは黒い石鱗のような物体。

「これが、マミさんを殺した魔女のグリーファッシュ」

「ぐりーふあつしゅ？」

「そうよ。いわば魔女の燃えカス。この密度の濃さはただごとではない」

さやかは事態を冷静に受け止めようとした。

「…あ、あんたが、マミさんの、仇を取ってくれた、ってわけ？」

転校生は静かに、ゆっくり、うなづいた。

「本来、魔法少女と多くの魔女の間には実力差があるの。こんなに強大な力を持った魔女は滅多にいない。けれど稀に、マミさんほどの魔法少女をしても、太刀打ちできない魔女もいるのよ。そんな魔女に襲われたら、倒すのは非常に難しい」

「つまり、あんたは、マミさんより強かった、って言いたいわけ？」

「いいえ、魔女が油断していたから倒せたのよ。マミさんを…食べるのに夢中になっていたから」

まどかは、朝食べたものを戻してしまった。

さすがのさやかも顔面蒼白、頭の中も空っぽだった。

「残酷だけど、これでわかったでしょ。魔法少女になるということ

「きょとんとした感じが、なのよ」

知らないでいたほうがいいこともある

転校生は紙の包みを大事そうに手に取った。

「私はこれから、これをお墓に収めに行く。できれば、あなたたちにも立ち会ってほしい」

うずくまり、嗚咽するまどか。介抱していたさやかは、その冷静な言葉に、ゆらりと立ち上がった。

「どうしてそんなに冷静なの？ だいたい、お墓なんてどこにあるのよ」

「マミさんのご両親のお墓が高田町にあるの。このままでは、マミさんは行方不明者として処理されるだけ。死んだことさえ誰も知らない。だから、せめて私たちだけでも…」

「…いいかげんに教えてよ」

「何を？」

「あんだ、いったい何者なの？ 何で両親のお墓なんて知ってるのよ！ それも魔法で調べたと言うの？」

「あなたの疑問はよくわかる。私があなたの立場だったら、同じ事を言うでしょうね。だけど人には、知らないですむものなら、知らないままでいたほうがいいこともあるのよ。私だっていつ、マミさんのように死んでしまいかもわからない。誰に知られることもなく…」

転校生はそこで一呼吸した。

「魔法少女ではないあなたたちは、マミさんや私と同じ悲劇を背負い込む必要はないの。今ここで、私が全てを話すことは簡単。けどそれを聞いてしまったら、あなたたちも同じ悲劇を背負い込むことになる」

納得していないさやかの顔を確認して、転校生はすっと立ち上がった。

「とりあえず今日のところは私一人で…」

「待つて。あんたの言うこと全然納得できないけど、あんたがそう言う理由はわかる。だから、私も立ち会う」

まどかもようやく顔をあげた。

「私も行く。お願い、私も連れてって」

転校生の表情が少しだけ緩んだ。

「わかったわ」

さやかには、すぐに対処しなければならぬ現実があった。

「その前に、床を掃除するから、ちょっとだけ待つて」

転校生はさつと手を伸ばして、まどかの方に向ける。

カツと発する光。目が眩んだ二人は声を出す暇もなかった。

光が消えると、床には乾燥したわずかの灰だけが残っていた。

「掃除機で吸ってしまえば大丈夫よ」

汚れていたまどかのスカートも、細かい灰をはたき落とすだけできれいになった。

掃除機を持ってくるさやか。

「ごめんね。私ができるから」

まどかが掃除機をかけると、嘘のように簡単に片付いてしまった。

「…魔法少女って、便利だね」

真面目につぶやくさやか。

「こんなことで、魔法少女になりたいなんて思わないで」

「こちら真面目な転校生。」

「じよ、冗談よ」

まどかは家に電話した。昼食はさやかの家でご馳走になると告げた。さやかがトーストとヨーグルトを用意して、まどかも少しだけ食べたから、まるつきり嘘を言ったわけではない。

電車を乗り継いで、三人はターミナル駅で降りた。デパートの地下をしばらく歩いて地上に出た。細い路地を数分歩くと、高層ビルもマンションもない、古そうな一軒家が立ち並ぶ、昔からの住宅街になった。

「東京のど真ん中にもこんな場所があったんだね」

さやかが驚くのはまだ早かった。

小さな踏切を渡ると、古木の生い茂る空間がそこにあった。木々の合間にたくさんのお墓が見える。お寺の墓地のような開放感、清潔感を想像していたさやかは、そこが墓地だと理解するのが一瞬遅れた。

「……ここが墓地？」

「そうよ」

墓地というよりも、林の中、木の隙間に墓を建てた、というほうが正しいかもしれない。墓と墓の間は地面そのままだ。雨が降ったらぬかるんで、まともに歩けないだろう。

転校生は古い構えの売店で線香だけを買った。

「お花は？」

さやかもうつかりしていたのだが、花のことが頭から抜け落ちていた。

「いらない、というより、供えるわけにはいかないのよ」

「どうして？」

「私たちは巴家の人間ではないし、私たちが巴家の墓に参る理由を他人に説明できないから」

転校生は地図も案内図も見ることなく、昏なお薄暗い、一応直線だがすんなり進めないでこぼこの道を、迷うことなく歩いた。さやかもまどかも、黙ってついていくしかなかった。

巴家の墓は、舗装された通路に面した場所にあった。背丈より高い大きな御影石は、周囲の墓よりも見るからに立派で、巴家のステータスを無言のうちに語っている。

脇に立つ墓碑には、安政、慶応といった元号に始まり、明治、大正、昭和と、およそ百五十年間、二十以上の法名が刻まれていた。末尾に最近刻まれた二人の法名。男女、同じ命日、マミの両親なのだろう。

転校生は線香を三本立てた。ライターもマッチも使わないのに火

が着いた。

紙包みを手前の地面に置く。

転校生が手を合わせたので、二人も手を合わせると、紙包みが燃え上がった。

もう、さやかもまどかも驚かなかった。

一分もかからず火が自然に消えると、後には灰も何も残ってはいなかった。

全てが終わって、転校生は墓碑に目をやった。

「ここにマミさんの名前が刻まれることはない。それが、魔法少女となり、戦いの中で死んだ者の定め」

さやかの頬を幾筋もの涙が流れる。

「こんなことって……」

「巴马ミという人はまだ幸せよ。こうして彼女の死を知り、記憶する者が、たとえ二人でもいるのだから」

「二人って……自分を勘定に入れてないの？」

「私は、マミさんと同じ立場。私が記憶していても意味はない。私もいずれ、誰に知られることもなく、墓に葬られることもなく、死んでいくのだから」

「そんなことない！」

まどかが叫んだ。

「暁美さんだつてマミさんが死んで悲しいんですよ。マミさんのためにここまで来て、ちゃんとお線香立てて、手も合わせてるじゃない……もし、もしも、もしも暁美さんが死んだら、私悲しいもん、暁美さんのこと、絶対に忘れないもん！」

「その気持ちはうれしいけど、それではだめなのよ」

転校生は無理に悲しみを隠しているように見えた。

「あなたたちはもう、魔法少女なんて、普通の人が開く必要など全くない悲劇とは、キツパリ縁を切りなさい。マミさんのこと、忘れるとは言わない。だからこそ、マミさんが確かにこの世にいて、人知れず戦って、死んだということを忘れないために、二人にはちゃ

んと、普通に、生きていてほしい。それは私だけの願いじゃない。きつと、マミさんも同じはず」

さやかはハンカチで目を覆った。

「わかるよ。あんたの言ってること、よくわかる。人には、知らないですむなら、知らないでいたほうがいいこともあるって、そうだよ。そのとおりだよ。だけど、もう遅いよ。知っちゃったんだから」ハンカチを下ろす。

「悪いけど、本音を言っね。何でわたしたちが、こんな目に遭わなきゃいけないの？」

決別の言葉を告げるチャンス

転校生は不思議な笑み、かすかな笑みを口の端に浮かべた。

「さやか、その言葉はものすごく重要だから、よくよく覚えておいて」

口調まで変わった転校生。

「え？」

「こんな目に遭いたくなければ、魔法少女になるという選択はあり得ない。そうでしょ？」

「そ、それは…そうよ」

「今度あなたの前にキュウベえが現れたら、こう言えばいい。私は魔法少女になる気はまったくくない。二度と私の前に現れないで、とそう言えばあいつは、本当に二度と現れないから」

「…そう、なんだ」

「さやか、あなた、上條恭介のこと、愛してる？」

あまりに唐突な言葉に、さやかは戸惑った。

「は？ いきなり何？」

さやかの単純な戸惑いように、転校生は一瞬、おやっという仕草を見せた。

「…私、申し訳ないけど知ってるの。あなたの幼馴染、上條恭介が不治の怪我を負っていることを」

「だから何だつて言うの？」

「あなたが上條恭介の怪我を治すために魔法少女になってしまつてと、容易に想像がつくから」

さやかは、なあんだ、という笑いを漏らした。

「魔法少女に隠し事はできないって？」

「ええ。残念ながら」

「確かにね、あந்தの言うとおり、そんなことを考えたこともあるよ。今だつて、ちょっとだけ引つかかっている。だけど、恭介くんは

バイオリン一筋なの。私が愛してるも何も、そんな恋愛なんて無関係の人。赤の他人とは言わないけど、私が命をかけてまで助ける義理も筋合いもないってね…ていうか、もしかしたら、あのままのほうが恭介くんにとってはいいのかもしれないって。だから、あなたの心配は杞憂だよ。たぶん。さすがに、マミさんみたいに死んでしまふのは…怖いし、悲しいし…」

「そう…それを聞いて安心したわ」

一瞬、安心したという素振りを見せて、すぐにまた、その目に冷たい光が宿った。

「それでも、一応警告しておくわ。もしあなたが魔法少女になったら、私は、あなたを殺すことになる」

それはとても冗談には聞こえなかった。本気なのだ。

「わ、わかったわよ」

二人と駅で別れ、誰もいない家に戻ったさやかは、そのまま自分の部屋に直行、ベッドにはたんと倒れこんだ。

マミの骨、白と赤のコントラストも生々しく、考えないようにしようと思っても、目に浮かんでくる。

あの、優しいに微笑んでいたマミが、もうこの世にはいないのだ。しかも、魔女に、食べられてしまったと言う。

まだかは吐いてしまったが、よくぞ自分は吐かなかったものだ。

不思議と涙は出なかった。

あまりにも、考えるべきこと、受け止めるべきことが多くて、頭が処理しきれてないのだろう。

そんなことを、冷静に観察している自分がある。

「美樹さやか、ずいぶん疲れた感じだね」

部屋に入るのを許したわけでもないのに、宇宙人が机の上にちゃっかり座りこんでいた。

「…キューバー、あんたって、ほんとに神出鬼没なのね」

「美樹さやか、君は、暁美ほむらに何を言われたんだい？」

「あいつに会ったこと知ってるなら、話の内容も知ってるんじゃないの？」

「残念ながら、暁美ほむらは巧妙な結界を使うんだ。我々は近寄ることができない」

体を起こすさやか。

「それ、本当？」

「本当だとも。暁美ほむらに質問してみるといい」

ふう、とため息をつくさやか。

「ママさんが亡くなった。知ってるんでしょ？」

「我々にとつても残念だ。ママミは魔法少女として優れた能力を持つていたんだが」

「…あんなふうに、命を落とす魔法少女って、多いの？」

「そういった質問には、我々は答えられない。申し訳ない」

「なぜ？」

「かつて、魔法少女同士が凄惨な殺し合いを繰り返したことがある」

「殺し合い？ 魔法少女同士で？ なぜ？」

「原因はグリーンファッシュの奪い合いさ」

「…あの、黒い石鹸みたいなやつ？」

「美樹さやか、それは、ママミに見せられたのかい？」

「暁美ほむらが持ってたのよ。ママさんを殺した魔女のものだって」

「なるほど。グリーンファッシュは、魔法少女にとって極めて重要な獲物だ」

「獲物？」

「魔法少女が魔法を使うと、ソウルジェムに濁りが生じる。その濁りを取り除くのにグリーンファッシュを使う」

「…濁りを放置すると、どうなるの？」

「魔法を使えなくなるんだ」

「それ、仲間を殺してまで奪うほどのこと？」

「魔法が使えなければ魔女と戦えないからね。それに、魔女に殺される危険が非常に高くなる。当然だよな」

「そうか…魔女との戦いは義務だっけ」

「美樹さやか、君は賢いから、話が簡単に済む」

賢いと言われて、気分の悪いことはない。

「他の魔法少女の動向について、我々が誰かに話すと、どこにどんな魔法少女が何人いるか、ということがわかってしまう。そうなる」と、また魔法少女同士が凄惨な殺し合いを繰り返すことにもなりかねない。それを防止するために、一切話さないことにしている。

確かに、美樹さやか、君の疑問に答えたところで、問題はないように思える。しかし、君に話してしまうと、他の魔法少女が、美樹さやかに話してなぜ私には話さないのか、と主張するのに抗弁できなくなってしまう。公平を保つため、やむを得ないことなんだよ。君の質問の意図は我々にもよくわかる。実際、我々が契約してきた数多くの魔法少女たちも、契約の前に君の質問と似た質問をしたからね。一応、話せるギリギリのところでは、巴マミの悲劇は極めて稀だ。我々にとっても残念だ」

転校生も『稀に、マミさんほどの魔法少女をしても、太刀打ちできない魔女もいる』と言っていた。

「…そう」

「なるほど。巴マミが不幸な最後を遂げた直後だ。美樹さやか、君に、心の整理をする時間が必要なのは、当然だよ。今日のところは、これで失礼するよ」

宇宙人はひゅんと消えてしまった。

転校生に教えられた宇宙人との決別の言葉を告げるチャンスが無かった。

今できることを一所懸命に

重い足取りで家に帰ってくるまどか。
珍しく、母が玄関先を掃いていた。

「おかえり」

「うん…」

「どうした？」

「…別に、何も」

「何もつて顔じゃない。自分でもわかってるよな」

「うん」

「話してみな」

「何でもないの」

「…落ち込みようが普通じゃないぞ」

「ごめんなさい」

母の前を通りすぎようとして、手を掴まれた。

「そんなに、親にも話せないことなのか？」

「お願い…離して」

「あいな…」

その時携帯電話が鳴った。

「…はい、かな…えっ！なにそれ！」

たちまち仕事の現場に引き戻される母。

「ちよつと待つて！今パソコンの前にはいないから」

慌ただしく、家に駆け込む母。

取り残されたまどかは、とてもほっとするような気分でもなく、
うつむいたまま玄関で靴を脱いだ。

キッチンでは父がりんごの皮を剥いていた。

「おかえり、まどか」

「うん」

「どうしたんだい？」

「何でもないの」

父は手を動かしたまま言った。

「話したくなければ話す必要はないよ。ママは僕がなだめとくから」

「…ありがとう、パパ」

「だけど僕は、いつでもまどかの力になってあげられる」

「うん…」

「今まどかは、僕の言葉を単なる社交辞令、くらいに思っただろ？」
はっとするまどか。

「そうじゃない。本当のことなんだ。まどかが、まさか、と思うよ
うなことでもね」

そう言っつて、父はまどかに顔を向けた。

目が、それは嘘ではないと語っている。

「パパ…」

「今日は僕一人でやるから、まどかは休んだほうがいい」

まどかの目に生気が戻った。

「ううん、大丈夫」

まどかは洗面所に行っつて顔を洗った。鏡に映る自分の顔。

とりあえず、今できることを一所懸命にやるう。

高層ビルの屋上、嚴重に施設され、ビルの利用者ですら簡単には立ち入れないはずの場所に、彼女はいた。ジャージにウインドブレーカー、ラフな格好の彼女は、お気に入りのポテトチップスを食べながら、夕暮れの街を見下ろしていた。

「誰だい、あんた？」

振り返りもせずつぶやくように言う。

「佐倉杏子、あなたに話があつて来た」

「へえ、あたしの名前、誰に聞いたんだい？」

「巴マミ」

杏子はくるりと体を回した。

ほむらを上から下まで観察して、にやりと笑った。

「なるほど、マミもそろそろ引退だろうから、見滝原中の後輩を後継に、ってわけか」

「亡くなったわ」

一瞬、杏子の息が乱れ、笑いも消し飛んだ。

「死んだ？ まさか、魔女にやられたのか！」

「ええ」

「…あのマミが、まさか！」

「事実よ」

「…それで、あんたがマミの最後に居合わせたと？」

「ええ。これを見ればわかるでしょ、彼女がどんな魔女に襲われたか」

ほむらは、腕を伸ばして、グリーンファッシュを突きつけた。

「これは…」

顔を近づけ、食い入るように見つめる。これほど密度の濃い、光を一切反射させぬ、見ているだけで心を持っていかれそうな漆黒、そんなグリーンファッシュは、杏子も見たことがなかった。自身の戦って得た経験から、たいていのグリーンファッシュは表面を見るだけで想像がつく。その魔女がどれほどの魔力を持っていたかを。

弱い魔女ほど表面が荒く、白っぽく見える。

その真逆、未だかつて見たこともないただならぬ質感。考えるまでもない。その魔女がいかに強大だったか、直接魂に訴えかけてくるものがある。

「…こんなすごい魔女がいたのか」

首を上げほむらの表情を窺う。

「この魔女、あんたが倒したのか？ 一人で？」

「ええ。油断していたから」

「油断？」

「彼女を、食べるのに夢中だったから」

杏子は眉間に皺を寄せ、体を引いた。

「…たとえあんたの言うとおりでなくても、その魔女は普通じゃな

い。あたしでも一人で倒す自信はないね。それに、あなたのその表情が気になる。マミの死などたいしたことではない、って感じがな。ゆっくりと左腕を伸ばす。何事かと思った刹那、喉元につきつけられる切っ先。

腕から伸びる長大な鉾。

「あなた、いったい何者だ？」

信じる信じないはあなたの自由

刃が顎の下に届いていても、ほむらは微動だにしなかった。

「暁美ほむら」

「名前なんかには興味はない。あたしが知りたいのはあなたの正体さ。あんた、ただの魔法少女じゃねえな？」

「その銚を数センチ動かせば、あなたの知りたいことがわかるかもしれない」

睨みつける杏子に対して、ほむらはただ見ていた。

すつと銚を引っ込める杏子。

「やめた。嘘かホントか知らないが、そんな魔女を一人で倒したつて言うし、正直、あんたの底が見えないんだよな。あんたがあたしを殺す気なら、殺されたことさえ気付かなかつたかもな」

「さあ、それはどうかしら。やってみないとわからないわ」

不敵な笑いを浮かべる杏子。

「今のところあんたに敵意がないことだけはわかった。それで？」

話つてのは？ まさか、マミの最後を語りに来ただけでもあるまい？」

「ワルプルギスの夜、この言葉に心当たりはないかしら」

「わかるぶるぎす？ 知らないね。それがどうかしたのかい？」

「私は、そう名乗っている魔法少女を探している」

「…そんな奇妙な名前、名乗ってりゃ記憶に残るけどな。あいにく知らないね」

「そう」

「そいつを探してどうするつもりだ？」

「知らないのなら、さしあたりあなたには関係ないわ」

「さしあたり？ 気になることを言うじゃないか」

「いずれわかるわ。いやでも」

銚の柄をカツンと床に落とした。

「なるほど。その先は言うつもりはないと」
「ええ」

「だが、そこまで聞いちゃったあたしとしては、探さざるを得なくなるわけだ」

「それはあなたの自由」

「ふ…あなた、キュウベえ並の策士だな」

「あいつを、策士だと気がついてるのね」

「気が付かないほうが間抜けなのさ」
しばしの沈黙。

「ところで、マミがいなくなった見滝原一帯は、あなたが縄張りにするってことかい？」

「いいえ、できればあなたに」

「条件は？」

「条件？」

「あそこは長くマミが君臨してたんだ。ひかるでさえマミに遠慮してる。あなたが一言、マミの遺言だ、と言えば誰も文句は言えない。それを簡単に他人に譲るってのは、何か裏があるに決まってる。そうだろう？」

「ひかるって、望美ひかるのことね」

「ああ。あなた同様底の見えない女だけだな」

「あなたが引き受けないなら、望美ひかるに話をもっていくまでの話」

「…狙いは何だ？」

「何も。ただ、見滝原を縄張りとする魔法少女がいる、ということ
が重要」

「なぜあなた自身じゃダメなんだ？」

「私は、フリーハンドを確保しておきたいだけ」

「あたしを、わるふるぎすのよる、とやらをおびき出す餌にでもするつもりかい？」

「いいえ、別の魔法少女が現れないようにするためよ」

「そんな理由、信じられるとでも思ってるのか」

「信じる信じないはあなたの自由」

ほむらは長い黒髪を手ではねた。

「聞くべきことは聞いたし、伝えるべきことは伝えた。後はあなたの好きにすればいいわ」

そう言つと、ほむらは何の前触れもなく一瞬にして消えた。

杏子はもう一度、銚の柄をカツンと床に落とした。

月曜日、まどかはいつもと同じように学校に向かって歩いていった。先を行くさやかの背中が見えても、声をかける気にはならなかった。

昼休み、明らかに様子がおかしい二人を見ていた仁美は、半ば強引に二人を屋上へ連れだした。

「お二人とも、どうなさったんですの？」

まどかは返答を考える気力さえない。

さやかがうつむいたまま重い口を開いた。

「ちよつとね、この間話した先輩がね…」

ぎよつとするまどか。

「行方不明になって」

単純に驚く仁美。

「行方不明？」

「うん」

「そう、ですの…」

まどかは改めてさやかの頭のキレに感心した。そうだ、それは事実なのだ。

「心配ですわね」

何も知らない仁美の反応に、まどかの心は痛んだ。確かに、行方不明なのは事実だが、死んだということは絶対に言えない。

「ごめんなさい、変な気を回してしまって」

「ううん、私もまどかもちよつとショック受けてるから…こっちこ

「そごめん」

「心当たりとか、無いんですの？」

ぎくつとするまどか。

「まったく無いってことはないけど……うかつなことは言えないし」

さやかは本当にうまい。

「でも、万一つてことも……」

仁美が言い終わらないうちに、さやかは大声を出した。

「仁美！」

「……ごめんなさい」

仁美も口をつぐむしかなかった。

お嫁さんになってあげる

放課後、仁美は用事があると言ってまっすぐ帰宅してしまった。

さやかもまどかも、仁美の与り知らない世界を共有してしまった身としては、仁美とどう接して良いか迷う、はつきり言ってしまうば面倒だったので、むしろほっとしたくらいだった。

しかしながら、さやかもまどかも、お互い話す話題もなく、足取りも重いまま、通学路で簡単な挨拶だけして別れた。

さやかはその足で上條恭介が入院している病院に向かった。

先日魔女の結界が出現した壁は、何事もなかったかのように、ただそこにあった。それだけだった。

さやかとしては、転校生に言われたことがどうしても気になるのだった。自分が恭介の怪我を治すために魔法少女になる、はつきり言って、そこまでの義理はない。そう思う。命の危険を冒すという事実は、マミの無残な最後を知っている以上、この上もなく重い。死ぬのは怖い。当たり前だ。高校受験のことも考えておかねばならない。魔法少女になったがために勉強が疎かになり高校受験に失敗でもしたら、先々長い人生、不利になることは容易に想像できる。だから、転校生が言ったとおり、魔法少女になるという選択肢はあり得ないのだ。いや、そもそも、自分が魔法少女などという、わけのわからないものや、気色悪い宇宙人などと、関わる必要などまったくもないのだから、選択する必要さえないではないか。

半分空いている病室のドアをノックしても返答はない。

恭介が半身を起こして、片手でスマートフォンを操作しているのが見えた。

さやかが何と挨拶していいか考えながら中に入ると、

「何の用？」

恭介は小さな画面に目を向けたまま、相変わらずの物憂げな声を出した。

「何の用って、この間早く帰っちゃったから」

「怪我の程度、確認に来たのかい？」

「そんなことは……」

「足のほうは、リハビリすれば何とか歩けるようにはなるってぞ。だけど、左手は……」

ベッド脇の椅子に腰を下ろす。

足元の床に散らばる楽譜。タイトルはドイツ語だったが、さやかにはお馴染みの単語が並んでいた。

「……これ、右手のための……」

「そう、右手だけで弾ける曲だよ」

「それじゃ……」

「父さんが置いてったんだ。だけど、右手だけじゃ、ハンデがある中では立派、しか追求できない」

「だけど、右手だけのピアニストって何人もいるし……」

「もちろん、その人たちを馬鹿にするつもりはないよ」

言葉が、かつての聡明な恭介に戻っていた。さやかは一瞬樂觀してしまった。

「……だけど、僕の中の怪物が、それじゃ満足しない」

「怪物？」

「悟おじさんと一緒だよ。バイオリンを弾くことしかできない怪物さ」

「……」

「その怪物が、バイオリンを弾けないくらいなら、人生をリセットしてやり直せ、と言っている」

その言葉の意味がさやかの脳裏に浮かぶのを、もう一人の自分が必死に押しとどめている。

「……何、言ってるの？」

「死ぬんだよ」

恭介は事も無げに答えた。

さやかは、父が引き合いに出されたことが面白くなかった。

「…何言ってるの？ 父さんと一緒？ 馬鹿言わないで。父さんはそんなことで死んだりしない！」

恭介は、さやかにはつきり聞こえるほど大きいため息をついた。
「なあんだ…さやかは、自分のお父さんのこと、何も知らないんだな」

「知らないって、どういうことよ」

恭介はくくくと笑った。

「父さんのバイオリン、さやかはどう思う？」

「ど、どうって…」

「聞いてて退屈だろ、悟おじさんのピアノに比べて、全然」

「そんなの、楽器が違っし比較なんかできるわけないじゃない」

さやかを見つめる恭介の目に、父と同じ光を見た。

そう、狂気！

「父さんは楽譜の通りに弾けるだけさ。もちろん、素人には真似できないレベルだよ。でもそれだけさ。悟おじさんのピアノ、全ての人間、いや、神さえ悪魔さえ沈黙するあの、魂の演奏、そう！ 魂の演奏だ！ 比較することさえおこがましいんだよ！」

さやかは、叫ぶ恭介の姿に、父と同じものを見た。

母がなぜ、父にあそこまで心酔するのか、同じ女として、一瞬にしてわかった。わかってしまった。

「…手が、治ればいいの？」

恭介の顔が瞬時に沸騰する。

「当たり前だ！ 当たり前じゃないか！」

「私が治してあげる、って言ったら、信じる？」

「いいかげんなことを言うな！」

怒号する恭介。さやかは冷静に、同じ高さの目線で見据えていた。

「本当だよ、恭介」

小学生の時、確かに一度、聞いた覚えがある言葉。

恭介は何も言い返せなかった。理屈ではない何か、さやかにそう言わせているんだと、わかったから。

あの時、続いた言葉は、

お嫁さんになってあげる。

それでも揺るがない決心

病室を後にして一人になってみると、さやかは、うっかり自分の言ってしまったことに後悔した。魔法少女になってまで、命を賭けてまで、恭介を助ける義理はない。理性はそうささやく。高校受験もある。魔法少女になっている余裕などない。理屈はまったくその通りだ。自分は関わらなくてもいいのだ。反論の余地などどこにもない。

しかし、家に帰ると風呂に直行しシャワーを浴びねばならなかった。湯の温度をいつもよりずっと低くせねばならなかった。全身の肌が敏感になっていたからだ。

胸に手を当てる。もはや疑いようもないことだった。脱いだショーツを確認するのめためらわれる。

女が濡れる。

それは知識としては知っていたが、まさか。

「あ……」

さやかは夕飯も食べることなく、ベッドに倒れこんだ。

そのまま眠ってしまったかった。

「美樹さやか、君は、いつもこんなに早く寝てしまうのかい？」

突然の宇宙人の問いかけにも、もはや驚かなかった。

うつ伏せのまま、さやかはつぶやく。

「ねえ、キューバー、魔法少女になるには、願いが必要だと言ったでしょ」

「もちろんだとも」

「それって、他の人の怪我を治す、ってことでもいいんでしょ」

「我々としては、そういうった願いの扱いは慎重にならざるを得ない。ただし、人類が手にしている医療技術では治療不可能、ということなら、引き受ける価値はあるだろう」

「なぜ慎重にならざるを得ないの？」

「美樹さやか、君もすでに理解していると思うが、魔法少女は願いを叶えた代償に、一定期間命がけの戦いを課されることになる。それを十分に検討した上での決心なのかい？」

さやかは答えなかった。

「美樹さやか、君が、他人、たとえば鹿目まどかに相談すれば、やめておけと言われる可能性がある。それでも揺るがない決心なのかい？」

やはり答ええない。

「美樹さやか、明日一日、よく考えてみることをお勧めする」

宇宙人はそのまま立ち去ったのか、続く言葉はなかった。さやかもそのまま眠ってしまった。

翌朝、さやかは、いつもより早く家を出て、ぼんやりとした顔のまま学校に登校した。教室にはまだ数人しかいなかったが、珍しく仁美が先に席についていた。

「おはよう。今日は早いじゃん」

「おはようございます」

仁美の表情がどこか暗い。

「どうしたの？」

「え？」

「何か悩み事があるって顔してるから」

「実は……」

まだ静かな教室。

「ええっ、お、おみあ……」

さやかは大声を出したが、かろうじて最後のところを喉で呑み込んだ。

当然、クラスメイトの視線が集まる。

「と、とにかく、まだ時間あるから、外で」

さやかの提案に仁美も同意した。

朝の屋上は、時々恋人同士で逢瀬、なんてこともあるらしいが、今日のところは幸い誰もいなかった。

「お見合いつて、それ本当なの？」

「ええ」

仁美は伏し目がちに答えた。

「中学生だよ。今からお見合いつて、それ、早すぎない？」

「世間の常識ではそうなんでしょうけど……」

「断っちゃえばいいじゃん。もう好きな人がいる、とか言つて」

「父にそういう嘘を言うわけにはいきませんわ」

「ラブレターの一通くらい貰つてるでしょ。それ見せれば……」

「それでは差出人に迷惑がかかりますし」

「まさか、うちの娘に手を出したのはお前かつて締め上げる、そんなお父さんじゃないんでしょ？」

「まるでマンガですけど、そうならないとも限らないですし……」

「……それ、マジなの？」

「それに、お見合いは、家と家のことですから」

「あんたが気に入らない男だったらどうするの？」

「とにかく、一度は会ってみないと、何とも」

はあ、と息を吐くさやか。自分の悩みなど吹き飛んでいた。

「……それで、相手の男はいくつなの？」

「いくつって？」

「歳よ歳！」

「ああ、同い年、だと」

「写真はもう見たの？」

「いいえ、それはまだですけど」

「……まあ、すでに成人でないだけかもしれませんが」

「なぜ成人だといけないんですの？」

「そりゃ、男が年上つてのはよくあるパターンだけど、相手が今すぐ結婚オツケーだったら、それこそ中学卒業即だよ。女は一六から結婚できるから」

「なるほど…さすがはさやかさん、私、そんなこと考えてもいませんでしたわ」

携帯電話機の時計を見る仁美。

「そろそろ戻らないと」

昼休み、話を聞いたまどかは、最初ぽかんとして、事情を呑み込むとおおいに驚いた。

「仁美ちゃん、その話オーケーしたの？」

「一応、そういう話を進めているから、準備はしておけ、と」

「準備つて、何の準備よ」

一人憤るさやか。

「いきなり言われたんでしょ？」

まどかは心配顔だった。

「ええ、まあ」

「中学生だし、高校受験もあるし、とか言えば…」

「私は末の四女ですし、いずれ結婚して家を出ることは決まっているわけですから、少しでも志筑家に貢献できるなら、と」

仁美に四人の兄、三人の姉がいるということは聞いて知っていた。それだけでもすでに、まどかやさやかの棲む世界と大違いなのは明らかだ。それでも、マンガやドラマではお馴染みの政略結婚、おそらくはそんな結婚を、仁美が簡単に受け入れてしまっているのは、二人とも納得しがたいことだった。

「私も、気が重いのは確かですけど、とりあえず相手の方とお話してみないと…すべてはそれからすわ」

仁美はようやく笑顔を取り戻した。

ハンバーガーショップにて

平日の夕方、郊外のハンバーガーショップ。広い駐車場は半分ほど埋まっていた。

ドライブスルーの車が列を形成している。

店内のレジは混雑していても、座席は半分も埋まっていなかった。だから、その人物はすぐに見つかった。窓際の二人席に一人で座り、英語の本を読んでいた。

「ここ、相席いいかい？」

セーラー服の少女は、ちらっと目だけ動かして、言葉の主を確認した。

「ええ、どうぞ。ちょうど退屈してたところだから」

少女はテーブル上のトレーを動かして、後から来た客のためにスペースを作る。

杏子は、ホットコーヒーの紙カップだけが載ったトレーをそのスペースに置いた。

「学習してみたよね」

本から視線を外さない少女。

「あたしゃ、同じ失敗を二度繰り返したりしないよ」

前回、何も購入しないまま席に座ろうとして、先に何か買ってこい、と指摘されたのだった。

「自慢できることでもないわね」

「…いちいち口が悪いぞ。それで相当損してるんじゃないか？ ひかる」

「ため口のあなたに言われてもねえ…」

望美ひかるは、相変わらず読書続ける。

杏子はふつと息を吐いて、コーヒーのキャップを取った。

「あなたに聞きたいことがあって来たんだ」

「そう」

気のない返事。

「ま、今の態度からして、用件の半分は済んだも同然だがな」
「…どういうこと？」

「暁美ほむらつて女、知らないよな」

「知らない」

「ということは、マミが死んだことも知らないな」

そこで初めて、ひかるは本を閉じて、杏子の目を見た。

「死んだ？ マミが？ 魔女にやられたの？」

「ああ。同じ見滝原中の暁美ほむらが知らせに来たんだ」

「…そう。あのマミが死んでしまうなんて…」

ひかるは天を仰ぎ、大きく息を吐いた。

「マミを殺した魔女つてのが只者じゃない」

ひかるの表情にも、さすがに余裕はなくなった。

「…あなたも見たの？」

「いや、暁美ほむらが持ってきたグリーンファツシュを見ただけさ。

けど、そいつが異常だったんだ。新品の石鹸くらいの大きさで、表面が鏡のようにつるつるピカピカ光ってて…あたしも今まで二十以上見てきたけど、あんなのは初めてだ」

「ふうん…その程度の話でも、かなり異常だつて事だけはわかるわね」

しばし会話が途切れる。ひかるはティッシュで目を押さえた。

「…その、暁美つて子が魔女を倒したわけでしょ？」

「ああ。魔女がマミを食うのに夢中になって、油断してたから倒せたんだ、と」

眉間に皺を寄せるひかる。

「辛いわね…」

「だがな、暁美ほむらつて女は全然悲しそうでもなかった」

「…そう見えただけでしょ？」

「いや、あれは違う。目の前で誰が死んでも自分には関係ないことだと割り切れる、そんな感じだった」

「マミと彼女の関係は？」

「そのへんのことは一言も言わなかった。ただ、一年生のバッジを付けてた」

「質問はしたの？」

「聞いたって素直に言うようなタマじゃないさ、あいつは」

「…杏子の一方的な話だけでは何とも判断しがたいんだけど」

「なら、自分で見滝原に行って会ってくるんだな。少なくとも中学には通ってるわけだし、簡単に見つかるはずさ」

「なるほど…マミの最後について、もう少し聞いておきたいわね、せめて」

杏子はかぱつとコーヒーを飲んだ。

「もう一つ。ひかるは、ワルブルギスの夜って聞いたことないか？」

「確か、ヨーロッパのお祭りの名前だったんじゃないかしら。それが？」

「それじゃなくて、そう名乗ってる魔法少女がいるらしいんだ」

「…ああ、聞いたことあるわよ」

「なに！ほんとか！」

「加奈子さんが話してたのよ。ほら、彼女がよく自慢してた都庁での戦い、あの時出会った魔法少女の中にいたって」

「今どこにいる？」

「さあ、変わった名前を名乗ってた魔法少女がいたって聞いただけで…」

加奈子からさらに詳しい話を聞くことはできないのだった。なぜなら彼女は、ひかると杏子、そしてマミの三人の目の前で、魔女に殺されてしまったから。

「いずれにせよ、新宿近辺なんだな」

「それはわからないわよ。あの時は大阪や九州からも魔法少女が集まってたんだし」

「…そうか、そうだったな」

「杏子も私もまだ魔法少女になる前の話。加奈子さん以外誰も知ら

ないわけだし」

「参加してた魔法少女も、ほとんど引退してるだろうしな」

「年齢的にね。ワルプルギスの夜だって、もう引退してるかもしれない…だけど、その彼女がどうかしたの？」

「暁美ほむらが探してるんだとさ、彼女を」

「ふうん…なぜ？」

「さあ？」

「それも理由を言わなかったわけ？」

「さしあたり、あたしには関係ないんだと」

「さしあたり？」

「いずれ、いやでもわかるそうだし」

「気になる言い方ね」

「そういう奴なんだ、暁美ほむらって女は」

「ふうん…マミの縄張りを引き継ぐつもりでしょうから、挨拶がてら直接会ってみる必要があるそうね」

「ところが、見滝原一帯をあたしに譲ると、そう言いやがった」

ひかるは驚きを隠さなかった。

「…杏子のことをマミから聞いていたとしても、ずいぶん不可解な話ね」

杏子はコーヒを飲み干して、にやりと笑った。

「それに関しては、一応理由めいたことを言ってた。誰かが見滝原を押さえれば、新たな魔法少女は出てこないだろう」と

「…それは、キュウベえに対する意思表示、って意味かしら」
「たぶん」

「自分はどうするつもりか、言ってなかった？」

「フリーハンドを確保しておきたい、だとさ」

「…杏子を囷にでもするつもりかしら」

「ま、そんなところだろ」

ひかるは持ったままだった本を鞆にしまった。

「ワルプルギスの夜が産んだ魔女をおびき出すため、とか？」

人間を捨てる選択

杏子はそれを聞いて、ふんと息を漏らした。

「魔法少女が魔女を産む…それ、前にあたしが言ったことだ。その時あんた、否定したじゃないか」

「ええ。覚えてるわよ。あの時は、まさか、と思っていたの。だけど、私も出くわしたのよ。異常に強い魔女に」

前言をあっさり翻したわりに、あまり悪びれた様子もないひかる。杏子は、もう一つ息を吐いた。

「だけど、今ここにあんたがいるってことは、倒したんだろ、そいつ」

「ええ。辛うじて、だけど」

「…辛うじて、ね」

「確かに、魔女は二種類いると考えざるを得ないのよ。普通の魔女と、異常に強い魔女」

「二種類いるってのは当然として、あんたが、異常に強い魔女を魔法少女が産んだと認める根拠は？」

「あなた言ってたわよね、希望と絶望はコインの裏表のようなもの、表があつて裏のないコインは存在しない。希望があつて絶望のない人間は存在し得ないと。私も、それが真実だとわかったの。当然、コインの表が大きければ裏も大きいのよ」

杏子は背筋を伸ばした。

「なあ、ひかる、寒い時はストーブに当たりたいだろ。逆に暑い時はクーラーの効いた部屋が恋しい。これってなぜだと思う？」

「…なぜって…どうということ？」

「人間はな、暑い環境にいたいという欲求と、寒い環境にいたいという欲求、相反する欲求が常に同時に存在してるんだ。だから、寒くなれば寒い環境にいたいという欲求は満たされる。すると、暑い環境にいたいという欲求がまったく満たされてないことに気がつく

わけだ。そこでストーブに当たりたくなくなる。逆もまったく同じこと。このことさえ理解できれば、人間の真実、神の世界が理解できるんだ、これが親父の口癖だった。戦争と平和、喜びと悲しみ、希望と絶望、すべて同じことなんだと。人間は常に相反する欲求を同時に抱えて生きている。一方が満たされると、反対の欲求が満たされていないことに耐えられなくなるのさ」

「だけど、絶望って求めるものかしら？」

「そいつは言い方の問題だな。不安ってやつだよ。こんなにうまくいくはずがない、って不安さ。たとえば、全然健康なのに、病気になるんじゃないか、って不安だ。不安が強ければ強いほど、本当に病気がつちまう。そのとき、人はこう思うもんだ。やっぱり病気になる、やっぱり病気は避けられなかつたんだ、と。これって、病気になるらいたって願望と同じことじゃないか」

「…なるほど」

「魔法少女も奇跡的な希望が叶って、喜びの絶頂にあるとき、こんなにうまく行っていいのか、何かしっぺ返しを食らうんじゃないかって不安を抱いた瞬間に、希望がでかければでかいほど、不安もでかくなるんじゃないか、それが極端な場合は…」

「死ぬか、魔女を産んでしまうか…」

「そういうこと」

「…私もね、加奈子さんが亡くなった時のことをずっと考えていたの。あれは、率直に言って加奈子さんの自滅よ。だけどなぜ自滅したのか、あなたの話で確信が得られた」

「そうかい？ あんたの役に立った、ってなら、わざわざここまで来たかいもあったってもんだ。しかしな、ひかるは一つ、大事なことを忘れてるぞ」

「大事なこと？」

さやかが家に帰ってくると、なんと明かりがついていた。

玄関で慌ただしく靴を脱いで、居間に駆け込むと、ガウンを着て

すっかりくつろいだ様子の母がソファに腰を下ろしていた。

「あら、おかえり、さやかちゃん」

「…お母さん、何で知らせてくれなかったの？」

「ああ、ちよつと仕事がキャンセルになったから帰ってきただけで、予定してたわけじゃないしね」

「はあ、とため息の出るさやか。」

「夕飯、まだでしょ。どこかに食べに行かない？」

「スーパー寄って、買ってきちゃったわよ」

「何を？」

「うどんとか、椎茸とか」

「ふうん…味噌煮込みうどんでも作るつもりだったの？」

「そうよ」

「あんた好きだったわね」

「今も好きなの！」

「そう。じゃあ、久しぶりに作ってあげましょうか」

母はそう言って立ち上がった。さやかは呆気にとられた。

「…どうしたの？ お母さん」

「どうしたのって、何が？」

「だって…」

ここしばらく、家に帰っている時は、ただぐだぐだしているだけで、食事を作ってあげよう、なんて言うような母ではなかったから。

「あの人と久しぶりに会ってね」

「お父さんと？」

「ええ。あの人もさやかのことが心配だ、なんて言ってたし、私も、ちよつとほつたらかしにしすぎたかな、って思うしね」

「…今さら、何言ってるのよ」

「さやかの目に浮かぶ涙。」

「言い訳はしないわ。明日の夕方には日本を立つしね。でも、せめて今夜くらいは」

「さやかはうつむいたまま言った。」

「お母さんの味噌煮込みうどん、作ってよ。材料は揃ってるから」
「ええ。喜んで」

一緒に食卓を囲み、一緒にお茶を飲んで、学校のことなどいっぱい話して、さやかは小学生に戻ったような気分だった。

「でも、安心したわ。さやかちゃん、ちゃんと成長してるから」

「何言ってるのよ。ちゃんと家にいてくれたら安心も何も無いのに」
「それはそうなんだけどね。私はね、自分勝手なのよ。あの人もそう。とにかく他人に束縛されるのがいやなの。たとえ自分の夫だろうと娘だろうと」

「それ、私だから良かったけど、他の子だったら、今頃生きてないかもしれないよ」

「ふふ…さやかちゃんはあの人と私の娘ですもの、そんな弱いわけないじゃない。それに、さやかちゃんだって同じじゃないの？」

「同じって、どういうこと？」

「他人に束縛されるのがいやってことよ」

「それとこれとは話が…」

「違わないのよ。あの人も言った。さやかは俺と同じ目をしてるって」

どきっとするさやか。

「お父さんが、そんなことを？」

「私にもね、わかるのよ。さやかちゃんが、いわゆる普通の女の子じゃないってことが」

「普通の女の子じゃないって、どういうこと？」

「あの人の言葉を借りれば、俺と同じ選択をするかもしれないって」

「お父さんと同じ？」

「そう。人間を捨てる選択をね」

魔法少女には関わるな

表情の固まるさやかを見て、母はクスッと笑った。

「さやかちゃんか化け猫に誘われたら、すぐに魔法少女になっちゃうでしょうね」

さやかは、おかしな声が出そうになるところ、辛うじてこらえた。

「…な、なに、その、魔法少女って」

「え？ まさか、本当に化け猫に誘われてるの？」

「そんなことあるわけないけど、だけど、その魔法少女って、何なの？」

どうして知ってるの、と言わずにすんだことを安堵する自分がいる。

「都市伝説よ。昔、何かの本で読んだことあるけど」

さやかとしては詳しく聞きたい。しかし、うかつな質問をすれば怪しまれるだろう。いやすでに、母には何か気づかれているかもしれない。

黙っているさやか。母は立ち上がって、急須にポットの湯を注いだ。

「お茶、飲む？」

「うん」

動揺の色は見せずに答えたつもりだが、見ぬかれているかもしれない。

茶碗を二個テーブルに置き、急須の湯を注ぐ母。時間がやたら長く感じられる。

「ありがとう」

そう言って、さやかは茶碗を手に取り、お茶を飲んだ。時間の進み方が遅い！

「何でも、化け猫が、願い事を叶えてやるかわりに魔法少女になって魔女と戦えと誘うそうよ。十歳から十六歳くらいの女の子を」

「…ふうん」

「神憑きとなつて鬼と戦え、とか、いろいろバリーションがあるみたいけど」

「その本の名前、わかる？」

「さあ…たぶん立ち読みだったから…雑誌だったかな。でも、ネットですぐ調べれば出てくるんじゃない？」

「そうだ、そうなのだ。うかつだった。」

「さやかは表情の変化を母は見逃しはしなかった。」

「何期待してるの？」

「え？」

「本当に魔法少女になるつもり？」

「ま、まさか。そんなアニメかマンガみたいなことが本当にあると思ってるの？」

「ネットで調べればわかるでしょうけど、魔法少女の末路は悲惨だそうよ」

「悲惨？」

「そう。魔女に殺されるか、自分自身が魔女になってしまふか、いずれにせよロクなことにはならないらしいわ」

「そうかもね。本当に魔法少女なんていたとしても、アニメやマンガじゃないわけだから」

「さやかは、にこやかな表情を作ったが、母の目から漏れ出る光は「ばれてるぞ」。」

「さやかちゃん、魔法少女になつても驚かないし、事前に相談されても止めはしないわよ」

「マジ顔で変なこと言わないでよ」

母は笑っていた。

「魔法少女さやか…ふふ、一度見てみたいわねえ」

警視庁捜査第一課特別捜査第三係の白鳥警部は机上の書類をめくっていた。やがて、不機嫌な顔をして書類を放り投げた。半年前に

買った背広のパンツ、もうウエストがきつい。

「どうかしたんですか、警部？」

話しかけてきた山下警部補はそういった悩みとはまるで無縁の細身だった。

「また行方不明の女子中学生だ」

山下が書類に手を伸ばすと、白鳥がさつと書類を引き寄せた。

「え？」

「ないんだよ、映像が」

「映像って、監視カメラのことですか？」

「ああ。マンションに戻った映像を最後に、出て行く映像がない」

「ということば……」

「建物の中で忽然と消えた、ということになる」

「今もマンションのどこかに？」

「全世帯立ち入り捜査、ということになるだろうな」

「大きな荷物に押し込めて、ということば？」

「当然チェックしてる」

「……いずれにせよ、我々の出番はなさそうですね」

特別捜査第三係は、主に未解決事件の補充捜査が主たる任務であり、発生直後の事件は滅多に回ってこない。未解決事件の補充捜査というと聞こえはいいが、要するに、事実上迷宮入りの事件について、突発的に何か情報が寄せられた時などに対応する、実質雑用係なのであった。

「何言ってる。俺の勘じゃ、こいつはそんな常識的な事件じゃない」

「はあ？」

「忘れたのか？ 二年前のヤマを。この子、お前も会ってるぞ」

警部が書類をめくって写真の部分を持ち上げた。山下もピンときた。

「あ、この子、たしか亜矢加奈子ちゃんの……」

そう、バマミという行方不明の女の子は、二年前、やはり行方不明になった亜矢加奈子と一緒にいるところを目撃されていたのだ。

「そうだ。あの子だよ」

白鳥と山下は亜矢加奈子の失踪に関して、バママミが何かを知っていると踏んで任意の事情聴取を繰り返した。しかし、彼女の身元引受人である弁護士への訴えによって中止を余儀なくされたのだった。

「加奈子の弟は、お姉ちゃん魔法少女になった、と言っていた。バママミの失踪も魔法少女と関係があるに違いない」

「魔法少女、ですか」

当時、幼稚園児だった弟は、姉が猫と話していた、とも証言している。もちろん、幼稚園児の言うことであるから、両親も含めほとんどの大人は相手にもしなかつた。知る人ぞ知る都市伝説、化け猫が誘う魔法少女。一部の趣味雑誌や、ネットの片隅で語られる程度の話だ。だが、加奈子の弟の証言は、まさにその都市伝説を想起させるものだった。当時中学一年生だったバママミに、白鳥は何気なく魔法少女という言葉をぶつけてみた。すると、確かに反応したのだ。あれは何かを知っているという反応。捜査の最前線に立ち続けることと三十有余年、白鳥が間違えるはずもない。今回、そのバママミが、加奈子とまったく同様に、忽然と失踪したのだ。

熱くなる警部に対して、山下は常識人だった。

「しかし、魔法少女って言ったって、魔法使って魔女と戦っているなら、それが誰にも目撃されないってことはないと思いますけどね」

ギョロリと睨みつける白鳥。

「そんなマンガのような話、信じてるのか？」

「え？ だって、今、警部が……」

「お前も聞いてるだろうが。魔法少女はタブーだということを」

家族から警察に捜索願の出される少女は年間約1万人。そのうち九千人以上の子は自ら帰ってきたり、無事に保護されたりする。そうした事件性のない多数に対して、不幸にして犯罪に巻き込まれた子、外国へ拉致が疑われる子が少数ながらいる。残余の中には自らの意思で逃亡したままの子もいるので、正確な実数はわからないが、

本当に神隠しにあったとしたか思えないような例も少数だが存在する。そのような子たちをさして、警察内部の隠語で「魔法少女になった」と言う。語源が例の都市伝説にあることは明らかだ。しかしながら、その「魔法少女」とは何ぞや、についてはタブーなのだ。捜査員の間に細々と語り継がれるところによると、魔法少女を真剣に追いかけた者は、必ず不慮の事故で殉職すると言う。

もちろん、その意味するところは、

魔法少女には関わるな

だ。

警部は鼻息も荒く宣言した。

「俺は、加奈子の弟の言葉を信じる。バマミの見せた態度を信じる。つまり、魔法少女は実在するんだ。もちろん魔法なんぞ関係ない。タブーってことは、亜矢加奈子もバマミも、警察が触れることのできない何かの犠牲になったということだ」

ようやく決心したようだね

翌日、さやかはいつもと同じように登校した。まどかも仁美もいつもと同じように。

さやかは、母の言動が気にはなったものの、よもや魔法少女を本気で信じているとも思えなかった。だから、とりあえず考えないことにした。ネット上には、母の言ったとおり、いくつかの情報があつたものの、どれもこれも面白おかしく話を紹介しているだけ。とりたてて、さやかの心を動かすような記事はなかった。全て、どうせそんなものは嘘っぱちさ、という書き手の心が透けて見えるものばかり。

いつもと同じ、特に変わったこともないような一日が過ぎた。放課後、さやかは一人で恭介の入院する病院に向かった。魔法少女にはならない、そういう決断をするためだ。そのほうが現実的であることは明々白白であつて、悩むのに疲れた、というのが正直なところだつた。

病院についてみると、玄関先にパトカーが停まっており、患者や見舞い客らが声を潜めて話し合っている。何か事件でもあつたのだろうか。

「あの子は結局無事だったのかね？」

「たぶん。警官が取り押さえたみたいよ」

そんな会話が耳に入る。

恭介の入院する病棟へ向かう。ちょうどエレベーターが一階に降りてきたのが見えたので、ラッキーと思つたら、扉が開いて現れたのは恭介の父だつた。並んで降りてきた医師と深刻そうな顔をして話していた。

「おじさま」

さやかは、いやな予感を抑えつつ、声をかけた。

「あ、ああ、さやかちゃん。先日は会えなくて申し訳なかったね」

まどかと二人で見舞い、すぐに帰ってきた日のことだ。

「いいえ」

おじさんの顔色がおかしい。

「あの、何か、あつたんですか？」

「ん？ ああ、ちょっと、ね」

医師が気をきかせて言った。

「それでは私はいったん戻りますので」

「すみません、本当にご迷惑おかけしました」

深々と頭を下げるおじさん。

「何があつたんですか？」

おじさんは会話の聞こえる範囲に人がいないのを確かめてから、口を開いた。

「恭介が、自殺をはかった」

さやかにとつては、まったく予期もせぬことでもなかった。驚きは小さかった。患者や見舞い客の話から、大事には至らなかつたらしい、とわかっている。

「…無事だったんですか？」

「ああ、とりあえずは、ね」

その時、おじさんの携帯電話が鳴った。

「…私だ。ああ、とりあえず睡眠薬で眠っているよ。怪我はないから、体のほうは問題ない…うん、そうだな、例の話は先方に…ああ、ああ、いや、断ってしまうのはまだ早いから…うん、とりあえず延期ということ。私から連絡するよ…」

そこで、おじさんの顔が悲しみに沈んだ。

「…いや、お前の言いたいことはわかる。私だって、自分の息子を人質に出すようなことは…しかしな…うん、とにかく、恭介の目が覚めたら、また電話する」

漏れ聞こえたかすかな声は女性。おそらくはおばさん、恭介の母だろう。

「ああ、ごめんね」

「いえ」

「とにかく、今は睡眠薬で眠っている。今日のところは、申し訳ないが…」

「…恭介くん、飛び降り自殺でもはかったんですか？」

「驚くおじさん。」

「なぜわかつたんだい？」

「表にパトカー止まってたし、他の人が噂してましたから…」

「そうか、なるほど」

「おじさまは、自殺しようとした原因、なんだと思いますか？」

「…何か、思い当たることでもあるのかい？」

「バイオリンを弾けないなら、人生をリセットしろ、自分の中の怪物がそう言ってるって」

「恭介がそんなことを？」

「黙って首を縦に振るさやか。」

「…なるほど」

「だから、恭介くん、絶望して自殺しようとしたんじゃないと思います。むしろ、希望に満ちて、人生をやり直そうとしたんじゃないかって」

「おじさんはため息をついた。」

「そうか、そういうことだったか…なるほど、さやかちゃんの言うとおりだよ、きつと」

「さやかは、もっと詳しい話を聞きたかったが、おじさんの反応でだいたいのことは想像がつく。」

「絶望してるわけじゃないから、平凡な説得はかえって苛立たせるだけだと思います」

「ああ、そうだね」

「ところで、自分の息子を人質に出すようなことは、って、どういうことですか？」

「ん？ ああ、あの子の将来のことを考えて…まあ、就職先だな」「就職先？」

「あの子の才能に惚れ込んだ音楽関連のベンチャー企業があつてね。バツクにはさる大企業もついているから、と思つたんだが、今となつては…」

「そうですか…」

おじさんは、言い出しにくそうに切り出した。

「実は…その…さやかちゃんには以前、お見舞いに来てくれと言つたんだが、しばらく遠慮してくれないかな」

さやかは黙っていたので、おじさんは続けた。

「…実を言つと、あの子は今、ちよつとした他人の言葉にも過剰に反応するような状態だ。万一、さやかちゃんの一言で、なんてことが起きると、もちろん、さやかちゃんには一切責任がないとしても、ね」

「…わかりました」

おじさんはほつとした表情を見せた。

「とにかく、悟に会つたら、もう一度きつく言っておくよ。自分の娘を放置するな、と」

「とりあえず、今日のところは帰ります」

「ああ。すまないね」

さやかは頭を下げて、その場を後にした。

息子が自殺をはかったというのに、何やらお金がらみの話をするおじさん。駆けつけてこないおばさん。父にきつく言っておく、と言つた言葉に、全然心がこもっていない。

さやかは決心した。

明かりの消えた家に帰ると、自分の部屋に直行、鞆を椅子の上へ置くなり、叫んだ。

「キューバー、聞こえてるんでしょ！」

「もちろんだとも。ようやく決心したようだね」

宇宙人は、ベッドの上にちよこんと乗っていた。

やばいぞ、お前

深夜、杏子は都内の暴力団幹部の自宅を訪れた。

「おお、待ってたんだよ、杏子ちゃん」

五十過ぎ、禿げ上がった頭。手下の前ではいかつい顔をしているのだろうが、今はただのスケベオヤジだった。

「約束、ちゃんと守ってくれたんだね」

「当たり前だよ。シャブからは一切手を引く、杏子ちゃんは騙せないからな」

「何人が破門にしたって聞いたけど？」

「しかたないさ。自分も手を出してた連中は、どうしようもないからな」

スケベオヤジは興奮を隠せない。ふんふん鼻息も荒く、いそいそと服を脱ぎ、ベッドに横たわった。

「さあ、早く！」

「ああ、いくぜ」

杏子はウインドブレーカーを脱ぐでもなく、そのまま、オヤジに向かって手を伸ばした。

「お、おおお…」

体に触れる必要もない。ただ、オヤジの神経を、外から刺激してやるだけだった。

「おおおっ！」

杏子はわずか十分足らずの仕事で一千万円を手にした。札束をシヨルダーバッグに入れ、意気揚々と引き上げようとして、ふと足が止まった。はつと見上げる東京スカイツリー。

地上からの高さ六百三十四メートル、頂上は円形。白い鉄板の上、ワイヤーを通すためであろう、横長の突起の上に座る一人の少女。

「そんなところに座って、誰かに見つかったらどうするつもりだ？
白いマントの少女は振り返りもせず、広大な夜景を見下ろしてい
た。

「…すごいよね、魔法少女って」

杏子は少女の横に座った。青を基調とした、ゲームなどでお馴染
みの女戦士風のコスチューム。しっかり剣まで佩いている。

「あなたも魔法少女？」

顔も動かさずに言う少女。

「まあな」

「素敵だよ。こんなところにも簡単に来られるんだから」

「ま、このくらいの役得はないとな」

「…私、魔法少女になるかならないかでずいぶん悩んだんだけど、
ばかみたい」

「まだなつたばかりか？」

小さくうなづく。

「ほんのさっき」

「なら、喜ぶのはまだ早いぞ」

「そうかもしれないけど、でも、こんな気分味わえるなら、後悔な
んて…」

「そんなこと言っていると、簡単に魔女になっちまうぞ」

少女は初めて杏子のほう顔に向けた。

「魔法少女が魔女になるって、本当？」

「ああ。本当だ」

「ネットにもそう書いてあったけど…どうしてだろ」

「希望と絶望はコインの裏表。コインの表が大きければ、当然裏も
大きい。大きな希望、つまり、奇跡的な願い事を叶えた瞬間に、人
は絶望への不安にかられる。それが魔女を産むのさ」

くすつと少女は笑った。

「なら、私は大丈夫かな。だって、叶えてもらった願い事は、別に
希望でも何でもないから」

「何だ、そりゃ？」

「ふふ…何だかな…魔法でいろんなことができるかと思つて、とっさにやってみたくもないのよね」

「ところであんた、どこから来たんだ？」

「見滝原」

「なんだって！」

驚きの声をあげる杏子。

「…見滝原がどうかしたの？」

寝ぼけたような声。

「暁美ほむらつて知ってるか？」

少女の顔から笑みが消えた。

「なぜその名前を？」

「巴マミの縄張りをあたしに譲る、と言いにきた」

「…何で、そんな勝手なこと言つんだらう」

「それはこつちが聞きたい。そもそもあんた、マミ、巴マミを知ってるのか？」

「もちろんよ。マミさんは立派な人だった。でも、魔女に殺されたつて…」

「暁美ほむらも知ってるよな」

「あいつ、学校に転校生としてやってきたのに、消えちゃったのよ」

「消えた？」

「そう。魔法を使って転校生を装ってただけ。キューベーも、自分が契約した者じゃないって」

「どういうことだ？」

「それこそ、こつちが聞きたいわよ」

「…キューベえと契約してないのに魔法少女、なんてことがあるのか？」

「私に聞かれたってわかるわけじゃない」

「…そりゃそうだ」

そこでようやく、まだ名乗ってもいなかったことに気がつく杏子。

「ところで、あたしは佐倉杏子。あんたは？」

「美樹さやか」

「で、さやかとしては、見滝原を縄張りにするつもりかい？」

「私は…縄張りとかそういうことは全然わからないけど…ただ、あの転校生に勝手なことされるのは納得できない」

「…まだ魔女と戦った経験がないだろ」

小さくうなづくさやか。

「グリーンファッシュについては聞いてるんだろうな」

「うん…まあ、一応は」

「グリーンファッシュを常にある程度確保しておかないと魔法を使えなくなる」

「それも聞いたわ」

「魔女はそうそう現れるもんじゃないんだ。だから、魔法少女は昔からの慣習というか、縄張りを確保するものなのさ。いずれにせよ、暁美ほむらつて女の正体が不明ってことなら、あんたがマミの遺産を引き継げばいい。あたしは文句付けないよ」

「一応、ありがとうって言うべきなのかな」

「そう言ってもらわないとな。こう言っちゃなんだが、暁美ほむらはマミの最後に立ち会ってる。だから、あいつの言葉を信じるってのを大義名分にすりゃ、見滝原はあたしのもんだ」

「…なぜ、私の言うことのほうを信じるの？」

「暁美ほむらは油断ならない、っていうか、とても信用が置けるよ。うな女じゃなかった。それに比べりゃ、あんたは信用が置けそうだ」

「そう…ありがとう」

さやかはゆらりと立ち上がった。杏子はぎよっとした。目に、狂気を見たから。

「私さ、魔法少女になって本当によかったと思うんだ」

「なぜ？」

「だって、普通の人間には絶対にできないこと、できるじゃない」「確かにそうだが、勘違いするなよ。この力は生涯持てるわけじゃ

ない」

「わかつてる。でも、あるうちは楽しまなくっちゃ」
さやかは縁のぎりぎりまで歩いていった。

「杏子さん、またね」

笑いを残し、バツと飛び降りるさやか。

眉間に皺が寄る杏子。

「やばいぞ、お前」

戸籍のない人

翌朝、さやかはすっきりした表情で通学路を歩いていた。

「おはよう、さやかちゃん」

後ろから追いついてきた、まどか。

「おはよう！」

しばらく聞かなかった、元気のいいさやかの声。

「何か、いいことでもあったの？」

「え？ うん、まあね」

「どんなこと？」

さやかはにっと笑った。

「ひ、み、つ」

「え？」

戸惑うまどかに、さやかは右手を差し出した。

その手のひらの上に乗っている飾りのついた青い宝石。

「これって…」

「そう」

「どうして…」

絶句するまどか。

「まあ、いろいろとね。詳しいことはお昼にでも」

「明るいさやか。まどかは足が止まってしまった。」

「先に行ってしまうい、気がついて戻るさやか。」

「ごめん、黙って契約しちゃって」

「…そんなことじゃないの」

「まどかの顔は青白く、体が震えているのが見てわかる。」

「さやかちゃん、怖くないの？」

「え？ ああ、確かに死ぬのは怖いけど、でも…」

「そこで、しばし何かを噛み締めるかのように沈黙。」

「…でもね、命を賭けてもいいくらいのことはあるよ」

「願い事は、上條くんのこと?」

「うん。まあね」

「怪我、本当に治ったの?」

「確認してないけど」

「…そんなことでいいの?」

「何だか、立場が逆になっちゃったね」

「え?」

「ほら、まどかが魔法少女になるって言ってたことあったじゃない。私が願い事は決めたのかって言って」

「…うん」

校門のすぐ手前まで来てしまったので、話はそこまでだった。

昼休みは二人ともこまごまとした用事があって、結局話せないまま終わってしまった。

午後もいつもと変わらない授業が続く。他のクラスメイトは何も変わっていない。もちろん仁美も。しかし、いつもと同じ表情のさやかは変わってしまった。知っているのはまどか一人。

放課後、仁美はまたしてもまっすぐ帰ってしまった。例のお見合いがらみらしいと想像はつくが、さやかもまどかも、問いただすようなことでもなかった。

河原の芝生に腰を下ろす二人。水面に太陽の光がキラキラ反射している。

まどかが重い口を開いた。

「本当に、いいの?」

「今さら取り消せないし、何が何でも生き延びて、卒業するだけのこと。キューベーの話じゃ、そんなに大きな願い事でもないから、二年はかからないだろうって」

「高校受験に引っかけちゃうよ」

「うん、まあ、何とかなるでしょ」

「あの、変な結界中で戦うんでしょ」

「そうだけど、キューベーの話じゃ、別に毎日とか毎週ってわけでもないみたいだし。ただ、魔法の使いすぎには気をつけるってね」
そこまで明るかったさやか表情が沈んだ。

「マミさんが、テレポートを魔女との戦いの時だけだって言うてたでしょ。あれはそういう意味だったんだなって…もっと、たくさん
の事聞きたかったな…」

「私は…」

「言いかけて、顔を伏せるまどか。」

「別にまどかが気にかけることもないよ。完全に私の自己責任で選んだことだから」

「…でも、暁美さん、言つてたじゃない。魔法少女になるなって。なつたら殺すつて」

「さやかの表情が険しくなった。」

「あいつ、他の魔法少女に勝手なこと言つてたんだ」
顔を上げるまどか。

「他の魔法少女に会つたの？」

「うん。あいつ、マミさんがいたこの見滝原をその子に譲るつて」

「何でそんなこと…」

「わかんないよ。だけど、その子も言つてた。あいつは信用ならないんだつて」

夕方の繁華街。買物の主婦や、中学生、高校生などが行き来する。見滝原高校の生徒をこの界限で見かけるのは珍しいが、さまざまな制服の高校生が歩いているので目立つことはない。

「中学生って聞いてたけど、高校生だったの？ 暁美ほむらさん」
ぎよつとするほむら。自分の名前を知っている者など何人もいないはずなのに。

「暁美ほむらさんでしょ」

「いつ現れたのか、ほむらの正面に立っていたセーラー服の少女。」

「…希美ひかる」

「私の名前、なぜ知っているの？」

「巴マミ、ご存知でしょ」

「もちろん。彼女に聞いた、とでも？」

「ええ」

「へえ、写真でも見せられたの？」

言葉に詰まるほむら。

「杏子は騙せたのかもしれないけれど、私には通用しない
対峙する二人を怪訝そうに眺める主婦。

「こんなところでは何だから、ちよつと付き合わない？」

「ごめんなさい。用事があるから」

一歩踏み出そうとして、ほむらの表情が固まった。痙攣する両足。
「どんな用事か知らないけど、キャンセルしてもらおう。手は自由の
はずだから、電話でもメールでもできるでしょ」

「あいにく携帯持ってないんだけど」

「あらそう。持ちたくても持ってない、戸籍のない人が携帯持つのは
難しいでしょうね」

表情の歪むほむら。

「ふふ… 凶星ってわけね。そのへんも含めて、ぜひとも話を聞きた
いわね、暁美ほむらさん」

私の時間は止まっている

すでに日も暮れた商店街。先を歩くひかる。後に続くほむら。

全国的に、昔ながらの商店街は寂れている、シャッター通りだ、などとよく言われる。しかしこの街は、そういったこととは無縁のように人通りも多く、照明も明るく、個人商店も結構賑わっている。ひかるは後ろを振り返るでもなく、どんどん先に進む。逃げようと思えば逃げられるが、ほむらは黙ってついて行く。逃げるよりもひかるから新たな情報を引き出したほうが得策だ、という判断だった。

ひかるは一軒の八百屋の前で立ち止まった。

店頭で大根を並べている店員。

「おばちゃん、二階、借りるね」

振り向いたのは、丸く日焼けした顔、大柄、商号の書かれた紺のエプロン、店員というよりも、八百屋のおばちゃんだ。

「おや、ひかるちゃん、また新しい仲間かい？」

「まあね」

「お茶は自分で淹れておくれよ」

「わかつてる」

おばちゃんは一瞬、ほむらを凝視して、ふっと笑うと、すぐに仕事に戻った。

「いらつしやい」

さっそく客がやってきたので、ひかるとほむらは急かされるように店の奥へ入っていった。

ひかるはまるで自分の家のように、さっさと靴を脱いで下駄箱に入れ、遠慮なく板間に上がる。ほむらも同じように続くしかない。居間のちゃぶ台で帳簿に向かう白髪混じりの男、おそらくはこの八百屋の店主であろう。ひかるとほむらが廊下を歩いていくのにまるで気が付かない様子。ひかるは男に向かって軽く頭を下げただけで

挨拶するでもなく、平然と二階への階段を登る。ほむらは階段の手前で、つい居間のほうに目をやった。

「ああ、気にしないで。おじさんは何事も無頓着な人だから」

「でも…」

「大丈夫。二人とも何もかも知っているから」

「何もかも？」

「そう。あのおばさん、元魔法少女だから」

ほむらは言葉もなかった。

二階の畳敷きの部屋は、電気ポットと急須の乗った四角いテーブルがあるだけで、がらんとしていた。

「ここは、魔法少女のために開放されてる部屋だから、遠慮はいらないわよ」

ひかるは押入れを開けて、座布団を二枚取り出し、一枚をほむらに差し出した。

「喫茶店より、ここなら何でも遠慮なく話せるでしょ」

ひかるが座るので、ほむらも座るしかない。ひかるは押入れの下段から箱を取り出して、饅頭を一個、ほむらに差し出した。

「どうぞ」

「いいの？」

「ええ。お茶菓子として用意してあるものだから」

ひかるは急須に茶葉を入れ、湯を注ぐ。

「地方で孤立してる魔法少女からすると意外かもしれないけど、東京や大阪、福岡ではこうやって魔法少女同士の繋がりが昔から続いているの。私が直接知っているのはその三つだけど、仙台とか名古屋でもあるって話よ」

「…確かに意外だわ」

「あなたはどこから来たの？ 杏子からは見滝原中の一年生だって聞いてたけど」

「私の時間は止まっている、見滝原中の一年生で」
わざと言ってみたが、ひかるは特段の反応をしなかった。

「じゃあ、高校の制服を着ているのはなぜ？」
「中学生よりは高校生のほうが何かと都合がいいから」
「生活指導員とか警官の目には、って意味ね」
「ええ」
「なるほど」
ほむらの前に茶碗を置き、急須から茶を注ぐひかる。
「ありがとう」
「それで、私の時間は止まっている、見滝原中の一年生で、ってど
ういう意味？」

鹿目家。

夕飯の後片付けも終わり、まどかは黙ったまま自分の部屋に引き
上げていった。

詢子は声をかけようとしてやめた。

「どうしたんだい？」

手をタオルで拭く知久。

「やっぱり、まどか、何かおかしいよ」

「君が心配することじゃないさ」

「でも…」

ドアチャイムが鳴った。

知久が室内機に向かう。

「はい」

『夜分申し訳ありません。警視庁の白鳥と申しますが、まどかさん
はいらっしゃいますか？』

「はい、おりますが、何か？」

『巴マミさんの件でお話を伺いたいと思っております』

「少々お待ちください」

詢子は玄関に直行した。戸を開けるなり、ほとんど叫んでいた。

「うちのまどかに何かあったんですか！」

さすがの白鳥も後ろに控えていた山下も勢いに気圧された。しか

し、白鳥は一秒で態勢を立てなおした。

「まどかさんのお母様ですか？」

「そうです！」

息の乱れる詢子。白鳥は警察手帳を示してから、話を続けた。

「ご心配なく。まどかさんに何かあったわけではありません。行方不明になっている巴マミさんの件でちょっとお話を伺いたただけです」

「ともえまみ？」

「お母様はご存知ないですか」

「いいえ」

知久に呼ばれたまどかが二階から降りてきた。

「ああ、まどかさんですな。私は巴マミさん行方不明事件の担当、白鳥です。巴マミさんはご存知ですね」

まどかは声が出ない。恐る恐る、首を縦に振った。

「最後に会ったのはいつですか？」

「先週の土曜日……」

まどかが言い終わらないうちに白鳥は話を続けた。口調はゆっくりと。

「その日の午後一時頃、まどかさんは美樹さやかさんと一緒に巴マミさんのマンションを訪れた、間違いありませんね」

また首を縦に振る。

「午後四時頃、まどかさんと美樹さんはマンションを出た。その後、五時頃にマミさんは買い物カゴを持って外出、五時半頃近くのスーパーで買物をし、六時頃に荷物に入ったカゴを持って戻っている。それ以降、マミさんは防犯カメラに写っていない。あのマンションの出入り口は二箇所、すべての非常階段にもカメラはあるのですが、どのカメラにも写っていない」

そこまで言って、白鳥は懐から紙を取り出した。

「この人、ご存知ありませんか？」

まどかは一目見るなり息を呑み、身を引いた。

そう、紙にプリントアウトされていた映像、そこに映る人物は、
曉美ほむら！

あの子は決して馬鹿じゃない

「ご存じなんですネ」

白鳥が抑揚を抑えた口調で言う。

「わ、私…言えません」

「言えない？」

白鳥の言葉に鋭さが交じる。

詢子は白鳥に向かって言った。

「その子なら、先週の日曜日、訪ねてきました」

白鳥の目がぎらりと光る。

「間違いありませんか？」

「ええ。まどかと一緒にさやかちゃんの家に行くと。でも、その子がどうかしたんですか？」

「その時のこの子服装、覚えていらつしやいますか？」

「この写真と同じ、制服でしたけど」

「なるほど。実はこの写真の子ですが、見滝原中学校に確認したところ、該当者がいないんです」

目をつぶり、うつむくまどか。

「それって…」

「制服を着ているが、見滝原中学の生徒ではない、ということですよ。詢子はまどかに険しい視線を向けた。

「まどか、知っていることがあったら、正直に言いなさい。この子は誰なの？」

まどかはゆっくりと首を横に二回振った。

「言えない」

「まどか！」

声を荒げる詢子。

「まあまあ、お母さん、落ち着いて」

白鳥はまどかに体を向けた。

「まどかさん、この写真の子は、土曜日の午後八時頃、マミさんのマンションに入って、十時頃にいったん出ている。ところが十分後に慌てた様子でまたマンションに入った。その後、カメラには写っていない。つまり、カメラの映像からは、彼女はマンションを出てないことになる。にもかかわらず、日曜日に訪ねてきた。つまり、防犯カメラに写ることなくマンションから出た、ということですよ。巴マミさんの失踪と関係があるかもしれないんです」

「まどか、言いなさい。この子は誰なの？」

迫る詢子。まどか、両手で耳を覆って、首を左右に振るばかり。

と、その時、白鳥の携帯電話機が鳴った。

「失礼。白鳥ですが」

白鳥の表情が一変した。

「：わかりました。すぐに帰庁します」

携帯電話機を閉じて、懐にしまう。

「申し訳ありません。今日のところはこれで引き上げさせていただきます」

「あの、その、うちのまどかが何か事件に巻き込まれているということでしょうか？」

母親としては当然の心配だ。

「新たな事実も判明しましたので、日を改めて伺います。いずれにせよ、一人の女子中学生が行方不明になっておりますので、警察としても放置できません」

背を向けてしまったまどか。

「まどかさん、また話を伺いに来ます」

白鳥は後方に控えていた山下に顎で引き上げることを指示した。

「夜分に申し訳ありませんでした」

二人は深く頭を下げ、立ち去った。

キツとまどかを睨みつける詢子。

「まどかつ、これは事件なんだ。人が一人行方不明になってるんだ。何を隠している！」

背を向けたままのまどか。

「私、何も知らない」

「嘘をつくんじゃない！」

強引に振り向かせようと手をかけた。

「まあまあ、落ち着いて」

知久がその手を握った。

「落ち着いてる場合じゃないでしょ！」

「君が興奮してどうなる？ まどか、とりあえず二階に上がりなさい」

まどかは逃げるように二階に上がった。

「ちよつと、あなた！」

微笑みを絶やさない知久。

「心配しなくても、まどかは逃げたりしない。君がいきり立って問い詰めたら、まどかだって言うことも言えないじゃないか」

夫の言葉に、表情の緩む詢子。

「だけど、まどかは何かの事件に巻き込まれてるのよ。犯人をかばっているかもしれないのよ」

知久はにこつと笑った。

「あの台風の日、君のお義父とお義母さんは、そんなふうにも目を三角にして君を問い詰めたかい？」

「それとこれとは話が違う！」

「違わないよ。もし、お義父とお義母さんに問い詰められたら、君はあの時のことを全て正直に話したかい？」

「そ、それは……」

「同じことだ。今、君がまどかに対して抱いている不安、不信、あの時、お義父とお義母さんが君自身に抱いたとしても何も不思議じゃないだろ。あの時、君のお腹にはまどかがいたんだ。それでもお義父とお義母さんは、君を、見ず知らずの僕まで信じてくれたじゃないか。何も言わなかったじゃないか。今度は、君がまどかを信用してあげる番じゃないのかな？」

勢いの削がれる詢子。

「だ、だけど、一人女の子が行方不明になってるのよ。まどかはニセの生徒と一緒に出かけてるのよ。何か事件に巻き込まれてるかもしれないのよ」

「確かに、そうかもしれない。だけど、もしもこれが重大な事件で、まどかが犯人を知っているなら、あの子は決して馬鹿じゃない、必ず話してくれるはずだ」

その頃、さやかはショッピングセンターにいた。まどかと二人で初めて魔女の結界に取り込まれた、あの場所だ。

駅から電車に乗って、恭介の怪我がどうなったか確かめに行ってもいいのだが、興味はなくなっていた。

ただ何となく、初めてマミと出会った、この場所に来ただけだった。

あの日、マミと一緒に座ったカフェテラス、その席は親子連れが座っていた。両親と小さな女の子一人。さやかは、ありし日の自分を思い出した。父のパリ公演で家族三人一緒に出かけた、もちろんさやかにとっては初めての海外旅行。見るもの聞くもの、全てが珍しかったあの記憶。パリのカフェで飲んだ紅茶の味。コーヒーマスターは大人のものだと言っていた父も母。とっても優しかった。本当に幸せだった。

突然、女の子が泣き出す。我にかえるさやか。びっくりするが微笑みを絶やさない母親。泣き出した原因がわからず、とにかくあやす両親だが、さやかにはわかっていた。

あの時、結界の出現した工事中エリアに歩いていくと、案の定、再び魔女の気配。

今度はさやかに恐れるものはなかった。結界は、立ち入り禁止の立て看板の向こうだ。コーンとコーンバーが置いてあるだけ。さやかは人目がないのを確認して、コーンバーを外して、中に入った。白い布とベニヤ板で覆われた工事箇所を一步一步進むと、急に視界

が暗くなった。それでもさやかは歩みを止めなかった。

カツとオレンジ色の光が差しきて、狭く細長い路地のような場所に立っていた。左右は高い壁。窓があったり、途切れた階段があったり、ビルの外壁のようだ。二十メートルほど先で、鞆をつく人影。逆光の中、小さな女の子が鞆をつけていた。表情は見えない。何か歌っているようだが、よく聞こえない。

さやかはソウルジエムを掲げた。一瞬にして、変身した。剣を抜き、構える。

鞆をつけていた女の子がこちらに気がついて、鞆を両手で抱えた。さやかが一步踏み込むと、女の子は一步退いた。

本当に魔女なのか、と剣を降ろした瞬間、女の子の影が広がった。枝分かれした何本もの触手が襲ってきた。しかし、さやかには余裕があった。剣の一振りです本の触手を切り落とし、あっという間に全ての触手を切って捨てた。

女の子の影はしばらくで消えた。女の子は鞆を持ったまま逃げ出した。

「待ちなさい！」

さやかは、バツとマントを広げた。中から現れる無数の小さな剣。一気に女の子目がけて飛ぶ。

しかし、途中で全て失速して墜落してしまった。

「あんな稚魚に本気になって、どうするつもりだい？」

真正面に現れた赤いコスチュームの少女。見覚えがあった。

「…佐倉杏子さん、だっけ？」

「へえ、覚えていたようだね」

その間に、女の子は一直線に走り去って、見えなくなってしまうた。

「あの子、魔女なんですよ」

「まあな。だが、今倒してはもつたいたい」

「もつたいたい？」

「そうさ。もう少し泳がせておけば、呪いを溜め込んで成長する。

だから稚魚なのさ」

「呪いを溜め込んで成長したら、どうなるの？」

「どうなるって？ 何の話だい？」

「ママさんが言ってた。魔女は自分が抱え込んだ呪いの分だけ人々に災厄をもたらす、って。早めに倒しておいたほうがいいじゃない」

「ママの言葉はともかく、それじゃ、得られるグリーンファッシュはゴミみたいなもんだ」

さやかは、一度収めた剣に手をかけた。

「立派なグリーンファッシュ欲しさに、他の人に迷惑かけてもいい、って言うの？」

「迷惑、なんてのは、あんたの一方的な物の見方に過ぎないんだぜ。当人は迷惑と思っていなくてもいいかもしれない」

「なんですって？」

杏子はぱつと懐から何かを取り出した。

緊張するさやか。しかし、杏子の手にあつたのは焼き芋だった。

パクツと食べる杏子。

「悪いけどさ、あんたと喋ってるって焼き芋冷めちゃうんだよね。納得したら、さつさと引き上げてくれない？」

「納得できるわけないじゃない！」

杏子は焼き芋をパクパクと全部食べてしまった。

その間、動かなかったさやか。

「やれやれ、せつかく逃げる時間を与えてあげたのに、無駄にしちまったようだね」

魔法少女の素質だけは充分

「逃げるですって？ 冗談じゃない。あなたのような自分勝手な人が同じ魔法少女だなんて、信じられない」

杏子の手にぶわつと現れる銚。さやかは剣よりも大きく見た目にも凶々しい。

「信じられないなら、どうしようって言うのさ」

「それに、一つ気になることがあるの。あなた、本当にマミさんを知ってるの？」

「ああ。マミはかつて一緒に戦った仲間だからな」

「袂を分かったのはなぜ？」

くくくと杏子は笑った。

「さすが、お上品な見滝原中学の生徒だけのことはある。こんなときでも文学的な言葉を使うんだな」

剣を握った手に力が入るさやか。

「マミさんがあなたと別れたのも当然って感じよね」

「へえ、あなた、マミと何年付き合ってたんだい？ マミの何を知ってるんだい？」

「少なくとも、マミさんはあんたみたいに自分勝手じゃなかった！」

あははと声を上げて杏子は笑った。

「ははは…よくわかったよ。あなたがマミのことを何も知らないってことがな」

「そういうあなたは知ってるって言うの？」

「もちろん。マミとは小学五年生の時からの付き合いだからな。それに、あんた中一だろ、先輩に対する態度がなってないぞ」

「あんたも中三だつて言うの？」

「マミより一つ下だったけどな。それでも魔法少女歴丸三年。昨日今日なつたあんたとは、格が違うんだよ」

杏子は銚を背中に回して肩に乗せた。

「マミの知り合いだって言うから、見滝原をあんたに譲るつもりだったけど、そうはいかなくなった。あんたみたいに素直じゃない女に任せたら、マミが身を張って守ってきた秩序ってやつが壊れちゃう。それじゃマミも浮かばれない。悪いが、暁美ほむらの言葉に従わせてもらおうよ」

「嘘よ」

「嘘？」

「あんた、マミさんの名前を知ってただけで、本当は何も知らないんでしょ」

「困ったもんだな、思い込みの激しい女は」

ゆつくりと、銚を構える杏子。さやかの顔に向ける切っ先。

「普通なら、いいかげん気がつくはずだけどな。ここはいったん引くべきだと。気がつかない女には体でわからせるしかない」

ベッドの上でひざを抱いて丸くなるまどか。

どうしてよいかわからず、頭がパンクしそうだった。こんな時、さやかがいれば。

「鹿目まどか、鹿目まどか！」

宇宙人の声。

はっと首を上げると、窓に宇宙人が佇んでいた。

「鹿目まどか、美樹さやかが危ない」

「さやかちゃんか！」

自分の事など吹き飛ばすまどか。

「僕の手につかまって」

宇宙人が白く可愛い前脚を伸ばした。

まどかがそっと握ると、全身一気に引っ張られ、重力も光も消えた。

「ヒッ……」

声を出す暇さえなかった。

八百屋の二階、テーブルを挟んで対峙するほむらとひかる。

ひかるの顔には今、困惑の色がありありと浮かんでいる。

「…常識的にはとても信じられないけど、嘘を言っていないことだけはわかる」

ほむらの目を見た。

「だけど、それが本当なら、あなたという人は…」

『望美ひかる』

はっとする二人。

「あら、キュウベえ、久しぶりね」

『望美ひかる、佐倉杏子が他の魔法少女に戦いを仕掛けた』

ひかるは、ふう、とため息をついた。

「そんな事、私に報告しても意味ないでしょ」

『我々は今、望美ひかる、君のそばには近寄れない。暁美ほむらが結界を張っているからだ』

ほむらに視線を送るひかる。

「…なるほど」

ほむらは苦々しい顔をして言った。

「相手は、美樹さやか」

『君は、なぜそんなことを言うんだい？ 暁美ほむら』

「問答無用」

ほむらは消えた。跡形もなく消え去った。

さすがのひかるも呆気に取られるしかなかった。

さやかも剣を抜いた。

「体でわからせるって、どういうこと？」

「こついうことさ」

ニツと笑う杏子。驚愕のさやか。

「あつっ！」

下腹部を手で押さえ体勢が崩れる。剣が滑り落ちて、派手な音をたてた。

「あっ…くっ…ああっ…」

「これでも、相当手加減してやってるんだぜ」

急に攻撃が止んで、荒い息の中、杏子を睨みつけるさやか。

「今度は上だ」

「あっ…あああ…」

両腕で胸を抱きしめるさやか。しかし杏子の攻撃は容赦ない。

「ああ…くう…」

また、すっと攻撃が止む。

「男に抱かれたことなんかないんだろ。もしかして、初めての快感だったか？」

さやかの顔に怒りが渦巻く。

「こんなことで…こんな、ことでえ！」

叫ぶと同時に、全身から放たれる青い光。

おお、と杏子も軽く驚いた。

青い光の乱舞する中、力の漲ってくるさやか。呼吸も落ち着いてくる。

「へえ、なかなかやるじゃないか」

杏子は余裕の表情で眺めていた。

落ちた剣を拾い上げるさやか。

「もう、同じ手は食わないわよ」

剣を下段に構え、完全に戦闘モードのさやか。

「日が浅いわりには、なかなか堅固な防壁張ってるな。たいしたもんだよ。あんた、魔法少女の素質だけは充分だ」

「さやかちゃん！」

まどかの声。後方から聞こえたが、さやかは振り返らなかった。

「何で来たの、あんた！」

「だ、だって、キューベーさんが…」

「余計なことしないで」

ズバツと現れる結界、それは鉄格子のようにはっきりと見えた。

「さやかちゃん！」

さやかはまったく無視して、杏子から視線を外さなかった。

「戦いの基本だけはわかってるようだな」

感心してみせる杏子。

「まさか、あんたの差し金じゃないでしょうね」

「知らないね」

「女性を平気で辱めるような人間、絶対に許さない」

それには及ばないわ

結界の向こう側でおろおろするまどか。

杏子はそれを見て、ぷつと笑った。

怒りが増幅するさやか。

「後ろの子、あなたの友達だろ、うるたえちゃって、可愛いそうに」
それを聞いて、さやかは強引に不敵な笑顔を作った。

「つまらない心理攻撃よね。あんたがとことん卑怯だってことは、
よくわかったけど」

鉾を立て、やれやれ、と手を大げさに広げる杏子。

「あんたさ、根本的に勘違いしてない？ 魔法少女の戦いはスポー
ツじゃないんだぜ。命がけの戦いにルールなんてあるはずないだろ。
卑怯もくそもないんだ。股間蹴りでも頭突きでも、何でもありなの
さ」

「弱い者ほど、反則技に頼るものよね」

「反則技？ ふ…まいったな、こりゃ。お前、死ぬぞ」

杏子の目つきが変わった。殺意は本物だ。

「私を殺すとも言っの？」

「ああ。お前がさっき、殺そうとしたように」

「殺そうとした？ 私が？」

「そうさ。さっき、小さな女の子を殺そうとしたじゃないか」

「あれは魔女だって！」

「だから、人間なんだよ。魔女はな！」

驚くさやか。飛び込む杏子。

うなりを上げて振り下ろされる鉾、受ける剣。

「あくまで卑怯な手を使っつもりね！」

「馬鹿かお前は」

バツと離れて再び間合いを取る二人。

「あたしもさ、無益な人殺しは趣味じゃない。悪いが、腕一本置い

てってもらつよ。そうすりゃ戦いも無理つてもんだ。魔法少女は引退して、普通の生活に戻るんだな。不自由だろうが、そいつは高い勉強代つてことで諦めな」

「つまらない脅し。人を殺したことなんかなくせに」

「殺したよ」

杏子の表情が一瞬緩んだ。

「親父をね」

さすがにギョツとするさやか。

「人を殺すことが究極の悪だとも思ってるのかい？ だとしたらとんだ勘違いだ。人間にはね、他人を殺したいって衝動があるんだよ。あたしにも、もちろん、お前にも！」

「あ、あんたと一緒にしないでくれる！」

「まあ、お前には無理だろうな。神の世界に善悪は存在しない。そいつがわからない限り魔法少女は卒業できない！」

「神の世界ですって？ 新興宗教でも始めるつもり？」

「どだい無理だったんだよ。お嬢様のお前には、な！」

斬り込む杏子。受けるさやか。

銚と剣、飛び散る火花、銚の一振り、風を呼び、剣の一振りは風を切る。

「やめて！ 二人ともやめて！」

まどかが叫んでも、二人が気がつくはずもない。

杏子の銚はさやかの左腕を狙う。辛うじて防ぐものの、さやかの劣勢はどうしようもない。防戦一方のさやかに対して、杏子は余裕たっぷり突きを繰り出す。さやかは体を捻ってかわそうとした。

「さやかちゃん！」

杏子の突きがさやかの足元に。地面を抉る銚。足を跳ね上げてぎりぎりかわすさやか。

ふっと笑う杏子。さやかは後ろに飛んで間合いを取った。

「よかわしたな」

「左腕ばかり狙ってれば、フェイントなんて見え見えよ。敵を無力

化するなら腕より足、知らないとも思ったの？」

「なるほど。ただのお嬢様じゃなかったってわけだ」

杏子はすっと鉾を立てた。

「どうだい？ 感じたかい？」

「感じたって、何を？」

「人殺しは快感、ってことを」

「馬鹿なこと言わないで！」

「人殺しが禁じられているのはそれが悪だからじゃないんだ。禁じなかったら、殺し合いで社会が成立しなくなるからなんだよ」

「…だから、何だって言うの？」

「マミの戦い、見たことあるんだろ？」

「あるわよ。それが何だって言うの？」

「なら、お前はその目で見たんだ。マミの人殺しを」

「それで私を動揺させるつもり？ 馬鹿馬鹿しい」

「事実を言うてるだけさ。魔女は全て人間。魔女を殺すってことは人殺しなのさ」

「だ、だから、何だって言うのよ！」

「お前に出来るのか？ 人を殺して自分が生き延びるってことが
ふうつと息を吐くさやか。」

「…そうきたわけね」

さやかは剣を体の正面で立てた。

「つまり、あんたも魔女だってことよ！」

さやかから切り込んだ。受ける杏子。

剣と鉾の激しい打ち込み合いは互角だった。杏子の表情からも余裕が消えた。

まどかは、足元に佇んでいる宇宙人に訴えた。

「やめさせてっ！ 魔法少女同士が戦うなんてひどいよ！」

「我々にはどうすることもできない」

「魔法使えるんでしょ！ だったら！」

「我々にはどうすることもできない。だが、鹿目まどか、君になら

できる」

声にならない声をあげるまどか。

「魔法少女同士の戦いを止められるのは、魔法少女だけだ。あの戦いを止めることが、鹿目まどか、君の願いならばね」

目を見開くまどか。

「私……」

互角の戦いを繰り広げるさやかと杏子、しかし、経験の差が明暗を分けた。

一瞬の隙をついて、杏子の入れた蹴りがさやかの腹を捉え、さやかは吹っ飛んだ。

地面に叩きつけられるさやか。杏子は壁を使って高く飛んだ。

「ばいばい、美樹さやか！」

急降下する銚。動けないさやか。

まどかは叫んだ。

「私っ、魔法少女になるからっ！」

『それには及ばないわ』

暁美ほむらの声。一陣の風。

杏子の銚が地面を貫いた時、さやかの体はそこになかった。

目を疑う杏子。さやかも驚く。

二人の間に、紫のコスチュームに身を包むほむら。

まどかには、さやかが瞬間移動したように見えただけだった。

避けて通れぬ神の摂理

知久は階段を静かに登った。

「まどか、起きてるかい？」

半開きのドア、中の明かりは消えている。

部屋に入ってみると、誰もいなかった。

明かりを点け、すぐに消した。

階段を降りてくる知久。居間で詢子が待っていた。

「どうだった？」

「ちゃんと着替えて寝ていたよ」

「そう」

「今夜はもう、そつとしておいてあげよう」

「でも……」

「まどかだつてショックを受けてるんだ。今から起こして、問い詰める気かい？」

不安いっぱいの詢子。

「君に、そんな顔は似合わないよ」

「え、あ、ちよつと！」

「まどかは、あの時の子だ」

「ん……」

夜も更けて、山下運転の車が桜田門本庁舎に戻ってきた。車寄せに大臣車が停まっている。待機しているSPが数人。首をひねる山下。

「こんな時間に、誰でしょうね」

「わからん」

白鳥は車を降り、山下はそのまま地下駐車場へ向かった。ちらつとSPの顔ぶれを確認する白鳥。

(法務大臣か?)

エレベーターに乗り、管理官室に直行した。
ドアをノックする。

「白鳥です」

『どうぞ』

管理官の気怠い声。元々快活な人物ではないが、声の調子に違和感を覚えた。

「失礼します」

ドアを開けると、応接椅子に座る、見覚えある人物。

「お待ちしてましたわ、白鳥さんですね」

薄紫色の上品なスーツに身を固めた女性、国会中継などでもお馴染みの鞠花法務大臣だった。

「は…」

あまりに予想外だったので、曖昧な声が出てしまった。

「どうぞ、かけてください」

自分の正面の椅子を手で示す。

「失礼します」

状況はわからないが、管理官は机に向かったままだ。

「もう一方は?」

管理官に視線をやる大臣。管理官の四角い顔は緊張でガチガチだ。
「ただいま車を駐車場に入れに行っておりますので、まもなく参ると思います」

白鳥が答えると、大臣は穏やかな微笑みを返した。

「そうですか」

管理官は何も言い出しそうにない。白鳥は意を決して口を開いた。
「まことに僭越ではありますが…」

大臣は軽く手を差し出した。

「今日は、法務大臣の立場ではなく、一私人、鞠花順子として、白鳥さんと山下さんにお話があつて来ました」
「どういう意味でしょうか?」

ノック。

『山下です』

管理官を見る大臣。

「あ、ああ、どうぞ」

「失礼しま…す」

ドアを開け入ってきた山下も、予想外の光景に動きが止まった。

「山下さんですね。どうぞ、かけてください」

大臣の指示のまま、白鳥の横に腰を下ろす山下。

「山田さん、席、外していただいけませんか？」

「はっ」

管理官は大仰に返事すると、そそくさと部屋を出ていった。

管理官の靴音が遠くなるのを確認して、大臣は切り出した。

「私、腹の探り合いということは苦手ですから、単刀直入に申しませ。お二人は、魔法少女について調べていますね」

山下は大げさに驚いたが、白鳥は眉間に皺を寄せ、テーブルの上の両手を組んだ。

「大臣が、なぜそのことを？」

「今進めている事情聴取は、全て中止してください」
間髪入れず白鳥は答えた。

「それはできません」

「では、総監を通じて職務命令を発しますので、そのおつもりで」
…大臣は、女性ですか？」

大臣は、予期せぬ言葉に一寸驚き、しかしすぐに微笑みを取り戻した。

「私、六十五年生きてきましたけど、男性に間違えられたのは初めて」

「大臣！」

白鳥は大声で叫び、大臣の目を見据えた。

「戦後だけでも、いったい何人の少女が行方不明になっているんですかっ！ 魔法少女になって！」

大臣は微笑みを絶やさなかった。

「そう、あなたも勘違いされているのね」

「勘違い？」

「ええ。あなたは、魔法少女を、高級売春クラブとか、児童ポルノ組織、あたりと置いていませんか？」

「違うとおっしゃるのですか」

「もちろん違います。行方不明になった子たちのほとんどは、魔女との戦いで亡くなったんです」

「は……」

あまりの荒唐無稽さに、百戦錬磨の白鳥も呆けてしまった。

「そうねえ、言葉で言ったところで信じてもらえないでしょうから、恥ずかしいけれどお見せしましょうか」

白鳥も山下も、生まれて初めて、信じられない光景、というものを見た。

眼の前に、セーラー服を着た少女が座っていた。

「私もかつて、魔法少女でしたから。さすがに、戦闘服は勘弁してくださいね」

少女は、間違いなく鞠花順子本人だ。

「私も、中学生の頃は魔女と戦っていました。当時はまだ東京にもバラックが残っていましたし、治安も今よりずっと悪かったから、たくさん魔女が現れたわ。戦いは命がけ。私の知る限りでも三人の魔法少女が亡くなった。幸い、私は生き延びることができた。元々楽天主だったのが幸いしたんでしょうねえ」

「……ま、まじよとは、いったい何者ですか」

最低限のことを尋ねる白鳥。山下には言葉を発する気力さえない。「文字通り魔女。当時、青線赤線ではそれこそ毎日のように魔女が現れていたのよ。過酷な現実の中で絶望する女性が本当に多かった。だから私も、毎日のように新宿に出動してたわねえ。一晩で五人の魔女を倒したこともあった。魔女の現れる社会環境も過酷なら、魔法少女の側も過酷だったわ。親の目を盗んで夜な夜な出動するんで

すもの……」

大臣はしばし沈黙、昔の思い出に耽っているようだった。

「……ごめんなさいね。つい思い出してしまつて。でも、そんな状況だったから、魔法少女の側も大いに鍛えられたわ。最近の魔法少女は生存率がずいぶん低くなつてしまつたけど、当時は八割から九割の子が無事卒業したわね」

「……そんな戦いが、人知れず行われているなどと……」

さすがの白鳥も、何を質問していいのかすらわからぬほどに、混乱していた。

気がつくと、大臣は元の姿に戻っていた。

「いずれにせよ、今も魔法少女の戦いは続いているのよ。終戦直後に比べたら、本当に細々だけれど。人の絶望がある限り、魔法は産まれ、魔法少女も必要となる。これは、避けて通れぬ神の摂理」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9493v/>

魔法少女まどか マギカ INDIVIDUAL ORIGIN

2011年11月17日03時14分発行